

109. 哀歌

哀歌は、前 586 年のバビロン軍によるエルサレム陥落と南ユダ王国の滅亡がテーマです。著者はエルサレムが陥落し、民が苦しみ、捕囚となってバビロンに連れて行かれる状況を悲しみ嘆きました。そのためこの書は哀歌と呼ばれます。著者は伝統的にエレミヤと考えられています。1 章から 4 章は、最初の節がアルファベット順に始まるいろは歌です。1 章、2 章、4 章はヘブル語アルファベットの数に合わせて 22 節となっています。3 章は 3 節ずつが同じアルファベットから始まり、66 節あります。

エルサレム：その過去と現在 1 章

エルサレムはかつては女王でしたが、今は奴隷となりました。過去の栄光と比べると今や苦難と苦悩のうちにあります。神は正しい方であり、エルサレムの罪に対する正しいさばきを行われました。今や、エルサレムを慰める者はだれもいません。「ああ、ひとり淋しく座っている。人で満ちていた都が。彼女はやもめのようになった。国々の間で力に満ちていた者、もろもろの州の女王が、苦役に服することになった。彼女は泣きながら夜を過ごす。涙がほおを伝っている。彼女が愛する者たちの中には、慰める者はだれもない。その友もみな裏切り、彼女の敵となってしまった。」1:1-2

シオンに対する神の取り扱い 2 章

神の怒りはシオン(エルサレム)に示されました。神は宮殿も神殿も敵によって破壊し、宗教行事を取りやめ、王、祭司、預言者を退けられました。エルサレムの人々が苦しむのを、敵はあざけります。エルサレムの苦しみを見て、エレミヤは悲しみ嘆きます。「ああ、主は娘シオンを御怒りの雲でおおい、イスラエルの栄えを天から地に投げ落とし、御怒りの日に、ご自分の足台を思い出されなかった。」2:1「主は、園にするように、ご自分の幕屋を荒らし、例祭の場所を滅ぼされた。主はシオンでの例祭と安息日を忘れさせ、激しい憤りをもって、王と祭司を退けられた。」2:6

苦難の分析 3 章

エルサレムの民は神の激しい怒りを受けて苦しみました。エルサレムの栄光は去りました。しかし、あわれみ深い神は残りの民を起こし、イスラエルは滅び失せることはありませんでした。主の真実、慈しみ、救いこそイスラエルの希望です。それゆえ、悔い改めて主に立ち返ろうとエレミヤは呼びかけます。「実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。『あなたの真実は偉大です。主こそ、私への割り当て地です』と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主に望みを置く者、主を求めるたましいに。主の救いを静まって待ち望むのは良い。」3:22-26

罪が苦難の根拠である 4 章

エルサレムでは剣を免れた者も極度の飢えで苦しみました。エルサレムの罪はソドムの罪よりも大きなものでした。なぜならソドムは突然の火と硫黄によって滅んだのに対し、エルサレムの苦しみは長く続いたからです。偽預言者と偽祭司に導かれたエルサレムは、正しい人たちの血を流してきました。それゆえ彼らは滅び、捕囚の民となりました。「乳飲み子の舌は渴いて上あごにへばり付き、幼子たちがパンを求めても、割いてやる者もない。…娘であるわたしの民の咎はソドムの罪よりも大きかった。人の手によらずに、一瞬で崩壊したソドムより。…これはその預言者たちの罪、祭司たちの咎のためである。彼らは、その町のただ中で、正しい人たちの血を流した。」4:4, 6, 13

苦しむ者の祈り 5 章

エルサレムの民は罪のゆえに、バビロン捕囚となり、苦しみの中にあります。神殿は荒れ果て、そこをきつねが歩き回っています。しかし、天にある主の王座はとこしえに続きます。エレミヤはエルサレムの回復は、悔い改めと信仰による神との関係の回復であることを覚え、神に祈ります。「主よ。あなたはとこしえに御座に着かれ、あなたの王座は世々に続きます。…主よ、あなたのみもとに帰らせてください。そうすれば、私たちは帰ります。昔のように、私たちの日々を新しくしてください。あなたが本当に、私たちを退け、極みまで私たちを怒っておられるのでなければ。」5:19, 21-22

110. エゼキエル書(1)

エゼキエル書はエゼキエルによって書かれた預言書です。彼は前 597 年の第 2 回捕囚の際に、エホヤキン王と共にバビロンに捕らえ移されました。エゼキエルを始めとする捕囚民は、バビロンの東側ケバル川ほとりのテル・アビブに定住しました。彼らは土地を与えられ、かなりの自由と機会を与えられて生活し始めました。バビロンに来てから 5 年後にエゼキエルは預言者として召され、バビロンの捕囚民の中で預言しました。その内容はエレミヤの預言と共通し、神のさばきによるエルサレムの滅亡とその後の回復です。当時偽預言者はバビロンの地でも、捕囚民は早期に帰還できると預言しました。それに対してエゼキエルは、神は南ユダをさばき、バビロン軍によってエルサレムは滅びると預言しました。エゼキエル書は、神のことばと幻と象徴的行動によって預言する特徴があります。

1. エゼキエルの召命と使命 1:1-3:21

エゼキエルがバビロンに連れて来られて 5 年後の前 593 年に、預言者としての召命を受けました。「第 30 年の第 4 の月の五日、私がケバル川のほとりで捕囚の民と共にいた時、天が開け、私は神々しい幻を見た。それはエホヤキン王が捕囚となってから 5 年目の時であった。その月の五日に、カルデア人の地のケバル川のほとりで、ブジの子祭司エゼキエルに主のことばが確かに臨んだ。その場所で主の御手が彼の上にあった。」1:1-3 火を伴う輝く雲の中に 4 つの不思議な生き物が現れました。4 つの生き物には輪があって、生き物と共に輪も動きます。また大空のはるか上に王座に似たものがあり、そのはるか上には人間の姿に似たものがありました。エゼキエルはそこに主の栄光の姿を見ました。

エゼキエルは主の御声を聞きました。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの民に、わたしに反抗する国民に遣わす。…あなたは彼らに『神である主はこう言われる』と言え。」2:3-4 「人の子よ」というエゼキエルへの呼びかけはこの書の独特な呼びかけです。預言者も神の前では人間としての小さな存在であることが表されています。エゼキエルは巻物を食べて、捕囚の民に告げるように命じられました。神はエゼキエルに「彼らを恐れるな」と励まし、幻は終わりました。その後 7 日間エゼキエルが茫然としていると、主のことばがありました。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞き、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。」3:17 見張り人は民に警告しなければ自分の責任となる重い任務を背負っています。

2. エルサレムの運命 3:22-7:27

その後エゼキエルは、主が命じる時だけ語り、それ以外は話せなくなりました。そして粘土板にエルサレムの町を描き、包囲網を造り、エルサレムを攻め囲むようにし、エルサレム陥落のしるしを造ります。さらに 390 日間左脇を下にして寝、それによって北イスラエルの刑罰を示しました。次に 40 日間右脇を下にして寝、南ユダに臨む審判を表しました。またその間一日 228 g のパンと 633cc の水を飲むようにしました。パンはイスラエルの汚れを表す人の糞で焼くようにと言われますが、神は牛の糞で焼くことを許されました。これはエルサレムが敵に包囲された時の窮乏を表しました。「人の子よ。わたしはエルサレムで、パンの蓄えをなくそうとしている。彼らは恐る恐る量ってパンを食べ、おびえながら水を量って飲む。」4:16

その後、エゼキエルは髪とひげをそり、三分の一を焼き、三分の一を剣で打ち、三分の一を風に乗せて散らしました。これは住民の三分の一は飢餓と疫病で死に、三分の一は剣に倒れ、三分の一は四方に散らされ、剣が彼らを追うことを示していました。神はエルサレムを徹底的に滅ぼされます。エゼキエルの預言には「そのときあなたがたは、わたしが主であることを知る」ということばが、多少の変形の言葉も含めて何度も出てきます。「刺し殺された者があなたがたの上に横たわる。そのときあなたがたは、わたしが主であることを知る。」6:7 「彼らのうちの刺し殺された者たちが…あらゆる偶像に芳ばしい香りを供えた場所に横たわる時、あなたがたはわたしが主であることを知る。」6:13 主のさばきの時、彼らが信じた偶像の神は彼らを助けませんでした。「わたしが、彼らの行いにしたがって彼らに報い、彼らのやり方にしたがって彼らをさばく時、彼らはわたしが主であることを知る。」7:27

111. エゼキエル書(2) 8－11章

1. エルサレムでの偶像礼拝 8章

エゼキエルのもとに長老たちが集まっていた時、エゼキエルは幻の中でエルサレムに連れて行かれました。そしてそこで神殿における偶像礼拝の罪を見せられました。北の方の祭壇の門の入り口には「ねたみ」という像がありました。これはマナセが持ち込んだアシェラ像と考えられます。神殿の中では様々な偶像が置かれ、70人の長老たちが偶像を礼拝していました。北の門の入り口では穀物の神タンムズのために女たちが泣いていました。神殿の入り口では25人ばかりが太陽を拝んでいました。神はエルサレムで行われている偶像礼拝の状況をエゼキエルに見せて言われました。「見たか、人の子よ。…彼らはこの地を暴虐で満たし、わたしの怒りをいっそう駆り立てている。…だから、わたしも激しい憤りをもって応じる。」8:17-18

2. 審判の執行 9－10章

主はエルサレムをさばくために、都を罰する6人の男を連れて来ました。また主は亜麻布をまとったもう一人の人に言いました。「都の中、エルサレムの中を行き巡り、ここで行われているすべての忌み嫌うべきことを嘆き悲しんでいる人々の額に、しるしをつけよ。」9:4そして主は6人の男に言われました。『この者の後について都を行き巡って打ち殺せ。あわれみをかけてはならない。惜しんではならない。…しかし、しるしが付けられた者には、だれも近づいてはならない。まずわたしの聖所から始めよ。』…彼らは出て行って、都の中で打ち殺した。」9:5-7 主は偶像礼拝を行わない者をあわれみ、神のさばきから除外されました。しかし、それ以外の人たちを神はさばかれました。

エゼキエルは、ケルビムの上におられる主の栄光を見ました。ケルビムは天において神に仕える存在です。エゼキエルはその姿を見て、彼が最初に幻で見た4つの生き物がケルビムであったことを知りました。「彼らは、かつて私がケバル川のほとりで、イスラエルの神の下に見た生きものであった。私は彼らがケルビムであることを知った。」10:20

3. 審判における神のあわれみ 11章

エゼキエルは霊によって、東の門に連れて行かれました。そこにはエルサレムは滅びないと言っている25人の悪い指導者たちがいました。彼らは言いました。「当分、家を建てなくともよい。この都は鍋であり、われわれはその肉だ。」11:3 鍋はエルサレムを表し、肉はエルサレムの住民を表します。指導者たちは、「鍋がその中にある肉を火から守るように、エルサレムはその中の住民を守るから安全だ。家も焼かれることはないから、当分建てる必要はない。」と言っていました。それに対して神は言われます。「あなたがたが町の中で横たえた、刺し殺された者こそが肉であり、この町は鍋である。」11:7 ここで神が言われる鍋は神のさばきの意味であり、肉は神にさばかれて殺された人たちのことです。「この都はあなたがたにとって鍋とはならず、あなたがたはその中の肉とはならない。わたしは、イスラエルの国境でああなたがたをさばく。」11:11 神は「エルサレムは鍋であり、その中にいる肉(住民)は安全だ」という指導者たちの言葉は間違いであり、神のさばきは必ず来ると言われました。

エゼキエルが預言していると、25人の指導者の一人ペラテヤが死にました。エゼキエルは恐れて神に叫びました。すると神は、捕囚の民はやがてエルサレムに帰還すると言われました。「わたしはあなたがたを諸国の民の中から集め、あなたがたが散らされていた国々からあなたがたを呼び寄せ、あなたがたにイスラエルの地を与える。」11:17 さらにエレミヤ31章で与えられたのと同じ新しい契約の約束をエゼキエルにも与えられました。「わたしは彼らに一つの心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉に心を与える。こうして、彼らはわたしの掟にしたがって歩み、わたしの定めを守り行ふ。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」11:19, 20 この約束はペンテコステの時に成就しました。

111. エゼキエル書(3) 12-17章

1. 捕囚の描写 12:1-20

エゼキエルは象徴的行為を演じることによって、エルサレムは陥落し、住民は捕囚となり、自分の家を捨てなければならないと伝えました。「『彼らの見ている前で、あなたは荷物を肩に担ぎ、暗いうちに出て行き、顔をおおって地を見るな。わたしがあなたをイスラエルの家のためにしるしとするからだ。』そこで、私は命じられたとおりにした。自分の荷物を捕囚の時の荷物のようにして昼のうちに持ち出し、夕方、自分の手で壁に穴をあけ、彼らの見ている前で、暗いうちに荷物を背負って出て行った。」12:6, 7 次に、エルサレムがバビロン軍に包囲された時に食料がなくなる状態を演じます。「人の子よ。震えながらあなたのパンを食べ、おののきながら、恐る恐るあなたの水を飲め。…彼らは自分たちのパンを恐る恐る食べ、自分たちの水をおびえながら飲むようになる。こうしてその地は、そこに住むすべての者の暴虐のゆえに瘦せ衰える。」12:18, 19

2. 偽指導者 12:21-14:11

神のさばきが民に臨もうとしている時に、指導者たちは民を欺き、エルサレムは安全だと説きました。それに対して神は、間もなくさばきは行われ、偽りの預言をする者をさばくと言われました。「実に彼らは、平安がないのに『平安』と言って、わたしの民を惑わし、壁を築くとすぐ、それに漆喰で上塗りをしてしまう。漆喰で上塗りする者どもに言え。それは剥がれ落ちる、と。」13:10, 11 「人の子よ。あなたは、自分の心のままに預言するあなたの民の娘たちに顔を向け、彼女たちに預言せよ。…わたしはあなたがたのペールをはがし、わたしの民をあなたがたの手から救い出す。」13:17, 21 また心に偶像を持ちながら、主に願い求める長老たちを叱責します。「だれでもわたしから離れ、心の中に偶像を秘めて、自分を不義に引き込むものを顔の前に置きながら、わたしに尋ねようと預言者のところに来る者には、主であるわたし自身が答える。わたしはそのようなものに敵対してわたしの顔を向け、彼をしるしとし、語りぐさとして、わたしの民の間から絶ち滅ぼす。」14:7, 8

3. 絶望の状態 14:12-15:8

民は、イスラエルの義人たちのために、神のさばきは延期されると信じていました。それに対して神は言われます。「たとえ、そこにノアとダニエルとヨブの、これら3人の者がいても、彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ。」14:14 エルサレムは今にも焼かれる森のぶどうの木のように、神のさばきを待っています。「わたしは彼らに敵対して顔を向ける。彼らが火から逃れても、火は彼らを焼き尽くす。わたしが彼らに顔を向けるそのとき、あなたがたはわたしが主であることを知る。彼らがわたしの信頼を裏切ったので、わたしはこの地を荒れ果てさせる。」15:7, 8

4. イスラエルの霊的歴史 16章

エゼキエルは比喩的なことばをもって、イスラエルの霊的腐敗の歴史を語ります。イスラエルは生まれたばかりの乳児のように無力であった時、神に選ばれ、神の愛の御手の中で育てられました。ところがイスラエルは成長すると姦淫を行い、自分の子どもを偶像にいけにえとしてささげました。やがてイスラエルはエジプト人、アッシリア人、カルデア人と姦通しました。神はイスラエルに対してさばきを宣告されます。「わたしはあなたを彼らの手にゆだねる。彼らはあなたの祭儀台を壊し、高台を打ち壊し、あなたの着ているものをはぎ取り、あなたの美しい品々を奪い取り、あなたを丸裸にしておく。」16:39 神はさばきの後にイスラエルとの契約を覚えて、永遠の契約を立てると約束されました。この永遠の契約はやがて来られる救い主によって成就します。「だが、わたしは、あなたが若かった日々にあなたと結んだ契約を覚えて、あなたと永遠の契約を立てる。」16:60

5. 不忠実な王 17章

エゼキエルはたとえをもって、エルサレムの滅びと回復の出来事を語ります。大鷲のネブカドネツアルは杉のこずえのユダを攻め、枝の先のエホヤキンを捕らえ移します。そして種であるゼデキヤをユダの王として立てます。しかしゼデキヤはもう一つの大鷲であるエジプトに助けを求め、ユダはバビロンによって滅ぼされます。その後神は、もう一つの若枝の先である救い主をイスラエルの高い山に植えます。その結果イスラエルは回復します。「わたしは高い杉のこずえを取り去り、そのうちから柔らかい若枝の先を摘み取り、わたし自ら、それを高くそびえる山に植える。わたしがそれをイスラエルの高い山に植えると、それは枝を伸ばし、実を結び、見事な杉の木となる。」17:22, 23

112. エゼキエル書(4) 18－24章

1. 個人の責任 18章

ユダの民は、自分たちが苦しみを受けているのは、先祖の罪のためであり、自分たちの罪のためではないと言っていました。それに対して神は反論されます。「あなたがたは、イスラエルの地について、『父が酸いぶどうを食べると、子どもの歯が浮く』という、このことわざを繰り返し言っているが、いったいどういうことか。わたしは生きています。-主のことば-。あなたがたがイスラエルでこのことわざを用いることは、もう決してない。」18:2,3 確かにユダの民は共同体としての苦しみを負ってはいるが、神は一人ひとりの罪を問われ、正しい者は生き、正しくない者は滅びると言われます。また正しくない者も神の前に悔い改めるなら生きると言われます。だから、悔い改めて生きようと民に呼びかけます。「わたしは、だれが死ぬのも喜ばない。-神である主のことば-。だから立ち返って生きよ。」18:32

2. イスラエルの君主たちへの哀歌 19章

エゼキエルは比喻を用いて、ユダの王の破滅とユダの滅亡という哀歌を唱えます。雌獅子であるユダは子獅子であるエホアハズとエホヤキンを養いました。そしてその一頭の若い獅子であるエホアハズは悪を行い、罪を犯して、エジプトに連れて行かれました。すると雌獅子であるユダは他の一頭エヨヤキンを若獅子と定め、王として立てました。しかし、エホヤキンも悪を行い、罪を犯しました。その結果、彼は捕らえられ、バビロンに引いて行かれ、砦に閉じ込めました。「彼らはそれに鉤をかけて檻に入れ、バビロンの王のもとに引いて行った。彼らはそれを砦に閉じ込め、二度とその声がイスラエルの山々に聞こえないようにした。」19:9 またユダはぶどうの木に例えられます。強い枝は王の杖ゼデキヤとなりますが、強い枝は折られて枯れ、火がそれを焼き尽くし、ユダの最後の王ゼデキヤは滅びました。「もう、それには王の杖となる強い枝がなくなった。」19:14

3. イスラエルの罪とバビロンによる滅び 20～22章

エゼキエルのもとに、捕囚の民の長老たちが主に尋ね求めるために来しました。エゼキエルはイスラエルの歴史を振り返り、彼らがたえず偶像を礼拝し、律法を行わず、神を怒らせてきたことを指摘しました。その罪のために神はイスラエルをさばくのです。一方、さばきの後には回復があります。「わたしが諸国の民の中からあなたがたを集める時、わたしはあなたがたを芳ばしい香りとともに喜んで受け入れる。」20:41

しかしその前に、神のさばきがバビロン軍によってエルサレムに下ります。「人の子よ。あなたは、バビロンの王の剣が来るように、二つの道を備えよ。」21:19 一つの道はアンモン人のラバ、もう一つの道はエルサレムに通じます。バビロンの王は占いによってエルサレムへの道を選びます。しかし、エルサレムの人々はそれを信じません。けれども、そのとおりバビロン軍がエルサレムに来て滅ぼします。「だが、バビロンの王は彼らに自分たちの咎を思い起こさせることになり、こうして彼らは捕らえられる。」21:23 エルサレムの民は金かすとなったので、神の怒りによってエルサレムの炉で溶かされます。「わたしは怒りと憤りをもってあなたがたを集め、そこに入れて溶かす。」22:20

4. 不忠実の結果 23章

イスラエルが外国と同盟を結ぶことは、神に対する不信仰の現れであり、さらには外国の偶像礼拝を受け入れる罪となりました。神は姉のオホラと妹のオホリバをご自分の娘としました。オホラはサマリアのことで、オホリバはエルサレムのことです。姉のオホラはアッシリア人と姦淫し、その結果神はアッシリア人にオホラを渡し、彼女はアッシリア人によって殺されました。それを見ていた妹のオホリバは神の警告を受け入れずに、バビロン人と姦淫しました。そのため神はバビロン人にオホリバを渡し、彼女もバビロン人によって殺されるのです。

5. エルサレムへのさばき 24章

エルサレムがバビロン軍によって包囲された日(前588年1月15日)にエゼキエルは神のことばを聞きました。鍋のさびを火にかけて落とそうとしますが、落とせません。「そのひどいさびはそこから落ちず、そのさびはなお火の中にあった。」24:12 さびはエルサレムの罪であり、もはや罪は取り除くことができず、さばきを待つ以外にありません。エゼキエルの妻が死んだ時、神から言われたとおりエゼキエルは嘆きませんでした。これは民へのしるしであり、エルサレム神殿が破壊される時、彼らはそれを嘆かず、ただ自分たちの罪を嘆くようになるのです。

113. エゼキエル書(5) 25-32章 諸外国への神のさばき

1. アンモン、モアブ、エドム、ペリシテへのさばき 25章

アンモン人、モアブ人、エドム人、ペリシテ人は、バビロンに対抗するためにユダと同盟を組んでいました。(エレミヤ 27:3) しかし、彼らはユダを見捨てて、バビロン軍の侵入の矢面に立たせ、ユダが滅びるのを喜びました。それゆえ、神は彼らを罰せられます。「あなたはアンモン人に言え。『…神である主はこう言われる。わたしの聖所が冒された時、イスラエルの地が荒れ果てた時、ユダの家が捕囚となった時、おまえは、あははと言って嘲った。…わたしはおまえを諸国の民から断ち切り、国々の間から滅ぼし、根絶やしにする。その時おまえは、わたしが主であることを知る。』」 25:3, 7

2. ツロとシドンへのさばき 26-28章

ツロとシドンはフェニキアの商業都市で、特にツロは海運業が盛んで、富を築き大変栄えました。ツロはエルサレムの滅亡を喜びました。神は高慢なツロをバビロン軍によってさばかれます。「人の子よ。ツロはエルサレムについて、『あはは。国々の民の門は壊され、私に明け渡された。私は豊かになり、エルサレムは廃墟となった』と言った。…『見よ。わたしは、王の王、バビロンの王、ネブカドネツアルを、…北からツロに連れて来る。彼はその沿岸の町々を剣で滅ぼし、…やぐらを斧で打ち壊す。』」 26:7-9

28:11-19 は「私は神だ」と言う高慢なツロに対する神のさばきと、サタンに対する神のさばきが二重に語られていると考えられます。「わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、こうしてあなたは罪ある者となった。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出した。守護者ケルビムよ。わたしは火の石の間から、あなたを消え失せさせた。あなたの心は自分の美しさに高ぶり、まばゆい輝きのために自分の知恵を腐らせた。そこで、わたしはあなたを地に放り出し、王たちの前で見せ物とした。」 28:14-17

シドンに対するさばきが 28:20-23 で語られた後、イスラエルの回復の預言が語られます。「わたしがイスラエルの家を、散らされていた諸国の民の中から集める時、わたしは国々の目の前で、わたしが聖であることを示す。彼らはわたしがわたしのしもべヤコブに与えた地に住む。そこに安らかに住み、家々を建て、ぶどう畑を作る。彼らは安らかに住む。周囲から彼らを侮るすべての者にわたしがさばきを下す時、彼らは、わたしが彼らの神、主であることを知る。」 28:25-26

3. エジプトへのさばき 29-32章

29-32章はエジプトへの神のさばきです。エジプトは、「ナイル川は私のもの、私が造った」と言って高ぶりました。それゆえ、神は高慢なエジプトをさばかれます。エジプトはバビロンによって40年間廃墟となります。その後、回復しますが、かつてのような力はなくなり小国となります。「わたしはエジプトの地を、荒れ果てた国々の間で荒れ果てさせ、その町々は40年の間、廃墟の町々の間で荒れ果てる。わたしはエジプト人を諸国の間に散らし、国々に追いやる。…40年の終わりになって、わたしはエジプト人を、散らされた諸国の民の中から集め、エジプトを回復させる。彼らをその出身地、パテロスの地に帰らせる。彼らはそこで、取るに足りない王国となる。」 29:12-14

31章はエジプトを、かつて栄え、後に神のさばきを受けたアッシリアに比べて語ります。そしてアッシリアを表すレバノンの杉が滅ぼされ、他の諸国を表すエデンのあらゆる木々が滅ぼされたように、エジプトも神のさばきを受けて滅ぼされます。「よみに下る」「地下の国に落とされる」とは神のさばきを受けて滅びることです。「あなたはエデンの木々とともに、地下の国に落とされる。剣で刺し殺された者とともに、無割礼の者たちの間に横たわようになる。これは、ファラオとそのすべての大軍のことである。神である主のことば。」 31:18 32章はエジプトに対する哀歌です。「人の子よ、エジプトの大軍のために嘆け。その民と力強い国々の娘たちを、穴に下る者たちとともに、地下の国に下らせよ。」 32:18

114. エゼキエル書(6) 33-39章 回復の希望

1. 見張り人の再任 33章

エゼキエルは今まで捕囚の地バビロンでエルサレムの滅亡を預言してきました。そして、ついにその預言が成就し、エルサレムが陥落しました。そこで神はエゼキエルがイスラエルの回復と希望を捕囚の民に伝えるために、見張り人として再任します。エゼキエルはすでに3章で見張り人として任命されていました。見張り人は預言者の性質をよく表す言葉です。そしてエルサレム占領の知らせがエゼキエルに伝えられました。「私たちが捕囚となって12年目の第10の月の5日、エルサレムから逃れた者が私のもとに来て、『都は占領された』と言った。」33:21 その前夜、エゼキエルに主のことばがありました。それはエルサレム占領後も、そこに残る民はエルサレムを所有し続けることができると言っていました。それに対してエゼキエルは、彼らの滅びとエルサレムの荒廃を預言しました。

2. イスラエルの牧者たち 34章

イスラエルの指導者を牧者と表現し、彼らが牧者として不忠実であったため、エルサレムが滅亡したと神は語られます。そして、神は牧者から羊を取り返し、神ご自身が羊飼いとなると言われます。「わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らを憩わせる。」34:15 神は牧者をさばくだけでなく、羊である民もさばかれます。「見よ、わたしは羊と羊、雄羊と雄やぎの間をさばく。」34:17 そして神は、イスラエルを牧する一人の牧者ダビデを立てられます。「わたしは、彼らを牧する一人の牧者、わたしのしもべダビデを起こす。彼は彼らを養い、その牧者となる。主であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもべダビデが彼らのただ中で君主となる。」34:23-24 神のしもべダビデとは、ダビデの子孫として生まれる救い主のことです。エゼキエルは捕囚後のイスラエルの回復を預言するとともに、救い主による神の国の祝福を預言します。「わたしは彼らと平和の契約を結び、悪い獣をその地から取り除く。彼らは安らかに荒野に住み、森の中で眠る。わたしは、彼らにも、私の丘の周りにも祝福を与え、時にかなって雨を降らせる。それは祝福の雨となる。」34:25-26 救い主が来られる時、神は民と平和の契約を結び、神の祝福が民に与えられます。

3. エドムとイスラエルの対照 35-36章

イスラエルの回復はエドムに対するさばきと対照して語られます。エドムはエサウの子孫でセイルの山に住みました。エドムは絶えずイスラエルと敵対します。神はエドムをさばかれます。「神である主はこう言われる。セイルの山よ。わたしはおまえを敵とする。…わたしはセイルの山を全くの廃墟とし、そこから人の往来を絶つ。…おまえは、『これらの二つの民、二つの国は、我々のものだ。我々はそれを占領しよう』と言った。しかし、そこには主がいたのである。…おまえはイスラエルの家のゆずりの地が荒れ果てたことを喜んだが、わたしはおまえに同じようにする。」35:2, 7, 10, 15

対照的に、イスラエルは回復し、民はエルサレムに帰ってきます。「だが、おまえたち、イスラエルの山々よ。おまえたちは枝を出し、わたしの民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが帰ってくるのが近いからだ。…わたしはおまえたちの上、イスラエルの全家に人を増やす。町々は住む所となり、廃墟は建て直される。」36:8, 10 神は11章でイスラエルに与えられた約束を繰り返されます。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心をとりのぞき、あなたがたに肉の心を与える。」36:26

4. イスラエルの回復の預言 37章

神はイスラエルが回復することを教えるために、エゼキエルを骨が満ちる平地に連れ出しました。「主は私に言われた。『これらの骨に預言せよ。「干からびた骨よ。主のことばを聞け。…見よ。わたしはおまえたちに息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。』」…私が預言していると、なんと、ガラガラと音がして。骨と骨とが互いにつながった。私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。…私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中に入った。そして彼らは生き返り、自分の足で立った。非常に大きな集団であった。」37:4, 5, 7-10 回復するイスラエルは、もはや北と南に分かれることなく、一つの国となり、主のしもべダビデが王となると預言されます。ここにもイスラエルの回復とともに、救い主が治める新しい神の国が預言されます。「わたしのしもべダビデが永遠に彼らの君主となる。わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。」37:25, 26

5. エルサレムの敵ゴグ 38-39 章

38-39 章は終末における神の民に対する攻撃と神の救いが預言されています。この箇所は黙示録 20:7-10 の千年王国が終わる時にゴグとマゴグが神の民を攻撃する出来事において成就します。「人の子よ。メシェクとトバルの大首長である、マゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言せよ。…おまえはわたしの民イスラエルを攻め上り、地をおおう雲ようになる。終わりの日に、そのことは起こる。ゴグよ。わたしはおまえに、わたしの地を攻めさせる。」38:2, 16「わたしはおまえを引き回し、おまえを駆りたて、北の果てから上らせ、イスラエルの山々に連れて来る。おまえの左の手から弓をたたき落とし、右の手から矢を落とす。」39:2 神はゴグをさばき、イスラエルは勝利します。終末的な出来事と理解すると、この場合のイスラエルは霊的イスラエルである神の民のことです。

エゼキエルではゴグはマゴグの地を支配していますが、黙示録ではゴグとマゴグは両方とも悪の勢力の象徴として用いられています。「しかし、千年が終わると、サタンはその牢から解き放たれ、地の四方にいる諸国の民を、すなわちゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを招集する。彼らの数は海の砂のようである。彼らは地の広い所に上って行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。」黙示 20:7-9 「愛された都」とは霊的エルサレムである教会を指しています。

115. エゼキエル書(7) 40-48 章 エルサレムの回復

1. 40-48 章の解釈

40-48 章は、新しい神殿、礼拝の規定、土地の分割など、極めて綿密かつ数学的精密さをもって記されているため、様々な解釈がなされてきました。主なものとしては三つあり、それぞれの中に異なる解釈があります。

①字義的解釈(文字どおり実現すると解釈する。)1)捕囚期後解釈:捕囚の民がエルサレムに帰還した後に再建する神殿の預言。実際には、帰還した民はエゼキエルの預言どおりに神殿を建てなかった。2)終末的解釈:ユダヤ教では未来における神殿再建の預言。キリスト教では千年王国における神殿の預言。犠牲のささげ物は、キリストにおいて成就した神のわざを回顧し、記念として行われる。

②象徴的解釈(内容を文字どおりではなく象徴的に理解する。)1)捕囚期後解釈:帰還した民が建てる神殿を象徴的に表す預言。2)教會的預言:神殿を教会として解釈する。3)終末的解釈:終末において成就する預言。千年王国説と無千年王国説の二つの解釈がある。

③聖書的救済史的解釈:捕囚の民にとっては神殿再建の希望を与える預言。綿密な表現は神殿再建が確かであることを表し、民に確かな希望を与えている。さらに新天新地において最終的に成就する預言。預言の内容は象徴的、黙示的に解釈する。

2. 新しい神殿 40-43 章

エゼキエルが捕囚になって 25 年目、エルサレム陥落後 14 年目に、彼は幻のうちにイスラエルの地に連れて行かれ、新しい神殿を見ました。40 章:神殿の外壁、外庭、内庭 41 章:神殿の本殿と至聖所 42 章:祭司の部屋、神殿の規模 43 章:神殿に主の栄光の帰還、祭壇の規定、動物のささげ物の規定 「主の栄光が東向きの門を通して神殿に入ってきた。霊が私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。なんと、主の栄光が神殿に満ちていた。」43:4, 5

3. 礼拝の規定と土地の分割 44-46 章

44 章:新しいエルサレム神殿での礼拝の規定、奉仕者の規定 45 章:土地の分割 「あなたがたが相続地としてその地をくじで分けるときは、その地から奉納地として聖なる区域を主にささげなければならない。その長さは 2 万 5 千キュビト、幅は 1 万キュビト。その全域は聖なる地である。」45:1、君主の権利と義務、祭儀に関する規定 46 章:祭儀とささげものの規定、神殿の出入り口の規定、君主の規定、神殿の庭と調理場

4. 祝福の地 47-48 章

47 章:いのちの水の源とその量と効力、土地の分割。神殿から流れ出るいのちの水の幻は、黙示録 22 章のいのちの水の川において成就します。「この川が流れていくどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。」47:9「御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神の子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。」黙示 22:1, 2 48 章:土地の分割、「この町の名は、その日から『主はそこにおられる』となる。」48:35 エゼキエルの預言は、最終的に新天新地において成就します。

116. ダニエル書（1）ネブカドネツアルの治世 1～4 章

1. 宮廷でのユダヤ人捕虜 1 章

ユダの王エホヤキムの第 3 年(前 606 年)に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムを包囲し、第 1 回捕囚が行われました。その時ダニエル(ベルテシャツアル)、ハナンヤ(シャデラク)、ミシヤエル(メシヤク)、アザルヤ(アベデ・ネゴ)の 4 人の少年もバビロンに連れて来られました。4 人は宮廷に仕えるにふさわしい人物として選ばれ、3 年間の訓練を受けることになりました。ダニエルは王のごちそうで身を汚さないために、10 日間、自分たちに水と野菜を与えてほしいと宦官の長に願い、受け入れられました。10 日後、王のごちそうを食べた少年たちよりダニエルたちの方が健康状態がよかったので、その後も野菜と水を与えられ、身を汚すことはありませんでした。3 年の訓練期間の後、王はこの 4 人が高い能力と知恵を持っていることを知り、彼らを王に仕えさせました。

2. ダニエルと王の夢 2 章

ある夜、王は夢を見ました。王は呪法師たちを呼び出し、自分が見た夢とその意味を告げるように命じました。しかし、呪法師たちは夢を教えてくださいと王に言いました。王は怒り、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じました。ダニエルは自分たちを捕らえにきた親衛隊長にしばらく時間をくれるように願い、神にこの秘密を啓示してくださるよう求めました。その夜、神はダニエルに秘密を明かされました。翌日ダニエルは王のもとに行き、王の見た夢とその意味を伝えました。「王よ。あなたが見ておられると、なんと一つの巨大な像が現れました。…その像は、頭は純金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。」2:31-34 ダニエルは、頭はバビロンを指し、胸と両腕は第 2 の国(メド・ペルシア)、腹とももは第 3 の国(ギリシア)、すねと足は第 4 の国(ローマ)だと夢を解き明かしました。また一つの石は救い主であり、救い主によって起こされる国は、永遠に続く神の国です。王はダニエルの夢の解き明かしに満足し、ダニエルをバビロン全州を治める長官とし、シャデラク、メシヤク、アベデ・ネゴにはバビロン州の行政をつかさどらせました。

3. 試練にあった三人の友 3 章

ネブカドネツアルは、ドラの平野に高さ 60 キュビト(26m)、幅 6 キュビト(2.6m)の金の像を建てました。そして金の像の奉獻式に諸州のすべての高官を出席させ、金の像にひれ伏して拝むように命じました。しかし、シャデラク、メシヤク、アベデ・ネゴは金の像を拝むことを拒否しました。王は 3 人を呼び出し、もし拝まないなら燃える火の炉の中に投げ込まれると告げました。すると 3 人は王に答えました。「もし、そうなれば、私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ、あなたの手からでも救い出します。しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」3:17, 18 3 人は偶像礼拝を拒否しました。王は怒りに満ち、3 人を燃える火の炉の中に投げ込みました。ところが王は、火の中に縄を解かれて歩く 4 人の者を見、第 4 の者は神々の子のようだと言いました。そして 3 人に火の中から出て来るように言いました。3 人は何の害も受けずに出て来ました。王は 3 人の信じる神が彼らを救い出したことを認め、彼らの神を悪く言ってはならないとの命令を出しました。第 4 の者は受肉前のキリストではないかと考えられています。

4. 王の卑下 4 章

ネブカドネツアルは再び夢を見ました。誰もその夢の意味を解き明かせなかったので、ダニエルが呼ばれました。王の夢はこうです。「天に届く高い木があり、その木は豊かに実を結び、獣や鳥が住んでいました。そこに天から聖なる者が降りて来て、この木を切り倒し根株だけ残すようにと言いました。」ダニエルはその夢の意味を伝え、王に警告しました。「王よ、その木はあなたです。…あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べて、天の露にぬれることになります。こうしてあなたの上を七つの時が過ぎ行き、ついにあなたは、いと高き方が人間の国を支配し、これを見こころにかなう者にお与えになることを知るようになります。…それゆえ、王よ、私の勧告を快く受け入れて、正しい行いによってあなたの罪を除き、また貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。」4:22-27 しかし、王はダニエルの警告を受け入れず、その結果、人の中から追い出され、七つの時が過ぎるまで獣のような存在となりました。理性が戻った時、ネブカドネツアルはいと高き方をほめたたえ、天の王こそ全地の主権者であることを認めました。

117. ダニエル書（2）ベルシャツアル時代 7, 8, 5 章

1. 第1の幻 4頭の獣 7章

ダニエル書は年代的順序で書かれていないので、今回は年代順に学びます。ベルシャツアルは父ナボニドゥスと前 553 年からバビロンの共同統治を始めました。7 章は前 553 年、ベルシャツアルの元年にダニエルが夢の中で見た第一の幻とその意味です。彼は 4 頭の大きな獣が海から上がって来るのを見ました。4 頭の獣は、2 章でネブカドネツアルが見た巨大な像の幻と対応しています。2 章から 7 章の出来事までは、すでに 50 年が経っています。第 1 の獣は獅子のようでバビロンを指しています。「第一のものは獅子のようで、鷲の翼を付けていた。」7:4 第 2 の獣は熊に似ており、メド・ペルシアを指します。「すると見よ、熊に似た別の第二の獣が現れた。」7:5 横向きに寝ているとは勢力的に不均衡であり、メディアは勢力を失いペルシアが優勢になりました。口の牙の間にある 3 つの肋骨とは、支配する 3 つの国でバビロン、エジプト、リディアです。

第 3 の獣は豹のようでギリシアを指します。「その後、見てみると、なんと、豹のような別の獣が現れた。」7:6 マケドニア王となったアレクサンドロスは 10 年間の遠征で、アドリア海からインダス川までの広大な帝国を築きました。しかし、熱病のため 32 歳でバビロンで死にました。4 つの鳥の翼、4 つの頭はアレクサンドロスの死後に国を分割統治する 4 人の王、プトレマイオス、セレウコス、フィリッポス、アンティゴノスです。第 4 の獣は恐ろしくて不気味で、非常に強い獣です。これはローマです。「その後また夜の幻を見てみると、なんと、第四の獣が現れた。それは恐ろしくて不気味で、非常に強かった。」7:7 この獣が持つ十本の角は十人の王で、ローマ帝国の十人の王を指すという解釈と、十人を象徴的に理解し、終末に至るまでの多くの王を指すとの解釈があります。十本の角の間から現れるもう一本の小さな角は、終末に現れる反キリストです。彼は三本の角を引き抜き、人間のような目があり、大言壮語する口がありました。

次にダニエルは天上の御座におられる「年を経た方」を見ます。このお方は天の神のことで、神の前にいくつかの文書が開かれてさばきが行われます。神の前で反キリストはさばかれ、燃える火に投げ込まれました。次に救い主と永遠の神の国の幻を見ます。「見よ、人の子のような方が、天の雲とともに来られた。この方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸国語の者たちはみな、その方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることはなく、その国は滅びることがない。」7:13, 14 「人の子のような方」とは救い主のことです。イエスはご自分のことを「人の子」と言って、ダニエル書の預言の成就として来た救い主であることを示されました。

ダニエルはこれらの幻の意味を悟ることができませんでしたが、御使いが来て解き明かしてくれました。さらに終末における大患難時代、その後の神のさばきと永遠の御国の完成を御使いは伝えました。「十本の角は、この国から立つ十人の王、彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。いと高き方に逆らうことばを吐き、彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。国と主権と天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国、すべての主権は彼らに仕え、服従する。」7:24-27

「一時と二時と半時」の「時」は「年」を意味する言葉でもあるので、三年半です。これはキリスト再臨前の大患難時代の三年半で、黙示録 11:2, 13:5 の獣(反キリスト)が活動する 42 カ月、11:3 の 1260 日に対応しています。なお三年半は完全数 7 の半分なので象徴的に理解し、神が決められた反キリストが活動する限られた期間のことと考えられます。神のさばきの後、永遠の御国が神の民に与えられます。神の民はキリストとともに天の御国を治めます。ダニエルは自分が見た幻の意味を聞いても十分理解できませんでしたが、しかし、このことを心にとどめました。「ここでのこの話は終わる。私ダニエルは、いろいろと思い巡らし動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。」7:28

2. 第2の幻 雄羊と雄やぎ 8章

ダニエルは再び幻を見ました。最初に川岸に立っている雄羊を見ました。「私が目を上げて見ると、なんと、一匹の雄羊が川岸に立っていた。それには二本の角があつて、この二本の角は長かつたが、一本はもう一本の角よりの長かつた。その長いほうは後に出て来たのであつた。」8:3「あなたが見た二本の角を持つ雄羊は、メディアとペルシアの王である。」8章では国名まで解き明かされます。幻を解き明かすのは御使いガブリエルです。雄羊はメド・ペルシアです。長い角はペルシアの王で、もう一つの角のメディアの王を圧倒します。雄羊は周りの国を次々に征服します。

次にダニエルは雄やぎを見ました。「私が注意して見ていると、見よ、一匹の雄やぎが、地には触れずに全土を飛び回って、西からやって来た。その雄やぎには、際立った一本の角が額にあつた。…見ているとこの雄やぎは雄羊に近づき、怒り狂って雄羊を打ち倒して、その二本の角をへし折つたが、雄羊にはこれに立ち向かう力がなかつた。…この雄やぎは非常に高ぶつたが、強くなった時にその大きな角が折れた。そしてその代わりに、天の四方に向かって際立った四本の角が生え出て来た。」8:5-8「毛深い雄やぎはギリシアの王であり、その額にある大きな角はその第一の王である。その角が折れて、代わりに四本の角が生えたが、それは、その国から四つの国が起こるということである。しかし、第一の王のような勢いはない。」8:21-22 雄やぎはギリシアで、際立った大きな一本の角はアレクサンドロスです。彼は十年間の遠征によりメド・ペルシアを滅ぼし巨大な王国を築きますが、熱病にかかり32歳で亡くなります。彼の後、プトレマイオス、セレウコス、フィリッポス、アンティゴノスの四人の王により国は四つに分割され、プトレマイオス、セレウコス、カッサンドロス、リシュマコスとなります。

「そのうちの一本の角からもう一本の小さな角が生え出て、南と東と麗しい国に向かって、非常に大きくなって来た。それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星の幾つかを地に落として、これを踏みつけ、軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた。」8:9-10「彼らの治世の終わりに、その背く者たちが行き着くところに至った時、横柄で策にたけた一人の王が立つ。」8:23 もう一本の小さな角は、セレウコス王朝から出るアンティオコス・エピファネスです。前175年に王となった彼は、横柄で策にたけ、南のエジプト、東のバビロン、麗しい国のイスラエルを攻撃します。彼は自分は神であると言い、前167年にエルサレム神殿の祭壇に豚を供えて祭壇を汚し、神殿内にゼウスの神の祭壇を作り、神殿を汚します。またユダヤ教を禁止し、ギリシアの神々への信仰を義務づけ、ユダヤ人を迫害しました。

「私は、一人の聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もう一人の聖なる者が、その語っている者に行つた。『常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことか。』すると彼は答えて言った。『二千三百の夕と朝が過ぎるまで。その時聖所の正しさが確認される。』」8:13, 14 二千三百の夕と朝とは1150日のことで、神殿がきよめられるまでの期間です。マカベヤ家の勇士たちが神殿を取り戻すために、セレウコス軍と戦いました。そしてついに勝利し、前165年に神殿をきよめました。この戦いはマカベヤ戦争と呼ばれます。また神殿をきよめたことを記念して、ユダヤ教のハヌカの祭が定められました。ハヌカは光の祭とも呼ばれクリスマスの時期に祝われます。

3. バビロン陥落の前夜 5章

ベルシャツアルは千人の貴族たちのために大宴会を催し、人々はネブカドネツアルがエルサレムから持ち出した金や銀の器でぶどう酒を飲みました。「ちょうどその時、人間の手の指が現れ、王の宮殿の塗り壁の、燭台のところに何かを書き始めた。王は何かを書くその手の先を見ていた。すると王の顔色は変わり、いろいろと思い巡らして動揺し、腰の関節はゆるみ、膝はがたがた震えた。」5:5-6 王はバビロンの知者たちを呼び、書かれた文字を解き明かすように命じますが、だれも解き明かせませんでした。王母はダニエルを呼ぶようにと王に進言しました。ダニエルは、王が高ぶり、神殿の器でぶどう酒を飲んだことを告げ、文字とその意味を伝えました。「その書かれた文字はこうです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』…メネとは、神があなたの治世を数えて終わらせたということです。テケルとは、あなたが秤で量られて、目方の足りないことが分かつたということです。パルシンとは、あなたの国が分割され、メディアとペルシアに与えられるということです。」…その夜、カルデア人の王ベルシャツアルは殺された。」5:25-28, 30 バビロンはその日祭日で祝宴の最中でした。そこにキュロス王が攻め、前539年にベルシャツアルは殺され、前538年にバビロンは滅びました。

118. ダニエル書（3）メド・ペルシア時代 6章、9章、10-12章

1. ダニエルの信仰の試練 6章

「そして、メディア人ダレイオスが、およそ 62 歳でその国を受け継いだ」5:31 バビロン陥落後、バビロンを治めたのはメディア人ダレイオスでした。9:1 には「メディア族のクセルクセスの子ダレイオスが、カルデア人の王となった」とあります。メディア族のクセルクセスは、エステル記のクセルクセスとは別人です。ダレイオスについては歴史上だれのことか、様々な説がありますが、ペルシア人キュロス王のもとでバビロンを治めた王と考えられます。ダニエルはダレイオスのもとで仕える三人の大臣の一人に選ばれました。「さて、このダニエルは、他の大臣や太守よりも際立って秀でていた。彼の内にすぐれた霊が宿っていたからであった。そこで王は、彼を任命して全国を治めさせようと思った。」6:4 他の大臣や太守たちはダニエルをねたんで、彼を訴える口実を見つけようとしていますが、見つかりません。そこで彼らは王に「今から 30 日間、王よ、いかなる神にでも人にでも、あなた以外に祈願する者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれる」との法令を制定するように進言しました。王は彼らの企みを知らずに、その法令に署名しました。

「ダニエルは、その文書に署名されたことを知って自分の家に帰った。その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた。」6:10 ダニエルの神への忠実な信仰は、若い時も年を取った時も変わりませんでした。ダニエルをねたむ者たちは、ダニエルが王の法令を破ったことと、王の法令は決して変更されないことを王に伝えました。「それで王は命令を出し、ダニエルは連れて来られて、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。『お前がいつも仕えている神が、おまえをお救いになるように。』」6:16

王は一晚中断食をし、夜が明けると獅子の穴に急いで行き、ダニエルに呼びかけました。『生ける神のしもべダニエルよ。おまえがいつも仕えている神は、おまえを獅子の中から救うことができたか。』するとダニエルは王に語った。『王よ、永遠に生きられますように。私の神が御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子はわたしに何の危害も加えませんでした。それは、神の前に私が潔白であることが認められたからです。王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません。』」6:20-22 王は大いに喜び、ダニエルを穴から引き揚げ、代わりにダニエルを訴えた者たちを妻子とともに獅子の穴に投げ込みました。すると獅子は彼らをかみ砕きました。「このダニエルは、ダレイオスの治世とペルシア人キュロスの治世に栄えた。」6:28

2. ダニエルの祈り 9:1-19

「メディア族のクセルクセスの子ダレイオスが、カルデア人の国の王となったその年の元年、すなわち、その治世の第一年に、私ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃の期間が満ちるまでの年数が 70 年であることを文書によって悟った。そこで私は、顔を神である主に向けて断食し、粗布をまとい、灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた。」9:1-3 ダニエルが第一回捕囚でバビロンに連れて来られたのが前 606 年です。ダレイオス治世の元年は前 539 年です。ダニエルはエレミヤ書によってもう間もなく 70 年が満ちることを悟りました。キュロス王がユダヤ人帰還の勅令を出したのは前 539 年ですので、ダニエルの祈りの後にユダヤ人帰還の勅令が出されたと考えられます。ダニエルは 70 年の長きにわたり、バビロンで王の側近として仕えたのでした。

ダニエルは、エルサレムが荒廃し、ユダヤ人がバビロンに捕囚となって連れて来られたのは神の前に罪を犯したからであることを覚え、神の前に赦しとあわれみを祈りました。「私たちは、私たちの神、主の御声に聞き従わず、しもべである預言者たちによって神が私たちに下されたみおしえにも、従って歩むことをしませんでした。」9:10 「私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いを聞き入れ、主ご自身のために、あなたの荒れ果てた聖所に御顔の光を照り輝かせてください。…主よ、聞いてください。主よ、お赦しください。心に留めて事を行ってください。私の神よ、あなたご自身のために、遅らせないでください。あなたの都と民には、あなたの名がつけられているのですから。」9:17, 19 キュロス王のユダヤ人帰還の勅令が出される背後に、ダニエルのとりなしの祈りがあったことを知ることができます。

3. 第3の幻 七十週の預言 9:20-27

ダニエルは、捕囚の期間が70年であることを知り、イスラエルの罪を告白し、とりなしの祈りをしました。その祈りに神は答え、神のもとからガブリエルが遣わされ、七十週の預言が与えられました。この預言はエルサレムの再建から終末に至るまでの神の計画を示す預言です。「24 あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。」

「一週」は普通7年を表しますが、ここでは「七十週」とは神が定めた特別な期間です。七十週が定められた目的が6つあります。①「背きをやめさせ」神に背く罪をやめさせる。②「罪を終わらせ」神による罪の赦しを与えられる。③「咎の宥めを行い」完全な罪のあがないが犠牲のいけにえによって行われる。④「永遠の義をもたらし」神の民に永遠の義を与える。⑤「幻と預言を確証し」旧約の幻と預言が成就する。⑥「至聖所に油注ぎを行う」新しい天のエルサレムが聖別される。

25節から27節は七十週の間の出来事が預言されます。「25 それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、」ネヘミヤによるエルサレム再建の出来事です。「油注がれた者、君主が来るまでが七週。」油注がれた者(メシヤ)、君主とは救い主イエス・キリストのことです。「そして苦しみの期間である六十二週の間に、広場と堀が造り直される。」エルサレムは再建され、城壁が築かれます。この期間は7週と62週を合わせて69週の期間で、エルサレム再建からキリストまでの期間です。

「26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。」キリストは、永遠の贖いを成し遂げるために、十字架で死なれます。その時、キリストは神からも人からも見捨てられます。しかし、イエスの死によって罪の贖いは成就し、イエスを信じる者には罪の赦しと永遠のいのちが与えられます。「次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。」次に来る君主とはローマ皇帝です。70年にローマ軍はエルサレムを攻め、都と神殿は徹底的に破壊されました。その結果、ユダヤ人は離散の民となり、各地に散らばって住みました。

「その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」69週と最後の1週の間には教会時代があります。終末に至るまで、自然災害や戦いが続きます。この期間、教会はキリストの福音を宣べ伝えます。そして世界中に救いの民が起こされ、教会が建てられます。教会は世の光、地の塩となって、神のみこころをこの世で行い、キリストの御名をほめたたえ、主が再び来られる時を待ち望みます。「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」マタイ 24:14

「27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。」「彼」とは「荒らす者」のことで、「荒らす者」は終末に現れる反キリストです。「多くの者と堅い契約を結び」とは、終末になると多くの人が反キリストに従うようになることです。「半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。」半週は3年半で、黙示録 13:5 の「42 か月」に当てはまります。反キリストは最後の3年半の大患難時代に、神を冒瀆し、大きなしるしを行い、人々を自分に従わせます。「この獣(反キリスト)には大言壮語して冒瀆のことは語る口が与えられ、42 か月の間、活動する権威が与えられた。…また獣は、すべての者に、…その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。また、その刻印を持っている者以外は、だれも物売り買いできないようにした。」黙示 13:5, 16-17

「そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」神は最後に反キリストと彼を遣わした悪魔をさばき、最後の審判が行われて、この世は終わります。そして、新天新地が現れ、神の救いは完成します。「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣(反キリスト)も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。」黙示 20:10 終末の預言は12章でも与えられます。

<ダニエル9章の七十週の預言>

エルサレム再建 69 週(7 週+62 週) † 教会時代 | 終末時代 1 週(半週:大患難時代) | 新天新地

4. 第4の幻 最後の啓示 10-12章

(1) 霊的戦い 10:1-11:1

10-12章はダニエルが見た最後の幻による神の啓示です。10章は導入、11章は預言の内容、12章は結論となっています。ダニエルはペルシアの王キュロスの第3年(前536年)に大きな戦いについての幻を見ました。そのころ、ダニエルは3週間喪に服し、断食をして特別な祈りをしていました。何を祈っていたのか記されていませんが、前538年の第1陣エルサレム帰還の民のために祈ったのではないかと考えられます。帰還民は、神殿再建を開始しましたが、周りの民の反対にあい、困難な生活をしていましたからです。ダニエルが断食を終えた日に、幻を見ました。「私は目を上げた。見るとそこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのものであった。また、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のものであった。」10:5-6

この人は受肉前の神の御子イエスと考えられます。黙示録1章でヨハネが幻の中で見たイエスと似ているからです。さらに、ヨハネがイエスを見た時、死んだ者のようになって倒れたように、ダニエルも地に倒れて、深い眠りに陥ったからです。ヨハネはイエスによって起き上がりましたが、ダニエルは御使いによって起き上がりました。そして御使いはダニエルに言いました。「特別に愛されている人ダニエルよ。私が今から語ることばをよく理解せよ。」10:11 ダニエルは、神から特別に愛されている人だと言われました。ダニエルは生涯にわたり、神を愛し、異教社会にあつて神に忠実に仕えました。そのようなダニエルを神は特別に愛されました。

「ペルシアの国の君が21日間、私に対峙して立っていたが、そこに最高位の君の一人ミカエルが私を助けに来てくれた。私がペルシアの王たちのところに残されていたからだ。私は、終わりの日にあなたの民に起こることを分からせるために来た。その幻は来るべき日を待たなくてはならないが。」10:13-14 ペルシアの国の君とは、ペルシアを用いて神の働きを妨害し、神の民を苦しめようとする悪魔と悪霊のことです。御使いはダニエルが祈っていた21日間、天において悪魔と悪霊と戦っていました。そこに御使いのかしらミカエルが助けに来てくれたので、彼はダニエルのところに来ることができたのです。この後の幻では地上における戦いの預言がありますが、天においても御使いたちは悪魔と悪霊と戦っているのです。黙示録12:7-9では、天においてミカエルとその御使いたちが竜(サタン)とその使いたち(悪霊)と戦い、サタンと悪霊に打ち勝ち、彼らは地に投げ落とされます。

ダニエルは御使いが語っている間、うつむいて黙っていました。「ちょうどそのとき、人のような姿をした方が私の唇に触れた。」10:16 人のような姿をした方とは御使いのことです。御使いは再びダニエルに触れて言いました。『特別に愛されている人よ、恐れるな。安心せよ。強くあれ、強くあれ。』その方が私にそう言ったとき、私は奮い立って言った。『わが主よ、お話しください。あなたは私を力づけてくださいましたから。』すると彼は言った。『私がなぜあなたのところに来たか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために帰っていく。私が去ると、見よ、ギリシアの君がやって来る。しかし、真理の書に記されていることを、あなたに知らせよう。私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。私はその彼を強くし、力づけるために、メディア人ダレイオスの元年に立ち上がった。』10:18-11:1

御使いはペルシアの君と戦うために帰っていき、ペルシアの君に勝利します。すると次にギリシアの君がやって来て、天上での霊的戦いが起こります。この御使いとミカエルは神の民を守るために戦います。天上での霊的戦いの間、地上でも戦いがあり、イスラエルの民はしばらくの間、苦難の道を歩まなければなりません。「真理の書」は、神の計画が書かれている書物です。御使いはこの後、真理の書に記されていることをダニエルに伝えます。そして、その預言はことごとく歴史の中で成就します。

(2)地上での戦い 11:2-45

11 章には、旧約聖書と新約聖書の間にある中間時代の出来事が詳細に預言されています。11 章の預言は前 536 年から前 175 年までの出来事です。あまりにも詳細に歴史の出来事が預言されているので、自由主義神学では、ダニエルの預言はすでに歴史の中で起こったことを預言風に書いたと考えます。一方、聖書を誤りのない神のことばと信じる福音主義神学では、聖書の預言はダニエルの預言も含め、神が未来に起こることを事前に啓示されたと理解し、そのように信じます。11 章の預言がどのように歴史の中で成就したかを見ていきましょう。

「2 今、私はあなたに真理を告げる。見よ。なお三人の王(カンビュセス、スメルディス、ダリヨス)がペルシアに起こり、第四の者(クセルクセス)は、他のだれよりもはるかに富む者となる。この者はその富によって強力になった時、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。3 一人の勇敢な王(アレクサンドロス)が起こり、大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。4 しかし彼が起こったとき、その国は崩壊し、天の四方に向けて分割される。その国は彼の子孫のものにはならず、また、彼が支配したほどの権力もなくなる。彼の国は根こそぎにされ、その子孫以外の者のものとなる。5 南の王(プトレマイオス一世)が強くなる。しかし、彼よりもその軍の長の一人(セレウコス一世)が強くなり、彼の権力よりも大きな権力をもって治める。6 何年かたって、彼らは同盟を結ぶ。和睦をするために南の王(プトレマイオス二世)の娘(ベルニケ)が北の王(アンティオコス二世)に嫁ぐが、彼女の勢力は保たれず、彼の勢力も続かない。彼女は、自分を連れて来た者、自分を生んだ者、そのころ自分を力づけた者とともに引き渡される。」

アレクサンドロスが死ぬと、国は4つに分割統治されます。そして、その中の南の王(プトレマイオス朝の王)と北の王(セレウコス朝の王)が強くなります。やがて北の王の力がより強くなると、南の王、プトレマイオス二世は自分の娘ベルニケを北の王、アンティオコス二世に嫁がせて同盟を結びます。しかし、プトレマイオス二世が死ぬと、アンティオコス二世は元妻とよりを戻します。そして元妻がアンティオコス二世とベルニケとその子供を殺害し、6 節の預言が成就します。

「7 しかし、彼女の根から一つの芽(ベルニケの弟のプトレマイオス三世)が父に代わって起こる。そして北の王(セレウコス二世)の軍に立ち向かい、その砦に攻め入り、これと戦って勝つ。8 なお、彼は彼らの神々を、彼らが鑄た像や、銀と金の尊い器とともにエジプトに捕らえ移す。彼は何年かの間、北の王と関わりを持たない。9 しかし、北の王(セレウコス二世)は南の王(プトレマイオス三世)の国に侵入し、そして自分の地に帰る。」プトレマイオス三世は姉のベルニケのかたきを打ち、多くの分捕り物を取ってエジプトに帰ります。その後、セレウコス二世はエジプトを攻めますが、敗退してアンケオケに戻ります。

「10 しかし、その息子たち(セレウコス三世とアンティオコス三世・大王)は戦いを仕掛け、おびただしい数の強力な大軍を集める。進みに進んで押し流すように越えて行き、そうしてまた敵の砦に戦いを仕掛ける。11 南の王(プトレマイオス四世)は大いに怒って戦いに出て来て、彼と、すなわち北の王(アンティオコス大王)と戦う。北の王はおびただしい大軍を起こすが、その大軍は敵の手には渡される。12 その大軍を打ち破ると南の王(プトレマイオス四世)の心は高ぶり、数万人を倒す。しかし、勝利を得ることはない。13 北の王(アンティオコス大王)が再び、以前より大きな、おびただしい大軍を起こして、何年かの後、大軍勢と多くの武器をもって攻めて来るからである。14 そのころ、多くの者が南の王(プトレマイオス五世)に反抗して立ち上がり、あなたの民の暴徒たち(ユダヤ人でアンティオコス大王とともにエジプトに反抗する者)も、高ぶって幻を実現させようとするが、失敗する。15 しかし、北の王(アンティオコス大王)が来て壘を築き、城壁のある町を攻め取ると、南の軍勢(プトレマイオス五世の軍勢)は立ち向かうことができず、精兵たちでさえ立ち向かう力がない。」このように北のセレウコス朝シリアと南のプトレマイオス朝エジプトの戦いが続きます。

「16 そのようにして、これを攻めて来る者(アンティオコス大王)は思いのままにふるまう。彼に立ち向かう者はいない。彼は麗しい国(イスラエル)にとどまり、自分の手で滅ぼし尽くそうとする。17 彼(アンティオコス大王)は自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意し、まず相手(プトレマイオス五世)と和睦して娘の一人(クレオパトラ一世)を与え、その国を滅ぼそうとする。しかしそれは成功せず、彼の思いどおりにはならない。」アンティオコス大王は自分の娘クレオパトラ一世をプトレマイオス五世に与え、娘と組んでエジプトを滅ぼそうとしました。しかし、彼女は逆に夫を助けたので、アンティオコス大王の策略は失敗に終わりました。なお有名はクレオパトラはクレオパトラ七世です。彼女のルーツはシリアにありました。

「18 それで彼(アンティオコス大王)は島々(小アジアに面するエーゲ海の島々)に顔を向け、その多くを攻め取る。しかし、ある指揮官(ローマの将軍ルキオス)が彼に侮辱をやめさせるばかりか、かえってその侮辱を彼の上に返す。19 彼は自分の国の砦に引き返すが、つまずき、倒れていなくなる。20 彼に代わって、一人の人(セレウコス四世)が起こる。彼は国の栄光のために、税を取り立てる者を行き巡らす。数日のうちに、怒りにも戦いにもよらずに滅ぼされる。」アンティオコス大王がエーゲ海の島々を占領するのをローマが赦しませんでした。ローマは将軍ルキオス率いる軍隊を送り、シリア軍を追い返します。シリアに戻ったアンティオコス大王は殺されてしまいます。

「21 彼に代わって、一人の卑劣な者(アンティオコス四世・エピファネス)が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやって来て、巧みなことばを使って国を奪い取る。」アンティオコス・エピファネスは王位継承者ではありませんでしたが、巧みな言葉を使って味方を増やし、前175年に王になりました。彼は自らを神の現れと言い、神の現れ、顕現を意味するエピファネスと呼ばれ、歴史に名を残しました。彼のことはすでに8:23で「横柄で策にたけた一人の王が立つ」と預言され、終末に現れる反キリストの型となる人です。彼はユダヤ人を徹底的に迫害しました。

「22 彼の前では、洪水のような軍勢も、契約の君主(ユダヤの大祭司オニアス三世)さえも一掃されて打ち碎かれる。23 彼は同盟を組んだ後で欺き、少ない人数で勢力を増していく。24 彼は不意にその州の肥沃な地域(エジプト)に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。彼は計略をめぐらして要塞を攻めるが、それは、時が来るまで(神が定められた時まで)のことである。25 彼は勢力と勇気を駆り立て、大軍勢を率いて南の王(プトレマイオス六世)に立ち向かう。南の王も非常に強い大軍勢を率い、奮い立ってこれと戦うが、抵抗することができなくなる。南の王に対して計略をめぐらす者たちがいるからである。26 彼(プトレマイオス六世)のごちそうにあずかる者たちが彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が刺し殺されて倒れる。27 この二人の王(エピファネスとプトレマイオス六世)は、心で悪事を謀りながらも、一つの食卓に着いて、まやかしを言い合う。しかし、成功はしない。終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ。」

「28 彼(エピファネス)は多くの財宝を携えて自分の国に帰る。彼の心は聖なる契約に敵対して事を行い、彼は自分の国に帰って行く。」エピファネスはエジプトから多くの財宝を携えてシリアに戻る途中、エルサレム神殿を荒らし、多くのユダヤ人を殺し、また捕虜としてシリアに連れて行きました。「29 定めの際に、彼は再び南へ攻めて行くが、この二度目は初めの時のようではない。30 キティムの船(ローマ海軍)が彼に立ち向かって来るので、彼は落胆して引き返し、聖なる契約にいきりたって事を行う。彼は帰って行って、その聖なる契約を捨てた者たちに心を向けるようになる。」エピファネスの二度目の遠征は成功しませんでした。なぜなら、エジプトはローマに助けを求め、ローマ海軍がシリア軍を攻撃したからです。そのためシリア軍はエジプトを引き上げました。そしてその後、イスラエルに対する激しい迫害が起こります。そして迫害下で信仰を捨てたユダヤ人を取り立て、ユダヤ人をギリシア化(ヘレニズムに同化)させようとしてしました。

31 彼(アンティオコス・エピファネス)の軍隊は立ち上がり、砦である聖所を冒し、常供のささげ物を取り払い、荒らす忌まわしいものを据える。32 彼は、契約に対して不誠実にふるまう者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは堅く立って事を行う。33 民の中の賢明な者たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、一時は剣にかかり、火に焼かれ、捕らわれの身となり、かすめ奪われて倒れる。34 彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少なく、彼らにくみする者には巧みなことばを使う者が多い。35 賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時まで、彼らが鍊られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時がまだ来ないからである。

エピファネスの軍隊はエルサレムを攻撃し、神殿の祭壇に豚を供えて祭壇を汚し、神殿礼拝を廃止し、神殿の中にゼウスの神の祭壇を作りました。そしてユダヤ人を迫害しました。一方、信仰を捨てた人たちはますます墮落していきます。けれども迫害の中でも忠実に神に従った人たちがいました。その人たちが「自分の神を知る人たち」「賢明な者たち」です。彼らは同胞ユダヤ人に対して神に忠実に歩もうと励みます。しかし迫害はますます激しくなり、多くの人が殉教します。歴史的には、神に忠実に従う人たちはマタティアとユダ・マカベアをリーダーに、シリア軍と戦いました。その時、まずエピファネスに従った人たちのところに行き、武力をもって脅し、信仰に立ち返るように説得しました。その結果、多くの人がユダ・マカベア側に着きました。そして、長い戦いの末、前165年エルサレムを奪還し、神殿をきよめ、神殿礼拝を回復させました。それは毎年宮きよめの祭(ハヌカ)となり、ユダヤ人の祝いの日となりました。(ヨハネ 10:22) 神の民に対する迫害や殉教は、終わりの日まで続きます。

36 この王(反キリスト)は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。37 彼は先祖の神々を心にかけず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。38 その代わりに彼は砦の神をあがめ、金、銀、宝石、宝物をもって、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。39 彼は異国の神の助けによって城壁のある砦を取り、彼が認める者には栄誉を増し加え、多くのものを治めさせて、代価として国土を分け与える。

36 節からは反キリストについてです。終末の大患難時代に、最終的な反キリストと呼ばれるこの世の支配者が現れます。しかし、その時までキリストに逆らい、クリスチャンを迫害する多くの反キリストが現れます。(Iヨハネ 2:18) 反キリストは、神の民をきよめるための迫害が終わる時まで栄えます。ユダ・マカベアたちは武器を取って、シリア軍と戦い神殿を取り戻しました。一方、クリスチャンの迫害に対する対応は彼らとは違い、武器を取って戦いません。「剣を取る者はみな剣で滅びます。」(マタイ 26:52) 私たちの戦いは霊的戦いです。「ここに聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。」(黙示 13:10)

40 終わりの時に、南の王(終末に現れる世俗勢力)が彼(反キリスト)と戦いを交える。北の王(反キリスト)は戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。41 彼は麗しい国(イスラエル)に攻め入り、多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々(終末の時に神の民に反対する勢力)は、彼の手から逃げる。42 彼は国々に手を伸ばす。エジプトの地もその手を免れることはない。43 彼は金や銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。44 しかし、東と北からの知らせが彼をおびえさせる。彼は多くのものを絶滅させようとして、激しく怒って戦いに出て行く。45 彼は、海(地中海)と聖なる麗しい山(エルサレム)との間に、本営の天幕を張る。しかし、だれも助ける者はなく、ついには彼は終わりを迎える。

反キリストは武力によって次々に世界を支配していきます。そして神の民も攻撃を受けて殉教します。一方、反キリストに反抗する世俗勢力も東からも北からも現れます。反キリストは彼らを絶滅するために、地中海とエルサレムの間に本営の天幕を張ります。「こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。」黙示録 16:16 けれども反キリストの滅びは突然やって来ます。それはキリストが再臨される時です。「また私(ヨハネ)は、獣(反キリスト)と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方(再臨のキリスト)とその軍勢に戦いを挑むのを見た。しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。」黙示 19:19-20

(3)大患難時代と新天新地 12 章

12 章はこの世の終末における大患難時代、復活、新天新地における救いの完成が預言されています。「1 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。3 賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。」

終末時代に御使いの長ミカエルが立ち上がります。黙示録 12 章にはミカエルと御使いが竜(悪魔)と悪霊と戦い、悪魔と悪霊は地に投げ落とされ、神の民を苦しめることが記されています。この時、大患難時代がやって来ます。しかし、やがてキリストが再臨され、いのちの書に名が記されている者はみな救われます。第一の復活は永遠のいのちにあずかる者に、第二の復活は永遠の滅びに至る者に起こります。救われた民は新天新地で主の栄光を受けて輝きます。ダニエルはこの預言のことばを保存するように命じられます。人は自分の知恵で終末について知ろうとしても知ることができません。聖書を通してのみ真の知識を得ることができるのです。

「5 私ダニエルが見ていると、見よ、二人の人が立っていた。一人は川のこちら岸に、もう一人は川の向こう岸にいた。6 その一人が、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。「この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」7 すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼はその右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方にかけて誓った。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」

ダニエルは二人の御使いを見ました。その一人が川の水の上にいるあの亜麻布の衣を着た人(受肉前のキリスト 10:5, 6)に、終末の出来事はいつ終わるのかと聞きました。受肉前のキリストは神に誓って言いました。「それは、一時と二時と半時である。」7:25 ですでに語られた大患難時代の期間は3年半です。9 章の 70 週の預言と合わせると、イエスの十字架と復活までが 69 週、その後教会時代(中間時代)があり、終末時代が最後の 70 週目です。そして、70 週目の後半の 3 年半が大患難時代です。その後キリストが再臨され、最後の審判の後に、神の救いが成就し、新天新地が現れます。

「8 私はこれを聞いたが、理解することができなかった。そこで私は尋ねた。『わが主よ、この終わりはどうなるのでしょうか。』9 彼は言った。『ダニエルよ、行け。このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。10 多くの者は身を清めて白くし、そうして錬られる。悪しき者どもは悪を行い、悪しき者どものだれも理解することがない。しかし、賢明な者たちは理解する。11 常供のささげ物が取り払われ、荒らす忌まわしいものが据えられる時から、千二百九十日がある。12 幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日に達する者は。13 あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。』」

ダニエルはこの預言を理解することができませんでした。キリストはこの預言は封じられており、今は理解しなくてもよいので行けと言われました。大患難時代には、神の民は試練を通して訓練され、きよめられます。そして神の奥義を理解することができます。一方、神に従わない悪しき者は、悪を行い続け、だれも神の奥義を悟ることはできません。三年半よりも 30 日多い 1290 日の意味は、三年半の大患難時代における反キリストの迫害の激しさを教えています。1335 日は 1290 日よりさらに 45 日多く、その意味は大患難時代の激しい迫害に耐えるために、忍耐が必要であることを教えています。

受肉前のキリストは老人になったダニエルに対して、最後まで忠実に歩み、神の時が来たなら地上での生涯を終えるようにと言われます。そして、やがて復活の時には、新天新地にある「あなたの割り当ての地に立つ」と約束されました。イエスは言われました。「わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」ヨハネ 14:3 ダニエルに与えられた約束を、私たちもイエスによっていただいています。「あなたの時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ」という信仰のゴールを覚えて、地上の生涯を主に忠実に歩みましょう。

119. ホセア書(1)

ホセアからマラキまでの12書は小預言書に分類され、ホセア書は小預言書の最初の書物です。ホセアに啓示された書物なので、ホセア書と呼ばれます。ホセアは主に北イスラエルで活動した預言者で、ヤロブアム2世の時代からサマリア陥落直前までの約40年間、預言者として働きました。ヤロブアム2世(前786年-前746年)の時代は、北イスラエルが最も栄えた時代でした。ところが前745年にティグラト・ピレセル(プル)がアッシリアの王位についてから、国際情勢は一変しました。ティグラト・ピレセルは強力な軍事力を整えて領土拡大に努め、服従した国は属国として支配し、抵抗した国は滅ぼして属州としました。また征服した民を遠隔地に連れ去り、他の民族をその地に移住させることにより、征服された民が自分の国を復興させるのを困難にしました。

ホセアが預言した時代の北イスラエルは、混迷の時代を迎えました。ヤロブアム2世の死後、後を継いだゼカリヤは6か月統治しただけで、シャルムによって殺され、エフー王家は滅びました。その一か月後、シャルムはメナヘムに殺され、メナヘムが10年間治めました。ティグラト・ピレセルがイスラエルに攻めてきた時、メナヘムはアッシリアに銀千タラントを貢物として与えたので、彼はアッシリアに戻りました。親アッシリア政策を取ったメナヘムの死後、その子ペカフヤが王となり、引き続き親アッシリア政策を取りました。しかし親アッシリア政策に不満を持つペカによって殺され、ペカが王となり20年間治めました。ペカの時代にティグラト・ピレセルが率いるアッシリア軍が攻めて来て、イスラエル北部を占領し、住民をアッシリアに捕らえ移しました。ペカはホセアによって殺され、ホセアが王となり16年間治めました。ティグラト・ピレセルの次の王シャルマネセル5世の時に、アッシリア軍がイスラエルを攻め、次の王サルゴン2世の時、サマリアは陥落し、北イスラエルは滅びました。ホセアはそのような状況の中で、神のことばを民に伝えました。

1. ホセアの結婚とイスラエルに対する適用 1章

「2主はホセアに語られたことのはじめ。主はホセアに言われた。『行って、姦淫の女と姦淫の子らを引き取れ。この国は主に背を向け、淫行にふけっているからだ。』3彼は行って、ディブライムの娘ゴメルを妻とした。彼女は身ごもって、彼に男の子を産んだ。」ホセアは神の命令により姦淫の女ゴメルと結婚しました。やがて3人の子どもが生まれ、この家族関係が、ホセアが民に伝えた使信の基礎となりました。最初に生まれた男の子にはイズレエル(神は種を蒔くの意味)と名付けました。イズレエルはアハブとイゼベルの宮殿があった場所です。エフーによってアハブが属するオムリ王家は滅ぼされました。やがてエフー王家もシャルムによって滅びます。そして北イスラエルも滅びるという預言がなされます。

2番目と3番目の子どもは、ゴメルが姦淫によって産んだ子どもと考えられます。イズレエルは「彼女は身ごもって、彼に男の子を産んだ」とあるので、ホセアの子です。一方、2番目と3番目の子どもには「ゴメル(彼女)は身ごもって女の子(男の子)を生んだ」とあるだけです。また2節に「姦淫の子らを引き取れ」とあるからです。2番目の女の子はロ・ルハマ(あわれまない者の意味)と名付けられました。神はイスラエルをあわれまないという預言です。3番目の男の子はロ・アンミ(わたしの民ではないの意味)と名付けられました。神とイスラエルとの契約は解消し、イスラエルは神の民ではなくなり、神はイスラエルの神でなくなるという預言です。

一方、1:10-2:1にはイスラエルの回復の希望が語られます。「10イスラエルの子らの数は、量ることも数えることもできない海の砂のようになる『あなたがたはわたしの民ではない』』とされたその場所で、彼らは『生ける神の子ら』と言われる。11ユダの人々とイスラエルの人々は一つに集められ、一人のかしらを立ててその地から上って来る。まことに、イズレエルの日は大いなるものとなる。1言え。あなたがたの兄弟には『わたしの民(アンミ)』と。あなたがたの姉妹には、『あわれまれる者(ルハマ)』と。」

神はイスラエルの民の増加に言及し、イスラエルとの契約を更新して祝福すると宣言されます。イズレエルは「神は種を蒔く」という本来の祝福の意味になり、「わたしの民でない」から「生ける神の子ら」「わたしの民」に、「あわれまない者」から「あわれまれる者」に代わり、神の罰が全く過ぎ去ったことを示します。11節の預言にはいくつかの解釈があります。一つ目はバビロン捕囚からゼルバベルの指揮のもとに帰還する時、ユダの民に一部のイスラエルの民が加わるという意味。もう一つは、キリストによりユダヤ人と異邦人が教会に集められるという意味などが挙げられます。

120. ホセア書(2)

1. さばきと回復の使信 2:2-23

2章の前半はイスラエルの罪に対する神のさばきのメッセージです。「2 問いませ。あなたがたの母を問いませ。彼女はわたしの妻ではなく、わたしは彼女の夫ではないから。その顔から淫行を、その乳房の間から姦淫を取り除け。」2 節は、ゴメルに対するホセアの愛と怒りの複雑な思いが、背信のイスラエルに対する神の思いとして語られます。ゴメルは、ホセアと3人の子どもを捨てて、愛人のもとに行ってしまいました。その結果、ホセアはゴメルに対し、「彼女は私の妻ではなく、私は彼女の夫ではない」と言い、離縁しました。同様に神も、靈的姦淫を犯し、偶像礼拝するイスラエルに対し、「彼女はわたしの妻ではなく、わたしは彼女の夫ではない」と言って、神とイスラエルとの契約を解消すると言われます。

「5 彼らの母は姦淫を行い、彼らをはらんで恥をさらした。彼女は言ったものだ。『私の愛人たちの後について行こう。彼らはパンと水、羊毛と麻、油と飲み物をくれる』と。」ゴメルは姦淫の子を産み、子どもと夫ホセアを捨てて、豊かな物質生活にあこがれて、恋人たちのもとに行ってしまいました。同様に、イスラエルも豊作を与えるバアルの神々を恋人として従って行き、靈的姦淫を犯しました。「13 彼女がバアルの神々に仕えた日々のゆえに、わたしは彼女を罰する。彼女はバアルの神々に香をたき、耳輪や飾りをつけて愛人たちの後について行き、このわたしを忘れた。-主のことば。」神はイスラエルの靈的姦淫の罪に対するさばきを行われます。すべての祭儀は中止され、神に見捨てられ、民は捕囚にされて、国は荒廃すると預言されます。

2章の後半は再び神のあわれみによるイスラエルの回復の預言です。「14 それゆえ、見よ、わたしは彼女を誘い、荒野に連れて行って優しく彼女に語ろう。16 その日になると一主のことば一あなたはわたしを『私の夫』と呼び、もう『私のバアル』とは呼ばない。19 わたしは永遠に、あなたと契りを結ぶ。義とさばきと、恵みとあわれみをもって、あなたと契りを結ぶ。20 真実をもって、あなたと契りを結ぶ。この時、あなたは主を知る。」神はイスラエルを招き、優しく語り、神との契約を回復されます。イスラエルはバアルの神から全く離れ、主なる神に立ち返ります。「契りを結ぶ」は婚約するという意味の言葉で、3 回繰り返されることによって、イスラエルに対する神の愛が強調されます。神はイスラエルとの契約を回復する時、贈物として義、さばき(神の正しさをもとにした決定)、恵み、あわれみ、真実を与えられます。

「23 わたしは、わたしのために地に彼女を蒔き、あわれまない者をあわれむ。わたしはわたしの民ではない者に『あなたはわたしの民』と言い、彼は『あなたは私の神』と応える。」ホセアの3人の子どもの名前に象徴されたイスラエルに対する神の怒りとさばきが、救いによる祝福に変えられます。神はイスラエル再び地に蒔かれて増え広がり、イブレイエル(神は種を蒔く)の祝福が与えられます。ロ・ルハマ(あわれまない者)はあわれみを受け、ロ・アンミ(わたしの民ではない)は「わたしの民」と呼ばれます。

2. 背いた者への愛 3章

妻の背信によって失意の中にあったホセアに、主は愛のあるべき姿を教え、ゴメルを呼び戻すように語られます。「1 主は私に言われた。『再び行って、夫に愛されていながら姦通している女を愛しなさい。ちょうど、ほかの神々の方を向いて干しぶどうの菓子を楽しむイスラエルの子らを主が愛しているように。』2 それで私は、銀 15 シェケルと大麦 1 ホメルと大麦 1 レクテで彼女を買い取り、3 彼女に言った。『これから長く、私のところにとどまりなさい。もう姦淫したり、ほかの男と通じたりしてはいけない。私も、あなたにとどまろう。』」愛人たちのもとに行ったゴメルはその後ますます墮落し、奴隷状態になっていました。ホセアは多大な犠牲を払って彼女を買い取り、家に連れ戻し、婚姻の誓いを更新しました。ホセアは再び妻となったゴメルに対し、姦淫の罪を悔い改め、夫であるホセアに誠実を尽くすように言いました。そして「私もあなたにとどまろう」と言って、ホセアもゴメルに誠実を尽くすと約束しました。

「5 その後で、イスラエルの子らは帰って来て、自分たちの神である主と、自分たちの王ダビデを尋ね求める。そして終わりの日には、主とそのすばらしさにおののく。」イスラエルの回復のメッセージは、終わりの日すなわち終末の時にキリストが再臨され、新しい神の国が始まる時に完全に成就します。自分たちの王ダビデはキリストのことです。またイスラエルの子らは、新しいイスラエルである神の民のことです。その時神の民は、主とその素晴らしさにおののきます。

121. ホセア書(3)

1. イスラエルの罪と神のさばき 4-5 章

神はイスラエルの罪を指摘し、罪を非難してさばきを告げられました。「1 イスラエルの子らよ。主のことばを聞け。主はこの地に住む者を訴えられる。その地には真実もなく、誠実さもなく、神を知ることもないからだ。2 呪いと、欺きと、人殺しと、盗みと、姦通がはびこり、流血に流血が続いている。3 それゆえ、この地は喪に服し、そこに住む者はみな、野の獣、空の鳥とともに衰え果て、海の魚さえも一掃される。…6b あなたがあなたの神の教えを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れる。…13 彼らは山々の頂でいけにえを献げ、丘の上で犠牲を供える。」民は律法を無視し、罪を犯し、偶像礼拝を行い、神に逆らいました。その結果、神も彼らを拒みました。

「15 イスラエルよ。あなたが淫行をしても、ユダを咎ある者にさせてはならない。ギルガルに行ってはならない。ベテ・アベンに上ってはならない。『主は生きておられる』と誓ってはならない。」北イスラエルは霊的淫行である偶像礼拝を行っていました。一方で偶像礼拝を行い、他方で「主は生きておられる」と主なる神にかけて誓うことは、主への冒瀆です。ベテ・アベンが悪の家の意味で、神の家を意味するベテルの蔑称です。ギルガルもベテルも南ユダとの国境に近い場所です。国境近くで、イスラエルが偶像礼拝をし、神を冒瀆する行為をすれば、南ユダに悪影響を及ぼすので、国境近くに行くなど神は言われたのです。

「13b エフライムはアッシリアに行き、大王に人を遣わした。しかし、彼はあなたがたを癒すことができず、あなたがたの腫れものも治せない。…15 わたしは自分のところに戻っていよう。彼らが罰を受け、わたしの顔を慕い求めるまで。彼らは苦しみながら、わたしを探し求める。」エフライムとは北イスラエルのことで、彼らは主を求めず、アッシリアに助けを求めました。しかし、アッシリアはイスラエルを助けるどころか、アッシリアによってイスラエルは滅びました。それは彼らの罪に対する神のさばきでした。しかし、イスラエルは神にさばかれることによって、神を求めるようになります。それまで神はイスラエルを祝福することをやめられます。

2. 罪に満ちたイスラエル 6-8 章

6 章はホセアの悔い改めのメッセージから始まります。「1 さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちを打ったが、包んでくださるからだ。2 主は二日の後に私たちを生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださる。私たちは御前に生きる。3 私たちは知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁のように確かに現れ、大雨のように私たちのところに来られる。地を潤す、後の雨のように。」罪を悔い改め、主に立ち返るなら、主はイスラエルを癒し、祝福して下さいます。

しかし、イスラエルはこの招きに答えず、ユダも形式的にいけにえをささげますが、神への真実の愛が伴いません。ホセアは主に北イスラエルで働きますが、彼のメッセージはその都度南ユダにも向けられます。「4 エフライムよ。わたしはあなたに何をしようか。ユダよ。わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの真実の愛は朝もやのよう。朝早く消え去る露のようだ。…6 わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない。全焼のいけにえよりもむしろ、神を知ることである。」

7 章は続けてイスラエルの罪と神のさばきを語ります。イスラエルは神に立ち返らず、アッシリアに頼り、罪を重ねます。それゆえ主もイスラエルをさばかれます。「11 エフライムは愚かな鳩のようで、良識がない。エジプトを呼び求め、アッシリアに飛んで行く。12 彼らが赴くとき、わたしは彼らの上に網を張り、空の鳥のように彼らを引き降ろす。彼らの群れの音を聞くと、わたしは彼らを懲らしめる。13 わざわいだ、彼らは。わたしから離れ去ったのだから。彼らは、踏みにじられるがよい。わたしに背いたのだから。わたしが贖い出そうとしているのに、彼らはわたしに向かってまやかしを言う。」

8 章はイスラエルとユダの罪に対する神のさばきが語られます。「4 彼らは王を立てたが、わたしによってではない。首長を立てたが、わたしは知らない。彼らは自分の銀や金で自分のために偶像を造った。ただ断ち切られるために。…9 彼らは、ひとりぼっちの野ろばで、アッシリアへ上って行った。エフライムは愛を求めて贈り物をした。…14 イスラエルは自分の造り主を忘れ、神殿をいくつも建てた。ユダは城壁のある町々を増し加えた。しかし、わたしはその町々に火を放つ。火は宮殿を焼き尽くす。」イスラエルの王は主が立てた王ではありません。偶像礼拝をし、律法を破り、アッシリアに頼りました。またユダも人の力、物質の力に頼りました。神は主に信頼しないイスラエルとユダを滅ぼされます。

122. ホセア書(4)

1. イスラエルの罪と神のさばき 9-14 章

9 章も引き続きイスラエルの罪に対する神のさばきが語られます。「1 イスラエルよ。喜ぶな。諸国の民のように楽しむな。あなたは自分の神に背いて姦淫したからだ。あなたはすべての麦打ち場で姦淫の報酬を愛した。…17 私の神は彼らを退ける。彼らが神に聞き従わなかったからだ。彼らは国々の間で、さすらい人となる。」イスラエルは偶像礼拝という霊的姦淫を犯しました。麦打ち場は、収穫にまつわるバアルの神の礼拝の場所でした。神は背信のイスラエルを退けられます。その結果、彼らはアッシリアによる捕囚と外国の地での流浪の民となります。

10 章前半は、ベテ・アベンの罪に対する神のさばきです。「5 サマリアの住民は、ベテ・アベンの子牛のことでおののく。その民はそのことで喪に服し、偶像に仕える祭司たち、その栄光を喜んでいた者たちも喪に服す。栄光が子牛から去ったからだ。6 それはアッシリアに持ち去られ、大王への贈物となる。…イスラエルの罪であるアベンの高き所は滅ぼし尽くされる。」ベテ・アベン(悪の家)はベテル(神の家)の蔑称です。北イスラエルにはベテルとアイに金の子牛が祭られ、この偶像を神として礼拝しました。神はイスラエルをさばき、金の子牛は取り除かれ、アッシリアに持ち去られます。

10 章後半はギブアの罪に対する神のさばきです。「9 イスラエルよ。ギブアの日以来、あなたは罪を犯してきた。そこで彼らは同じことを行っている。ギブアで、戦いがその不法の民を襲わないだろうか。」ギブアの日とは士師記 19 章の出来事で、レビ人の側女が夜通しギブアの男たちによって暴行されて死んだ出来事です。ホセアはイスラエルの罪深さはギブアの罪に匹敵する罪を犯していると言います。その罪に対する神のさばきとして、イスラエルは戦いに巻き込まれて滅びるのです。「12 あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れ、耕地を開拓せよ。今が主を求める時だ。ついに主は来て、正義の雨をあなたがたの上に降らせる。」イスラエルの回復の希望は、徹底した罪の悔い改めと、主に対する信仰、そして信仰の実としての正義と誠実を結ぶことです。そうすれば、主が祝福をもってイスラエルに戻ってくださるのです。

11 章は神の愛と義の両方を語ります。「5 彼はエジプトの地には帰らない。アッシリアが彼の王となる。彼らばわたしに立ち返ることを拒んだからだ。…8 エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き離すことができるだろうか。…わたしの心はわたしの内で沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。…11 鳥のようにエジプトから、鳩のようにアッシリアの地から、彼らは震えながらやって来る。わたしは彼らを自分たちの家に住ませよう。一主のことば。」11 節では捕囚からの帰還とともに終末におけるイスラエルの回復が語られます。

12 章は背信を続けるイスラエルに対する神の招きです。「5 主は万軍の主。その呼び名は主。あなたは、あなたの神に立ち返り、誠実と公正を守り、絶えずあなたの神を待ち望め。…9 しかしわたしは、エジプトの地にいた時から、あなたの神、主である。例祭の日のように、再びあなたを天幕に住まわせる。」神はイスラエルを愛するゆえに、罪に対する懲らしめを与えられます。そして、彼らが苦しみの中で悔い改めるのを待っておられます。そして、悔い改める者を喜んで迎えてくださいます。

13 章は続けてイスラエルの罪に対する神のさばきを語ります。その中で、やがて神の素晴らしい祝福が来ることが預言されます。「14 わたしはよみの力から彼らを贖い出し、死から彼らを贖う。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。」今はまだ神のあわれみは隠されています。しかし、やがてキリストが来られるとこの預言は成就します。パウロは I コリント 15:55 でこの節を引用し、キリストによって死に対する勝利が与えられたと語ります。

14 章はイスラエルに対する悔い改めの勧めと神の民としての回復のメッセージです。神は悔い改めた民の罪を赦し、彼らを再び愛し、受け入れられます。「1 イスラエルよ。あなたの神、主に立ち返れ。あなたは自分の不義につまずいたのだ。2 あなたがたはことばを用意して主に立ち返れ。主に言え。『すべての不義を赦し、良きものを受け入れて下さい。私たちは唇の果実をささげます。3 アッシリアは私たちを救えません。私たちはもう馬に乗らず、自分たちの手で造った物に「私たちの神」と言いません。みなしごがあわれまれるのは、あなたによってです。』4 『わたしは彼らの背信を癒し、喜びをもって彼らを愛する。わたしの怒りが彼らから離れ去ったからだ。』」

123. ヨエル書（1）

小預言書の2番目はヨエル書です。この書はヨエルが書いた預言書なので、ヨエル書と呼ばれています。ヨエルについては時代背景がわかる直接的な記述がありません。けれどもヨエル書の時代は、祭司が国家の中心的な役割を果たしていることから、南ユダ王国のヨアシュ王の時代ではないかと考えられています。ヨアシュは7歳で王となったため、政治の実権は祭司エホヤダが握っていました。ヨエルは前830年頃にユダに対して悔い改めのメッセージを語りました。

1. いなごの災害と悔い改めのメッセージ 1:1-2:27

「1 ペトエルの子ヨエルにあった主のことば。2 長老たちよ。これを聞け。この地に住む者もみな、耳を傾けよ。このようなことが、あなたがたの時代に、また先祖の時代にあったらどうか。4 噛みいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、バッタが食い、バッタが残した物は、その若虫が食った。6 ある国民がわたしの国に攻め上って来た。それは力強く、数えきれない。その歯は雄獅子の歯、それには雌獅子の牙がある。」1:1-2:17 は罪に対する神の警告とさばきのメッセージです。ヨエルの時代に起きたいなごによる災害は、かつてないほどの大きな被害をユダにもたらしました。この災害は神のさばきであり、さらに大きな神のさばきが来る前兆であると語りました。そして、近い将来の外国の軍隊による攻撃が神のさばきとして起こると語ります。

「9 穀物と注ぎのささげ物は主の宮から断たれ、主に仕える祭司たちは喪に服す。13 粗布をまとして悼み悲しめ、祭司たちよ。泣き叫べ、祭壇に仕える者たちよ。私の神に仕えている者たちよ、行って粗布をまとして夜を過ごせ。穀物と注ぎのささげ物があなたがたの神の宮から退けられたからだ。14 断食を布告し、きよめの集会を召集せよ。長老たちとこの国に住むすべての者を、あなたがたの神、主の宮に集め、主に向って叫び求めよ。」ヨエルは祭司たちに粗布をまとい、夜を徹して神の前に悔い改めるようにと語ります。さらに断食を布告し、きよめの集会を召集し、民を主の宮に集め、主に向かって悔い改めの叫びをするようにと伝えます。

「15 ああ、その日よ。主の日は近い。全能者による破壊の日として、その日は来る。」「2:1 シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声を上げよ。地に住むすべての者は、恐れおのけ。主の日が来るからだ。その日は近い。2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が暁とともに山々の上に進んでくる。10 地はその前で震え、天も揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。主はご自分の軍隊の先頭に立って声をあげられる。その陣営は非常に大きく、主のことばを行う者は強い。主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられるだろう。」「主の日」はヨエル書の中心テーマの一つです。それは神のさばきの日です。このさばきの一つには近い将来の外国の軍隊による攻撃です。もう一つは終末における神のさばきです。この二つを重ね合わせて主の日として語られます。

「12 しかし、今でも—主のことば—心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのものとに帰れ。13 衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深い。怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださる。14 もしかすると、主が思い直してあわれみ、祝福を後に残しておいてくださるかもしれない。あなたがたの神、主への穀物と注ぎのささげ物を。」ヨエルは引き続き、民に悔い改めて主に立ち返るようにと語ります。そして主は情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるお方であることを伝えます。

「21 地よ、恐れるな。楽しみ、喜べ。主が大いなることを行われたからだ。23 シオンの子らよ。あなたがたの神、主にあって、楽しみ喜べ。主は、義のわざとして、初めの雨を与え、かつてのように、あなたがたに大雨を降らせ、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。打ち場は穀物で満ち、石がめは新しいぶどう酒と油であふれる。25 いなご、あるいはバッタ、その若虫、噛みいなご、わたしがあなたがたに送った大軍勢が食い尽くした年々に対して、わたしはあなたがたに償う。」2:18-27 は回復と祝福のメッセージです。神は罪を悔い改め、主を呼び求める者にはあわれみ深く、主の祝福が回復し、主がイスラエルの真ん中に戻られ、物質的にも豊かにされるとの約束が与えられます。

124. ヨエル書（2）

1. ペンテコステと終末の預言 2:28-32

「28 その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。29 その日わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ。30 わたしは天と地に、しるしを現わさせる。それは血と火と煙の柱。31 主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。32 しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。主が言ったように、シオンの山、エルサレムには逃れの者がいるからだ。生き残った者たちのうちに、主が呼び出す者がいる。」聖霊降臨の預言は、ヨエルの時代から 800 年後のペンテコステの日に成就しました。イエスの弟子たちに聖霊が降られた時、ペテロは「これは預言者ヨエルによって語られたことです」と言って、ヨエル書のみことばを語りました。旧約時代は、聖霊は特定の人に特定の時に臨まれました。しかし救い主が来られると、主イエスを信じるすべての人に聖霊が与えられます。30, 31 節のしるしは、主の再臨の前に起こるしるしです。その後で「主の大いなる恐るべき日」である神のさばきの日がやって来ます。しかしそれまでは「主の御名を呼び求める者はみな救われる」恵みの時、救いの日です。「主の御名を呼び求める者」は「主が呼び出す者」です。

2. 神のさばき 3:1-15

「1 見よ。わたしがユダとエルサレムを回復させるその日、その時、2 わたしはすべての国々を集め、彼らをヨシャファテの谷に連れ下り、わたしの民、わたしのゆずりイスラエルのために、そこで彼らをさばく。彼らはわたしの民を国々の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分配したのだ。」3 章のさばきのメッセージは、歴史的な出来事を通して、終末における主の日のさばきを預言しています。ユダとエルサレムの回復は、神の民が神との関係を完全に回復することです。ヨシャファテは「主はさばきをされた」という意味で、ヨシャファテの谷は、神の敵との最後の戦いの場となる所です。神の救いは神のさばきの中で成就します。

「4 ツロとシドン、またペリシテの全地域よ。おまえたちは、わたしにとって何なのか。わたしに報復しようとするのか。もしわたしに報復しようとしているなら、わたしはただちに、速やかに、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返す。6 ユダの人々とエルサレムの人々をギリシア人に売って、彼らの領土から遠く離れさせたからだ。」ツロとシドンは地中海貿易の中心地で、奴隷売買も盛んに行われました。イスラエルを苦しめるツロ、シドン、ペリシテに神は報復すると言われます。実際に、シドンは前 343 年にペルシアによって滅ぼされ、ツロとペリシテは前 332 年にアレクサンドロス大王によって滅ぼされました。この歴史的事実は、終末における神のさばきのモデルとされています。

「9 国々の間で、こう叫べ。聖戦を布告せよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。10 あなたがたの鋤を剣に、あなたがたの鎌を槍に打ち直せ。弱い者に『私は有志だ』と言わせよ。12 諸国の民は立ち上がり、ヨシャファテの谷に上って来い。わたしがそこで、周辺のすべての国々をさばくために、座に着くからだ。14 判決の谷には、群衆また群衆。主の日が判決の谷に近づくからだ。太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。」終末における最後の戦いの預言です。10 節はイザヤ 2:4、ミカ 4:3 の「剣を鋤に、槍を鎌に打ち直す」とは正反対となり、諸国の民は武装して神と神の民と戦うためにヨシャファテの谷に集まってきます。そしてそこで主は神に逆らう民にさばきを行われます。

「16 主はシオンからほえ、エルサレムから声をあげられる。天も地も震える。主はその民の避け所、イスラエルの人々の砦である。『17 あなたがたは知るようになる。あなたがたの神、主であるこのわたしが、わが聖なる山、シオンに住むことを。エルサレムは聖なる所となり、他国人が再びそこを通ることはない。18 その日には、山に甘いぶどう酒が滴り、丘には乳が流れ、泉が主の宮から湧き出て、シティムの溪流を潤す。21 わたしは彼らの血の復讐をし、罰せずにはおかない。主はシオンに住む。』神によってイスラエルの敵は打ち負かされ、シオンに主が生まれ、イスラエルは復興するという預言です。同時に、終末における全世界的な神のさばきが預言されています。

125. アモス書 1

小預言書の 3 番目はアモス書です。この書はアモス書いたのでアモス書と呼ばれています。アモスは南ユダのテコア(ベツレヘム南 10km の町)で牧者また農夫として働いている時に、預言者の召しを受けて、北イスラエルで預言しました。ヤロブアム 2 世(前 793～753)の時代に預言したアモスは、同じく北イスラエルで預言したホセアと時代が重なっています。ヤロブアム 2 世の時代の北イスラエルは、外国からの侵略もなく、領土は拡大し、平和で繁栄しました。しかし、豊かさを楽しんだのは一部の上流階級だけで、民衆は貧しく、圧制に苦しみ、虐げられていました。また、道徳は乱れ、社会悪が増大し、偶像礼拝が行われていました。アモスはこのような状態にあるイスラエルに対して、神のさばきを語り、悔い改めて主を求めて生きようと語りました。

1. 諸国に対する神のさばき 1:2-2:5

アモスはまずイスラエルの近隣 6 か国に対する神のさばきを告げます。「…三つの背き、四つの背きのゆえに、わたしは彼らを顧みない」という定式を用いて、それぞれの国の罪を指摘し、神のさばきが下ると告げました。「三つの背き、四つの背き」とは「多くの背き」と言う意味の言い回しです。それらの国々は、ダマスコ(アラム・シリア)、ガザ(ペリシテ)、ツロ(フェニキア)、さらにイスラエルと親戚関係にあるエドム(エサウの子孫)、アンモン(ロトの子孫)、モアブ(ロトの子孫)です。次にアモスが語ったのは、彼自身の国ユダに対してでした。「4 ユダの三つの背き、四つの背きのゆえに、わたしは彼らを顧みない。彼らが主のおしえを捨てて、その掟を守らず、先祖がつき従ったまやかしものが彼らを惑わしたからだ。5 わたしはユダに火を送る。その火はエルサレムの宮殿を焼き尽くす。」律法を破り、偶像礼拝の罪を犯すユダを神はさばくと告げました。

2. イスラエルに対する神のさばき 2:6-4:13

もしアモスの預言が、ユダに対するさばきのメッセージで終わっていれば、イスラエルの民は、喜んだことでしょう。しかし、アモスの預言の本命はイスラエルでした。イスラエルに対する預言も定式で始めますが、さらに具体的にイスラエルの罪とそれに対する神のさばきを次々に語ります。「2:6 イスラエルの三つの背き、四つの背きのゆえに、わたしは彼らを顧みない。彼らが金と引き換えに正しい者を売り、履き物一足のために貧しい者を売ったからだ。7 彼らは、弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、貧しい者の道を曲げている。子とその父が同じ女のもとに通って、わたしの聖なる名を汚している。8 彼らは、すべての祭壇のそばで、質に取った衣服の上に横たわり、罰金で取り立てたぶどう酒を自分たちの神の宮で飲んでいいる。」富める者は貧しい者を虐げ、奴隷として売り、道徳は乱れ、貧しい者から取り上げたぶどう酒を飲んで楽しんでいました。神はそのようなイスラエルをさばかれます。

「3:14 まことにイスラエルの背きのゆえに、わたしが彼らの上に報いる日に、わたしはベテルの祭壇を罰する。その祭壇の角は折られ、地に落ちる。15 わたしは冬の家と夏の家を打つ。象牙の家は滅び、大邸宅も消え失せる。」ベテルとダンにはイスラエルの初代の王ヤロブアムが造った金の子牛の偶像が祭られていました。イスラエルの民はその偶像を礼拝し、主に対して罪を犯しました。祭壇の四隅には角があり、その角につかまると刑罰を免れると考えられていました。その角が折られ地に落ちるとは、イスラエルは神のさばきを免れることができないということです。

4:6-11 では、神が与えた 7 つの災いによってもイスラエルが主のもとに帰ってこなかったことが、「それでも、あなたがたはわたしのもとに帰ってこなかった」という定式で語られます。7 つの災いは、飢饉による食料の不足、渇水、熱風と病気による植物の不作、いながによる飢饉、疫病、戦争、炎(地震)です。「11 あなたがたは、炎の中から取り出された燃えさしのようなになった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰ってこなかった。―主のことば。」

「12 それゆえイスラエルよ、わたしはあなたがたにこのようにする。わたしがあなたがたにこうするから、イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ。」神のもとに帰ってこないイスラエルに対して、神は「あなたの神に会う備えをせよ」と語られます。罪の中にいながら神に会えば、神のさばきを受けます。イスラエルが神のことばによって自分たちの現状を顧み、罪を悔い改めて神に立ち返ることが、唯一救いに至る神に会う備えです。

126. アモス書 2

1. 神のさばきと神の招き 5-6 章

5 章と 6 章は神のさばきと神の招きが交互に語られます。「主はイスラエルの家にこう言われる。『わたしを求めて生きよ。ベテルを求めな。ギルガルに行くな。ベエル・シェバに赴くな。ギルガルは必ず捕らえ移され、ベテルは無に帰するからだ。』主を求めて生きよ。そうでないと、主は火のように、ヨセフの家に激しく下る。火はこれを焼き尽くし、ベテルにはそれを消す者がいなくなる。」5:4-6 ベテル、ギルガル、ベエル・シェバに祭られる偶像を求めるのではなく、主を求めて生きることこそ、神のさばきから逃れる唯一の方法です。偶像が祭られる地はやがて神のさばきによって滅びます。「ベテルは無に帰する」の直訳は「ベテルはアベン(悪)になる」で、ホセア 4:15 に出て来た「ベテル(神の家)はベテ・アベン(悪の家)になる」の言い換えと同じです。アモスがホセアと同時代に北イスラエルで預言した預言者であることを思わせる表現です。

「善を求めよ。悪を求めな。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたが言うように、万軍の神、主が、ともにいてくださる。悪を憎み、善を愛し、門で正しいさばきを行え。もしかすると、万軍の神、主はヨセフの残りの者をあわれんでくださるかもしれない。」5:14-15 主を求めることは、善を求め、悪を求めず、悪を憎み、善を愛して、正しいさばきをすることです。イスラエルは悪を行いながら、主が共にいてくださると語っていたのです。「ああ。主の日を切に待ち望む者。主の日はあなたがたにとって何になろう。それは闇であって光ではない。」5:18 イスラエルは主の日に対して甘い期待を持っていました。しかし、罪の中にあるイスラエルに対して、主の日は救いの日ではなく、さばきの日となるのです。「公正を水のように、義を絶えず流れる谷川のように、流れさせよ。」5:24 不正と不義が満ちるイスラエルに、公正と義を絶えず流れさせることが、イスラエルの生きる道です。

6 章は、アモスの警告を無視し、偽りの繁栄をむさぼっている支配階級への非難と神のさばきの預言です。「わざわざ。シオンで安逸を貪る者。サマリアの山に信頼している者、イスラエルの家が頼って行く、国々の最高の首長たち。…象牙の寝台に横たわり長椅子でからだを伸ばし、群れのうちから子羊を、牛舎の中から子牛を取って食べている者、琴の音にのせて即興の歌を作り、ダビデに倣って自分たちの楽器を考え出す者。」1, 4, 5 「わたしはヤコブの誇りを忌み嫌い、その宮殿を憎む。わたしはこの都と、そのすべての者を引き渡す。…しかし、イスラエルの家よ。今わたしは、あなたがたに敵対する一つの国を起こす。-万軍の主のことは-彼らはレボ・ハマテからアラバの水無し川まであなたがたを虐げる。」8, 14 安逸を貪り、偽りの繁栄を楽しむイスラエルの支配階級に対して、神は敵対する一つの国(アッシリア)を起こし、彼らによってイスラエルをさばくと告げられます。

2. 幻による啓示 7:1-9

7 章から 9 章でアモスは、5 つの幻を通して神のさばきを預言します。その幻は、いなご、火、下げ振り、一かごの夏の果物、祭壇の傍らに立たれる主です。まず第 1 の幻で、王が刈り取った後の二番草をいなごが食い尽くそうとしました。民の食料になる二番草がいなごに食い尽くされれば、王には食料があっても民は飢えてしまいます。アモスは主に言いました。「『神、主よ。どうかお赦してください。ヤコブはどうして生き残れるでしょうか。彼は小さいのです。』主はこれを思い直された。そして、『そのことは起こらない』と主は言われた。」2, 3 アモスの訴えにより神のさばきは起こりませんでした。

第 2 の幻は責める火がイスラエルの地を焼き尽くそうとしていました。そこでアモスは主に訴えました。「『神、主よ。どうかおやめください。ヤコブはどうして生き残れるでしょうか。彼は小さいのです。』主はこれを思い直された。そして『そのことも起こらない』と神である主は言われた。」5, 6 アモスの訴えにより、イスラエルは神のさばきを免れました。しかし、第 3 の幻の振り下げの幻を主がアモスに見せられた時、主は「見よ。わたしは振り下げを、わたしの民イスラエルの真ん中に垂れ下げる。わたしはもう二度と彼らを見過ごさない」8 と言われました。振り下げは、垂直測定器のことで、イスラエルの家は取り壊す以外にないほど、神の基準から外れていました。

127. アモス書 3

1. アモスと祭司アマツヤ 7:10-17

アモスの見た幻の第3番目と第4番目の間に、アモスとベテルの祭司アマツヤの対話があります。北イスラエルの祭司はレビ人ではありません。イスラエルが南北に分裂した時、北イスラエル初代の王ヤロブアムはレビ人の祭司の任を解き、別の祭司を任命しました。そこで北イスラエルにいた祭司とレビ人は南王国にやって来ました。ですからアマツヤは王の管理下にあり、ベテルの金の子牛の偶像に仕える祭司です。「ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。『アモスは、イスラエルの家のただ中で、あなたに謀反を企てています。その国は彼のどのことばも受け入れることができません。アモスはこう言っています。『ヤロブアムは剣で死に、イスラエルはその土地から必ず捕らえられていく。』』アマツヤはアモスに言った。『先見者よ。さあ、ユダの地へ逃げるがよい。そこでパンを食べ、その地で預言するがよい。ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の宮だからだ。』」10-13

それに対してアモスはアマツヤに答えます。その中でアモスの預言者としての召命が語られます。「アモスはアマツヤに答えた。『私は預言者ではなかったし、預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。しかし、主が、群れの世話をしていたところから私を取り、主が私にこう言われた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ』と。』」14, 15 アモスは、以前は預言者とは全く関係のない、牧者であり農夫でした。そのアモスを神は預言者として召され、北イスラエルに神のことばを語るようにと召されたのです。ですから、アマツヤがどんなにおどしたとしても、北イスラエルでの預言を中止することはあり得ません。神はご自分に逆らうイスラエルの民を「わたしの民イスラエル」と呼ばれます。神はイスラエルの民との契約を忘れることはありません。

アモスは、イスラエルに向かって預言するなど語るアマツヤに対して、神のさばきを語ります。「今、主のことばを聞け。あなたは『イスラエルに向かって預言するな。イサクの家に向かってたわごとを言うな』と言っている。それゆえ、主はこう言われる。『あなたの妻は町で遊女となり、あなたの息子、娘たちは剣で倒れ、あなたの土地は測りなわで分割される。あなたは汚れた土地で死に、イスラエルはその土地から必ず捕らえられていく。』」16, 17 神のことばを妨げようとするアマツヤに対する主のことばは厳しいものでした。神のさばきはアマツヤと共に偶像に仕える家族にも及びます。そしてアマツヤは外国の地で死に、イスラエルの民も外国の地に捕えられていきます。

2. 第4の幻 8章

アモスとアマツヤとの対話の後、第4の幻をアモスは見ます。「神である主は私に示された。そこには一かごの夏のくだものがあった。主は言われた。『アモス。何を見ているのか。』私が『一かごの夏の果物です』と言うと、主は私に言われた。『わたしの民イスラエルに終わりが来た。わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。その日には、神殿の歌声は悲鳴に変わる。-神である主のことば-多くの屍が、いたるところに投げ捨てられる。口をつぐめ。』」1-3「夏」はヘブル語でカイツ、「終わり」はケーツで、二つの言葉が語呂合わせとなっています。本来収穫の祝福を表す一かごの夏の果物は、イスラエルの終わりを表し、神のさばきが確実にやって来ます。

「見よ、その時代が来る。-神である主のことば-そのとき、わたしはこの地に飢饉を送る。パンに飢えるのではない。水に渴くでもない。実に、主のことばを聞くことの飢饉である。彼らは海から海へと、北から東へとさまよい歩く。主のことばを探し求めて行き巡る。しかし、それを見出すことはない。その日には、美しい若い女も、若い男も渴きのために衰え果てる。」11-13 預言者の語る主のことばを聞かないイスラエルに対して、主のことばを聞くことの飢饉を送ると神は言われます。その時には神は沈黙され、人々は神のことばを聞きたくても聞けません。どんなに主を求めても、主は答えられないのです。この神のさばきは指導者階級だけでなく、次世代を担う青年男女にも下り、彼らのたましいは渴いて衰え果てます。主のことばを聞くことの飢饉は、いつの時代に生きる人にとっても、神からの警告です。神のことばを拒み続ければ、やがて聞こうと思っても聞けなくなるのです。そのようなことのないように、主のことばを聞く者となりましょう。

1. 第5番目の幻 9:1-4

アモスは第5番目の幻を見ました。その幻は今までのものとは違い、主ご自身がイスラエルをさばくために祭壇の傍らに立っておられました。「私は、祭壇の傍らに主が立っておられるのを見た。すると、主は言われた。『柱頭を打ちたたき、敷居が震えるようにせよ。すべての者の頭を打ち砕け。彼らのうち、生き残った者をわたしは剣で殺す。彼らのうち逃げられる者はなく、彼らのうち逃れられる者もない。…たとえカルメル山の頂に身を隠したとしても、わたしが彼らをそこから探し出して捕まえる。…わたしは彼らの上に目を注ぐ。それは、わざわいのためであって、幸いのためではない。』」1-4 イスラエルが神に背き続けた結果、神はもはや幸いを与えるためにイスラエルの上に目を注がれません。神はわざわいのために目を注ぎ、神のさばきからイスラエルは逃げることはできません。

2. 神のさばきと回復のメッセージ

「見よ。神である主の目が、罪深い王国に向けられている。わたしはこれを地の面から根絶やしにする。しかし、ヤコブの家を根絶やしにすることはない。-主のことば-見よ。わたしは命じて、すべての国々の間で、イスラエルの家をふるいにかける。ふるっても、小石は地に落ちないようにする。わたしの民の中の罪人はみな、剣で死ぬ。彼らは『わざわいは私たちに近づかない。私たちまでは及ばない』と言っている。」8-10 神は「罪深い王国を地の面から根絶やしにする」と言われますが、それを打ち消すように「しかし、ヤコブの家を根絶やしにすることはない」と言われました。イスラエルにはなお回復の希望があるのです。神のさばきはイスラエルの家をふるいにかけることです。ふるいに掛けられた穀物は下に落ち、穀物にまざっていた小石は残ります。そして残った小石は捨てられます。同様に、神は、災いは近づかないと言っている罪人(小石)をふるいの中に残し、神のさばきを受けて剣で死に、イスラエルの残れる者は生き残ります。

「11 その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。その破れを繕い、その廃墟を起こし、昔のようにこれを立て直す。12 これは、エドムの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての国々を彼らが所有するためだ。-これを行う主のことば。」11-12 ダビデの仮庵とはダビデの家のおちぶれたさまを示しており南王国の滅亡のことです。アモスはここで南王国の滅亡と回復を預言します。ユダは再建され、再び以前の領土を回復します。また旧約聖書では、ダビデの家は救い主の預言と関係があります。ダビデの家が回復することによって、ダビデの子孫として来られる救い主の預言も成就するのです。

11-12 節のみことばは使徒 15:16-18 に引用されています。エルサレム会議でヤコブは、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけないと語る中で、このみことばを引用します。その際、ヤコブが引用するのは70人訳と言われるギリシャ語訳です。ギリシャ語訳ではアモス 9:12 は「それは人々のうちの残りの者とわたしの名で呼ばれる異邦人が主を求めるようになるためだ」となっています。これはヘブル語本文の読み方の違いからなされた訳で、ギリシャ語訳が間違っているわけではありません。異邦人クリスチャンは割礼を受ける必要はないという重要事項を決定するために、アモス書のみことばが用いられました。

「わたしは、わたしの民イスラエルを回復させる。彼らは荒れた町々を立て直して住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。わたしは、彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない。-あなたの神、主は言われる。」14-15 北イスラエルと南ユダの二つの王国はやがて神のさばきを受けて滅びます。しかし、残りの者が捕囚から帰って来て、ダビデの家は再建されます。そして、ダビデの子孫として生まれる救い主が再建されたイスラエルから生まれます。そして、救い主イエスを信じたユダヤ人も異邦人も、新しい霊的イスラエルである神の民の群れである教会に加わるのです。

129. オバデヤ書

小預言書の4番目はオバデヤ書です。オバデヤ書は旧約聖書で最も短い書物です。著者はオバデヤです。オバデヤについては本書には何も記されていません。本書はエドムに対する神のことばです。エドムはヤコブの兄エサウの子孫であり、エドムとイスラエルは長らく敵対関係にありました。新約時代にはエドムはイドマヤと呼ばれていました。イエスのいのちをねらったヘロデ大王はイドマヤ人でした。本書の時代背景については2つの説がありますが、どちらも決定的な証拠はありません。①ユダの王ヨラムの時代(前 849～842)にペリシテ人とアラビア人がユダに侵略し、エドムがユダの支配から脱した時のこと。(Ⅱ歴代 21:4-17)②バビロンがユダを攻撃した時に、エドムがバビロンのもとでユダを攻めた時。

1. エドムに対する神のさばき 1-14

「岩の裂け目に住み、高い所を住まいとする者よ。おまえの高慢は、おまえ自身を欺いている。おまえは心の中で言っている。『だれが私を地に引きずり下ろせるのか』と。驚のように高く上っても、星々の間に巣を作っても、わたしは、おまえをそこから引きずり下ろす。-主のことば。』3, 4 エドムの都セラ(後のナバテア王国の首都ペトラと考えられている)は、切り立った岩壁を通り抜けた標高 1000 メートルの高台にあり、難攻不落の町と知られていました。そのため、そこに住むエドム人は高慢になり、だれも自分たちを攻めることはできないと言っていました。それに対してオバデヤは、主がエドムを引き下ろし、同盟国によって攻め滅ぼされるという神のさばきを伝えました。エドムは 70 年のローマ軍によるエルサレム陥落とともにその歴史を閉じました。

「おまえの兄弟、ヤコブへの暴虐のために、恥がおまえをおおい、おまえは永遠に断たれる。他国人がエルサレムの財宝を奪い去り、外国人がその門に押し入り、エルサレムをくじ引きして取ったその日、おまえは素知らぬ顔で立っていた。おまえもまた、彼らのうちの一人のようであった。」10, 11 他国人がエルサレムを攻めた時、エドムはエルサレムを助けようとせず、傍観してユダの敗北を喜びました。彼らの態度はイスラエルへの敵対行為であり、神はその罪のためにエドムをさばかれます。

2. 全世界に対する神のさばき 15-16

「なぜなら、主の日がすべての国々に近づいているからだ。おまえは、自分がしたように、自分にもされる。おまえの報いは、おまえの頭上に返る。」15 主の日は全世界に対する神のさばきの日です。神がすべての民をその罪に従ってさばく時、エドムもさばかれます。主の日は、新約聖書においては主イエスの再臨の日であり、最後の審判の日です。主の日はさばきの日ではなく、救いの日となるためには、主イエスを信じて救われる以外にありません。

3. 主の救い 17-21

「しかし、シオンの山には、逃れの者がいるようになる。そこは聖となり、ヤコブの家は自分の領地を所有するようになる。…救う者たちはエサウの山をさばくため、シオンの山に上る。こうして、王国は主のものとなる。」17, 21 オバデヤは主の日におけるイスラエルの救いを預言します。主の日は神の民にとっては救いの日です。オバデヤの預言は捕囚後のイスラエルの回復時に限定的に成就します。エルサレムは再建され、シオンの山には神殿も再建されます。またその後イスラエルはエドムを倒し、やがてエドムはイスラエルに併合されました。そして究極的には、イエスの再臨の時に成就します。その時、「王国は主のものとなる」という神の統治が天の御国において完全に実現するからです。その時、天のシオンの山には子羊イエスが立ち、すべての神の民が神をほめたええます。(黙示 14:1)

130. ヨナ書

小預言書の5番目はヨナ書です。ヨナはホセアやアモスと同じく北イスラエルのヤロブアム2世の時代に活躍しました。ヨナはイスラエルの領土回復を預言し、そのとおりヤロブアムはイスラエルの領土を回復させました。(Ⅱ列王 14:25) ヨナ書はヨナの身に起こったことを伝記風に書き記した書物です。ヨナ書のテーマは神の全世界の人々への救いの計画であり、その実現のためにヨナにアッシリア人伝道を命じられました。これはやがて教会が全世界に出て行って福音を宣べ伝える世界宣教の先駆けとなる出来事です。

1. ニネベ伝道の命令 1章

「アミタイの子ヨナに、次のような主のことばがあった。『立ってあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪が私の前に上って来たからだ。』しかし、ヨナは立って、主の御顔を避けてタルシシュへ逃れようとした。彼はヤッファに下り、タルシシュ行きの船を見つけると、船賃を払ってそれに乗り込み、主の御顔を避けて、人々と一緒にタルシシュへ行こうとした。」1-3 ニネベはアッシリアの首都であり、アッシリアはイスラエルの敵国でした。ヨナはイスラエルへの愛国心からアッシリアの滅亡を願っていました。ところが神はその敵国のど真ん中に行って伝道するようにと言われたのです。ヨナは神の命令を拒み、主の御顔を避けてタルシシュ行きの船に乗りました。しかしヨナの乗った船は嵐に会い、彼は嵐の海に投げ込まれてしまいました。

2. 大魚の中での祈り 2章

「主は大きな魚を備えて、ヨナを飲み込ませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。ヨナは魚の腹の中から、自分の神、主に祈った。『苦しみの中から、私は主に叫びました。すると主は、私に答えてくださいました。よみの腹から私が叫び求めると、あなたは私の声を聞いてくださいました。…しかし私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえを献げ、私の誓いを果たします。救いは主のものです。』神は魚に命じて、ヨナを陸地に吐き出させた。」1:17, 2:1, 2, 9, 10 ヨナは嵐の海でもがきながら神に救いを求めました。神はヨナの叫びを聞き、大きな魚を備え、魚はヨナを飲み込みました。ヨナは魚の腹の中で悔い改め、神に従う決心をしました。主は三日後に魚に命じてヨナを陸地に吐き出させました。ヨナの経験はイエスの復活の型となりました。マタイ 12:39-40

3. ニネベ伝道 3章

「ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った。ニネベは行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな都であった。ヨナはその都に入って、まず一日分の道のりを歩き回って叫んだ。『あと40日すると、ニネベは滅びる。』すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで粗布をまとった。…神は彼らの行いを、すなわち、彼らが悪の道から立ち返ったのをご覧になった。そして神は彼らに下すと言ったわざわいを思い直し、それを行われなかった。」2-4, 10 ヨナは神の命令に従い、ニネベに行き「もう40日するとニネベは滅ぼされる」という神のことばを伝えました。するとニネベの人たちは身分の高い者から低い者まで、王までも悔い改めました。神はニネベの人々の悔い改めをご覧になり、下そうとしておられたわざわいを思い直されました。神はどの国の人であっても悔い改める者にはあわれみ深く、その人を救われます。

4. ヨナへの教訓 4章

「ところが、このことはヨナを非常に不愉快にした。ヨナは怒って、主に祈った。」1, 2 ヨナの伝道は成功しました。しかし彼は敵国アッシリアの救いを喜ぶことができず、アッシリアを救われた神に対して怒りました。神は1本の唐胡麻を通して、ヨナの自己中心の思いを戒められました。虫にかまれて枯れた唐胡麻を惜しむヨナに主は言われました。「あなたは自分で労さず、育てもせず、一夜で生えて一夜で滅びたこの唐胡麻を惜しんでいる。ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左もわからない12万以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。」10-11 神はイスラエル人も異邦人も、すべての人を愛され、すべての人が悔い改めて救われることを願っておられます。そのために、神は愛する御子を救い主としてお与えくださいました。ヨナ書は新約時代に生きる私たちに対しても世界宣教を呼びかける書物です。

131. ミカ書 1

小預言書の6番目はミカ書です。本書の著者の預言者ミカは、南ユダのモレシエテ・ガテ出身のモレシエテ人です。彼は南ユダのヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代、イザヤと同時代に南ユダで預言しました。ミカは北イスラエルの罪を指摘して神のさばきを語るとともに、南ユダにも同じ罪があり、神のさばきが来ると預言しました。エレミヤ 26:18, 19 には、ミカの預言を聞いたヒゼキヤが、主を恐れて宗教改革を行ったことが記されています。しかし、その後ユダは墮落し、ミカの預言どおりバビロン軍によって南ユダは滅び、エルサレムは廃墟となりました。しかしミカは、神は残りの者を集め、救い主の来臨によって神の救いが完成すると預言しました。

1. イスラエルとユダの罪に対するさばき 1:1-2:11

「すべての民族よ、聞け。地とそこに満ちているものたちよ、耳を傾けよ。神である主は、あなたがたのうちで証人となり、主はその聖なる宮から来て証人となられる。…ヤコブの背きとは何か。サマリアではないか。ユダの高き所とは何か。エルサレムではないか。わたしはサマリアを野にあるがれきの山とし、ぶどうを植える畑とする。…まことにその打ち傷は癒しがたい。それはユダにまで及び、わたしの民の門、エルサレムまで達する。…エルサレムの門に、主からわざわいが下ったのだ。彼らは捕らえられて、去って行くからだ。」1:1, 5, 6, 9, 12, 16 神は全世界に向かって、イスラエルとユダの罪を証人として告発します。そして彼らの罪のゆえに、イスラエルもユダも外国軍によって滅ぼされ、人々は捕囚となって外国に連れて行かれると告げられます。

「わざわいだ。不法を謀り、寝床の上で悪を行う者。朝の光とともに、彼らはこれを実行する。自分たちの手に力があるからだ。彼らは畑を欲しがって、これをかすめ、家々を取り上げる。彼らは人とその持ち家を、人とその相続地をゆすり取る。それゆえ主はこう言われる。『見よ。わたしはこういう氏族に、わざわいを下そうと考えている。そこからあなたがたは頭をもたげることできず、胸を張って歩くこともできなくなる。それは、わざわいの時だからだ。』2:1-3 富める者は貧しい者から土地や家をゆすり取り、衣服をはぎ取り、家から追い出し、弱い者を虐待し、偽預言者を歓迎しました。ミカはこれらの罪のゆえに神のさばきが下ると告げました。

2. 残りの者への約束 2:12-13

「ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起る。13 打ち破る者は彼らの先頭に立って上って行く。彼らは門を打ち破って進み、そこを出て行く。彼らの王が彼らの前を、主が彼らの先頭を進む。」12-13 ミカの預言は神のさばきから神の救いへと変わります。神はイスラエルの残りの者を呼び集めます。そして、彼らの王である主が、打ち破る者となって捕囚の門を打ち破り、残りの者を捕囚から解放されます。また門を打ち破る王なる主は、来るべき救い主の預言でもあります。イエスは、罪の奴隷となっている私たちを罪から解放し、義の奴隷、主に属する自由人としてくださいました。(ローマ 6:17, 18、I コリント 7:22)

3. 指導者の罪 3章

「そのかしらたちはわいろを取ってさばき、祭司たちは代金を取って教え、預言者たちは金をとって占いをする。しかもなお、彼らは主をあてにして、「主は私たちの中におられるではないか。わざわいは私たちの上に及ばない」と言う。それゆえ、あなたがたゆえにシオンは畑のように耕され、エルサレムはがれきの山となり、神殿の山は木々におおわれた丘となる。」11, 12 イスラエルもユダも富む者だけでなく、政治権力のある首長たちも祭司も預言者も神を恐れない罪を犯していました。彼らは罪を犯しつつ、主は私たちの中におられるので、災いは私たちの上に及ばないと言っていました。ミカはその罪を指摘し、神のさばきを告げました。

132. ミカ書 2

1. 究極の平和 4:1-8

「その終わりの日、主の家の山は、山々のかしらとして堅く立ち、もろもろの丘よりも高くそびえ立つ。そこへもろもろの民が流れて来る。多くの国々が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。』それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。」3 主は多くの民族の間をさばき、遠く離れた強い国々に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。」1-3 この箇所はイザヤ 2:2-4 と共通する内容です。終わりの日とは、預言者が展望する歴史の最後の時代を言いますが、内容を見ると主イエスの再臨後、新天新地において完成する究極の平和の時代であることが分かります。

イザヤやミカよりも 100 年前に預言したヨエルは 3:10 で「あなたがたの鋤を剣に、あなたがたの鎌を槍に打ち直せ」と預言しました。ヨエルの預言は終末における最後の戦いの預言です。諸国の民は武装して神と神の民と戦うために集まります。その時、神はご自分に逆らう者をさばかれます。一方、イザヤやミカの預言は主イエスの再臨後の最後の審判と新天新地における究極の平和の預言です。神のさばきの後、新天新地が現れ、そこでは「彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す」とあるように、戦いはなく、究極の平和が訪れます。天のシオン、永遠の都エルサレムから、主のことばが出て、すべての救われた民はその道筋を進みます。

2. 捕囚と救い 9-13

「娘シオンよ。子を産む女のように、身もだえして、もがき回れ。今、あなたは町を出て野に宿り、バビロンまで行く。そこで、あなたは助け出される。そこで、主があなたを敵の手から贖い出される。」10 ミカの時代はアッシリアの全盛期で、バビロンがアッシリアを滅ぼすのはミカの時代の 100 年後でした。ですから、ミカのバビロン捕囚の預言は予期せぬことでした。しかし、ミカの預言は成就し、ユダの民はバビロン軍によって苦しめられ、生き残った者はバビロンに連れて行かれました。同時にミカの捕囚からの解放の預言も成就しました。主が捕囚の民を救い出し、再びエルサレムに帰ることができました。

3. 救い主の誕生 5 章

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」2 救い主はベツレヘムで生まれるとの預言です。エフラテはベツレヘムのもう一つの呼び名です。ベツレヘムはユダの氏族の中でも小さな氏族でした。ダビデはベツレヘム出身でした。そして救い主はダビデの子孫から生まれることが預言者ナタンによってダビデに告げられていました。(Ⅱサムエル 7:12, 13)そしてダビデの時代から千年後、ミカの時代から 700 年後、ダビデの子孫であるマリアとヨセフは皇帝アウグストゥスによる住民登録の勅令のため、ナザレから出身地ベツレヘムに行きました。そしてイエスはベツレヘムに生まれ、ミカの預言は成就しました。

マタイの福音書では、祭司長や律法学者たちは、ヘロデ大王からキリストはどこで生まれるのかと問われた時、ミカ書の預言からベツレヘムですと答えます。その時のマタイ 2:6 でのミカ書の引用はこうです。「ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。」マタイはミカの預言が成就したという観点から、預言の意味を解釈して自由な引用をしています。ですから、救い主が生まれたベツレヘムは決して一番小さくはないのです。また救い主イエスは良い牧者として、神の民を牧します。

「彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼う。そして彼らは安らかに住まう。今や彼の威力が、地の果ての果てまで及ぶからだ。」4 救い主は主の力と威光によって、羊の群れである神の民を飼います。その時、人々は安らかに住むことができます。救い主の与える平和は地の果ての果てにまで及びます。それは地の果てまでの世界宣教によってもたらされます。

133. ミカ書 3

1. 神が求めるもの 6章

「主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、主があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むべきではないか。」8 神に逆らうイスラエルに対して、ミカは神が人に求めておられる3つのことを告げました。一つは公正を行うことです。不正がはびこる中で、神が喜ばれるのは公正を行うことです。二つ目は誠実を愛することです。誠実(ヘセド)は、恵み、いつくしみ、あわれみ、優しさ、忠実、真実の愛とも訳されることばで、それらを愛し、行うことです。三つ目はへりくだってあなたの神とともに歩むことです。神の前に自分の小ささを認め、へりくだって神に頼り、神とともに歩むことです。この生き方をする時、神も私たちとともにいてくださいます。

「まだ、悪しき者の家には、不正の財宝と、のろわれた升目不足の枴があるではないか。不正な秤と、欺きの重り石の袋を、誤りなしとすることが、わたしにできるだろうか。富む者たちは不法で満ち、住民は偽りを言う。彼らの口の中で舌が欺く。わたしも、あなたを打って痛めつけ、あなたの罪のゆえに荒れ果てるままにする。」10-13 ミカの警告と神の忍耐にもかかわらず、依然としてイスラエルには不正、不法、偽りで満ちていました。神は彼らの罪に対して、さばきを行われます。

2. 主による勝利 7章

「しかし、私は主を仰ぎ見、私の救いの神を待ち望む。私の神は私の言うことを聞いてくださる。私の敵よ。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がる。私は闇の中に座しても、主が私の光だ。私は主の激しい怒りを身に受けている。私が主の前に罪ある者だからだ。しかし、それは、主が私の訴えを取り上げ、私を正しくさばいてくださるまでだ。主は私を光に連れ出してくくださる。私はその義を見る。」7-9 主はミカにとって「私の救いの神、私の光」です。ミカはここで自分とイスラエルを重ね合わせて語っています。神の前に罪を悔い改めれば、神はイスラエルを救い出し、神の光、神の義を見る者としてくださいます。「あなたの神、主はどこにいるのか」と言って、イスラエルをあざけた敵の前で、イスラエルは立ち上がることができるのです。

3. 回復の祈り 7:14-17

「どうか、あなたの杖で、あなたの民を、あなたのゆずりの群れを牧してください。彼らは林の中、果樹園の中に、ひとり離れて住んでいます。どうか、彼らが昔のように、バシャンとギルアデで、草をはむようにして下さい。『あなたがエジプトの地から出た日のように、わたしはくすしいわさを彼らに見せる。』」14, 15 杖は羊飼いが羊を獣から守り、牧草地に導き、道からそれる羊を正しく導くための道具です。主の羊であるイスラエルを羊飼いな主が牧してくくださるようにとミカはとりなし祈りました。それに対する神の答えは、イスラエルがエジプトの地から出た日のように、くすしいわさを見せるという救いの約束です。

4. 賛美の歌 7:18-20

「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。あなたは咎を除き、ご自分のゆずりである残りの者のために、背きを見過ごしてくくださる神。いつまでも怒り続けることはありません。神は、恵みを喜ばれるからです。もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ込んでください。昔、私たちの父祖たちに誓われたように、ヤコブにまことを、アブラハムに恵みをお与えください。」18-20 神のさばきと対照的な救いの約束を得たミカは、最後に神を賛美します。「神は恵み(ヘセド)を喜ばれるからです」とあるように、神は恵みによってイスラエルの罪を赦してください。神は人の罪に対して怒られますが、悔い改めて神のもとに立ち返る者の罪を赦し、いつまでも怒り続けることはありません。アブラハムとヤコブに与えられた祝福の契約は変わることがありません。

134. ナホム書

小預言書の第7番目はナホム書です。ナホム書のテーマはニネベのさばきです。ニネベはアッシリア帝国の首都であり、ニネベのさばきはアッシリアへのさばきと滅びの預言です。ナホム書より百数十年前に書かれたヨナ書では、ヨナの説教によってニネベは悔い改めたので、神はニネベを救われました。しかしその後、ニネベは再び高慢になり、罪を犯し続けました。実際にアッシリアは残虐非道な暴力行為をもって周りの国々を滅ぼし、征服した地域の人々を遠隔地に連れていき、諸国を恐れさせました。神はナホムを通して、ニネベをさばき滅ぼすと宣言しました。巨大な帝国を築いたアッシリアでしたが、やがてカルデア人による新バビロニアとメディア人によるメディアが台頭しました。そして前612年、バビロニアとメディアの連合軍によってニネベは陥落し、前605年にバビロニアによってアッシリアは滅び、ナホムの預言は成就しました。

1. ニネベに対する神のさばき 1 : 1－11

「ニネベに対する宣告。エルコシュ人ナホムの幻の記録。主はねたんで復讐する神。主は復讐し憤る方。主はご自分に逆らう者に復讐し、敵に対して怒る方。主は怒るのに遅く、力強い方。決して罰せずにおかれることはない。主はその道がつむじ風と嵐の中にあり、雲は御足がかき立てるほこりである。」1-3 神はヨナの時代からニネベの滅びまでの百数十年間、忍耐深く待ちました。しかしアッシリアは罪を犯し続けました。そこで神はご自分に逆らうアッシリアに対して復讐し、罰すると宣言されました。神は、雲のようなほこりがつむじ風と嵐によってかき立てられるように、アッシリアをさばくために来られます。

2. ニネベの包囲と滅亡 1 : 12－2 : 13

「主はこう言われる。彼らが壮健で、数が多くても、それでも刈り取られて去って行く。わたしはあなたを苦しめたが、もう苦しめない。今、わたしは彼らのくびきを砕いてあなたから外し、あなたのかせを打ち砕く。…見よ。良い知らせを伝える人の足が、平和を告げ知らせる人の足が山々にある。ユダよ、あなたの祭りを祝い、あなたの請願を果たせ。よこしまな者たちは、もう二度とあなたの間を通り過ぎることがない。彼らはみな、絶ち滅ぼされた。」13, 15 北イスラエルの滅亡後、南ユダもアッシリアの激しい攻撃を受け、多くの町が破壊されました。神はエルサレムを守られましたが、アッシリアはユダにとって引き続き脅威となっていました。ですからアッシリアの滅びはユダにとっては解放の良い知らせとなりました。今日、私たちはすべての人にとっての良い知らせであるキリストの福音を伝える者とされています。

3. ニネベの陥落とその理由 3 : 1－19

「わざわざだ、流血の町。すべては偽りで略奪に満ち、強奪はやまない。むちの音。車輪の響き。駆ける馬。飛び跳ねる戦車。突進する騎兵。剣のきらめき。槍のひらめき。おびたしい戦死者。山なす屍。数えきれない死体。死体に人はつまずく。」1-3 アッシリアが神のさばきを受けて滅びる理由が語られます。アッシリア軍は領土を拡大するために、多くの人々を殺し、略奪して富を増やしました。その残虐非道な行為は周辺諸国を恐れさせました。神はその罪のゆえにアッシリアをさばかれます。

「おまえを見るものはみな、おまえから逃げて言う。『ニネベは荒れ果てた。だれが彼女のために嘆くのか。』わたしはどこからおまえを慰める者を探して来られようか。おまえはテーベよりもすぐれているのか。それはナイル川のほとりにあり、水がそれを取り囲んでいる。その塁壁は海、海がその城壁」7, 8 エジプトの首都テーベは強固な都市でしたが、前663年にアッシリアによって陥落し、エジプトはアッシリアの支配下に置かれました。ナホムはテーベとニネベを比較し、神はやがて強固な町ニネベも滅ぼすと預言しました。テーベは現在のルクソールにあり、神殿や王家の墓などの遺跡が残っています。またニネベの遺跡も発掘され、当時の偉大な都市の様子を知ることができます。

135. ハバクク書

小預言書の 8 番目はハバクク書です。ハバクク書のテーマはユダとバビロンに対する神のさばきです。バビロンの滅亡を預言したハバクク書は、アッシリアの滅亡を預言したナホム書やエドムの滅亡を預言したオバデヤ書と対比されます。ハバククはエレミヤと同時代に南ユダで預言しました。ユダはヨシヤ王の死後、エホヤキム王の時代になると再び神に逆らい、律法は無視され、暴虐と不正に満ちる国となりました。ハバククがユダの罪を神に訴えると、神はカルデア人(バビロン)によってユダを滅ぼし、やがてカルデア人を滅ぼしてユダを救うと告げられました。

1. ハバククと神との問答 1 : 1 - 2 : 4

「宣告。これは預言者ハバククが見たものである。いつまでですか、主よ。私が叫び求めているのに、あなたが聞いてくださらないのは。『暴虐だ』とあなたに叫んでいるのに、救ってくださらないのは。」1, 2 ハバククはユダの罪を神に訴えているのに、なぜ神は聞いてくださらないのかと訴えました。それに対して神はハバククに答えられました。「異邦の民を見、目を留めよ。驚き、たじろげ。わたしは一つの事をあなたがたの時代に行うからだ。それが告げられても、あなたがたは信じない。見よ、わたしはカルデア人を起こす。あの強暴で俊敏な国民だ。彼らは地を広く行き巡り、自分のものでない領土を占領する。」カルデア人は前 609 年にアッシリアを滅ぼした民族です。そのカルデア人を用いてユダをさばくと告げられました。

「あなたの目は悪を見るにはあまりにもきよくて、苦悩を見つめることができないでしょう。なぜ、裏切り者を眺めて黙っておられるのですか。悪しき者が自分よりも正しい者を飲み込もうとしている時に。」13 ハバククは神の答えに対して、更なる疑問を訴えました。それは、聖なる神が、偶像を信じる強暴なカルデア人を用いて、彼らよりは正しいユダをさばくのかという訴えです。それに対して神は答えられました。「見よ。彼の心はうぬぼれていて直ぐではない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」4 神はうぬぼれて心高ぶる人をさばかれます。しかし、どんなにカルデア人が攻めて来ても、正しい人は信仰によって生きるという答えです。パウロはこのみことばを引用し、信仰義認の教理を解き明かしました。そしてルターがこの教えを再発見し、宗教改革が起きました。「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。」ローマ 1:16

2. バビロンに対するさばき 2 : 5 - 20

「おまえにかみつく者が突然起き上がり、揺り動かす者が目覚めて、おまえは彼らに略奪されないだろうか。おまえが多く国々を略奪したので、ほかのあらゆる民がおまえを略奪する。おまえは人の血を流し、地に暴虐を行った。町々とすべての住民に対して。」7, 8 神はユダをさばくためにカルデア人を用いられます。しかしその後、心高ぶり暴虐を行うカルデア人の国バビロンを滅ぼすと告げられました。実際にバビロンは前 539 年にペルシアによって滅ぼされ、キュロス王の勅令によってユダヤ人はエルサレムに帰還することができました。神は心高ぶる者を滅ぼし、信仰によって生きる義人を生かされるのです。

3. ハバククの賛美 3 章

「いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木には実りがなく、オリーブの木も実がなく、畑は食物を生み出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び踊り、わが救いの神にあって楽しもう。私の主、神は私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。」17-19 3 章はハバククの賛美です。ハバククはバビロンによってユダが滅ぼされ、さらに正しい人はその信仰によって生きるという神の救いの計画を知りました。ハバククの最初の神への訴えは、神の啓示の言葉によって解決し、神への全幅の信頼をもって神を賛美しました。たとえ、絶望のような状態になっても、正しい人はその信仰によって生きるので、「私は主にあって喜び踊り、わが救いの神にあって楽しもう」と賛美したのです。

136. ゼパニヤ書

小預言書の9番目はゼパニヤ書です。ゼパニヤ書のテーマは、エルサレムと諸外国に対する神のさばきと主の日における救いです。ゼパニヤはヒゼキヤ王の4代目の子孫で、ヨシヤ王の時代に預言しました。主に信頼したヒゼキヤの後にマナセが王になると、彼はバアル、アシェラ、天の万象を拝み、神殿に偶像の祭壇を築き、主の前に悪を行いました。神はマナセをさばき、バビロンに捕らえ移されました。しかし、バビロンでマナセは悔い改め、エルサレムに戻ることができ、偶像を取り除いて主に仕えました。マナセの子アモンが王となると再び偶像礼拝が行われました。アモンは家来たちの謀反によって殺され、ヨシヤが8歳で王となりました。ヨシヤ王第12年の時、彼は宗教改革を行い、偶像を取り除き、神殿を修理し、神殿の中で発見された律法の書に従いました。ゼパニヤの預言活動は、ヨシヤの宗教改革に影響を与えたと考えられます。

1. エルサレムに対するさばき 1章

「わたしは手をユダの上に、エルサレムのすべての住民の上に伸ばす。その場所からバアルの残りを、偶像の祭司たちの名を、その祭司たちとともに断つ。そして、屋上で天の万象を拝む者どもを、また、主に誓いを立てて礼拝しながら、ミルコムに誓いを立てる者どもを、主に従うことをやめた者ども、主を尋ねず求めない者どもを断ち切る。口をつぐめ。神である主の前で。主の日は近い。主はいけにえを備え、招いた者たちを聖別されるからだ。『主であるわたしが獣をほふる日に、わたしは首長たち、王子たち、すべて外国の服をまとった者たちを罰する。』4-8 神は偶像礼拝を行うユダの民を、異邦人を用いてさばかれます。「いけにえ」や「獣」はユダを指し、「招いた者たち」はユダを攻撃する異邦人を指します。また「外国の服をまとった者たち」とは外国の神々を礼拝するユダの人々のことです。主の日は神がユダをさばかれる日です。

2. 悔い改めの勧め 2:1-3

「ともに集まれ、集まれ。恥知らずの国民よ。御定めが行われて、その日がもみ殻のように過ぎ去らないうちに。主の燃える怒りが、まだあなたがたを襲わないうちに。主の怒りの日がまだあなたがたを襲わないうちに。すべてこの国の、主のさばきを行う柔和な者たちよ、主を尋ね求めよ。義を尋ね求めよ。柔和さを尋ね求めよ。そうすれば、主の怒りの日に、かくまってもらえるかもしれない。」1-3 ゼパニヤは神のさばきを宣告するとともに、ユダの民に悔い改めを迫りました。ヨシヤはこのゼパニヤの勧めに応じ、宗教改革を行ったと考えられます。ヨシヤの死後、ユダは再び偶像礼拝に陥り、23年後にはバビロン軍によってエルサレムは陥落し、神のさばきの預言は成就します。しかし、バビロン捕囚の民の中に、主に信頼する残りの者を備えられました。

3. 主の日における救い 3章

「そのとき、わたしは諸国の民の唇を変えて清くする。彼らはみな主の御名を呼び求め、一つになって主に仕える。クシュの川の向こうから、わたしに願い事をする者、わたしに散らされた者たちがわたしへの贈り物を携えて来る。」9-10 ゼパニヤはエルサレムだけでなく諸外国に対する神のさばきを預言しました。ペリシテ、モアブ、アンモン、クシュ(エチオピア)、アッシリアは、主の民をそしり、高ぶったため、神のさばきを受けます。しかし、その後に神の救いが来ると預言しました。諸国の民が主に祈り、主に仕えるようになるのです。この預言は、ペンテコステの日に聖霊が弟子たちに降られたことによって成就しました。聖霊に満たされた弟子たちは、やがて異邦人にもキリストの福音を宣べ伝え、諸国の民が主に祈り、主に仕えるようになりました。

4. 救いの喜び 3章

「娘シオンよ、喜び歌え。イスラエルよ、喜び叫べ。娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ。主はあなたへのさばきを取り除き、あなたの敵を追ひ払われた。イスラエルの王、主は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわいを恐れることはない。」14, 15 神のさばきの宣告で始まったゼパニヤ書は、喜びの歌声で終わります。それは「イスラエルの王、主は、あなたのただ中におられる」からです。この預言はイエスの来臨によって成就しました。今日、主は私たちのただ中におられます。ですから、私たちも心の底から主を喜び歌いましょう。

137. ハガイ書

小預言書の 10 番目はハガイ書です。ハガイ、ゼカリヤ、マラキの各書は、捕囚後の時代を取り扱っています。ハガイは中断していた神殿再建工事を再開するようにとの神のことばを伝えました。前 538 年、ペルシアのキュロス王の勅令により、最初に 4 万 2 千人の民がバビロンからエルサレムに帰還しました。彼らは帰国後すぐに神殿再建工事を開始しました。しかし、サマリア人たちの妨害に会い、工事は 18 年間中断しました。その間に民の関心は自分たちの生活に向けられ、神殿に対して無関心になりました。そのような民に対して、ハガイは今こそ神殿を建てる時だと語り、ハガイの預言によって、神殿工事は再開しました。

1. 第 1 のメッセージ 1:1-15

「ダレイオス王の第二年、第六の月の一日に、預言者ハガイを通して、シュアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルと、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアに、主のことばがあった。万軍の主はこう言われる。『この民は「時はまだ来ていない。主の宮を建てる時は」と言っている。』すると預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。『この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むときだろうか。』…万軍の主はこう言われる。『あなたがたの歩みをよく考えよ。山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、栄光を現す。』1-4, 7, 8 ハガイの預言は 4 回語られます。最初の預言では、民の神殿再建への思いが冷え、自分たちの生活に関心が向けられている中で、現状を考えよと民に促し、神殿再建工事を再開するように命じました。ゼルバベルとヨシュアそして民は、ハガイを通して語られた主のことばに聞き従い、神殿再建工事を再開させました。

2. 第 2 のメッセージ 2:1-9

「あなたがたの中で、かつての栄光に輝くこの宮を見たことがある生き残りの者はだれか。あなたがたは今、これをどう見ているのか。あなたがたの目には、まるで無いに等しいのではないか。しかし、ゼルバベルよ、強くあれ。-主のことば-エホツァダクの子大祭司ヨシュアよ、強くあれ。この国のすべての民よ、強くあれ。-主のことば-仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。…この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる。-万軍の主は言われる-この場所にはわたしは平和を与える。」3, 4, 9 神殿工事再開 1 か月後、壮大なソロモンの神殿を見たことのある老人から失望の声が上がりました。また再びサマリア人たちの妨害も起こりました。それに対してハガイは「強くあれ。仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ」との主のことばを伝えて、民を励ましました。確かにゼルバベルの神殿はソロモンの神殿に比べるとみすばらしいものでした。しかし神は「この宮のこれから後の栄光は、先のものにまさる」と約束されました。なぜなら、やがてこの神殿に救い主イエス・キリストが来られるからです。イエスは十字架の贖いを成し遂げて、神との平和を築いてくださいました。

3. 第 3 のメッセージ 2:10-19

「さあ、あなたがたは今日から後のことをよく考えよ。…種はまだ穀物倉にあるのか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結ばないのか。今日から後、わたしは祝福する。」18, 19 神殿工事を中断し、自分たちの生活を優先していた時、種を蒔いても不作が続き、収穫はわずかでした。しかし、神殿工事に献身した時から、神が民を祝福してくださるようになり、多くの収穫が与えられるとの主の約束をハガイは伝えました。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」とのイエスの約束が、ハガイの時代にもそのとおりになったのです。

4. 第 4 のメッセージ 2:20-23

「その日、-万軍の主のことば-シュアルティエルの子、わたしのしもべゼルバベルよ、-主のことば-わたしはあなたを選んで印章とする。わたしがあなたを選んだからだ。-万軍の主のことば-」23 ゼルバベルの神殿再建の働きは、救い主をお迎えする準備でもありました。神はゼルバベルを選んで印章とすると約束されました。印章は今日の実印と同じように、文書の内容を保証するために使われました。神は、ダビデの子孫として来られる救い主は、ゼルバベルの家系から生まれることを保証されました。その約束は成就し、マタイ 1:12 にはゼルバベルの名前があります。

138. ゼカリヤ書 1

小預言書の 11 番目はゼカリヤ書です。ゼカリヤはハガイの預言開始 2 カ月後、ダレイオス王の第 2 年第 8 の月から預言を開始しました。ハガイ書に記されているハガイの預言活動は 4 カ月足らずですが、ゼカリヤ書に記されているゼカリヤの預言活動は 2 年以上続きました。ハガイの預言は神殿再建に焦点が当てられましたが、ゼカリヤは民の罪にまで焦点を当て、神に対する悔い改めと従順を語りました。ゼカリヤ書は前半 1-8 章の同時代へのメッセージと、後半 9-14 章の未来に関する預言の 2 つに分けることができます。ゼカリヤ書は新約聖書に最も多く引用されている書物であり、イザヤ書に次いでメシヤ預言の最も多い書物です。またゼカリヤ書には多くの幻が記されており、エゼキエルやダニエルと共に幻を見る預言者と呼ばれています。

1. 8つの幻 1:7-6:8

① 4人の騎手 1:1-7

「夜、私が見ると、なんと、一人の人が赤い馬に乗っていた。その人は、谷底にあるミルトスの木の間に立っていた。その後ろには、赤毛や栗毛や白い馬がいた。」8「それゆえ、主はこう言われる。『わたしは、あわれみをもってエルサレムに帰る。そこにわたしの宮が建て直される。…主は再びシオンを慰め、再びエルサレムを選ぶ。』」16-17 地上の状況を見るために、4 人の騎手が遣わされ、全地は安らかで穏やかだったと報告しました。ペルシアはダレイオスのもとで治められ平和が保たれていました。一方で主の使いはエルサレムとユダの町々が困難な状態にあることを訴えました。それに対して主は、ご自身がエルサレムに帰り、神殿は再建されて、シオンが慰められると答えられました。

② 4つの角と 4人の職人 1:18-21

「私が目を上げて見ると、なんと 4 つの角があった。私と話していた御使いに『これらは何ですか』と尋ねると、彼は言った。『これらは、ユダとイスラエルとエルサレムを散らした角だ。』そのとき、主は 4 人の職人を私に見せてくださった。」18-20 4 つの角はユダとイスラエルとエルサレムを滅ぼした国々です。4 人の職人はイスラエルを滅ぼした国々を滅ぼす国々です。神はイスラエルを滅ぼした者たちをさばき、彼らを滅ぼすと語られました。

③ 測り綱を持った人 2:1-13

「私が目を上げて見ると、なんと、一人の人がいた。その手には、一本の測り綱があった。私が『あなたはどこへ行くのですか』と尋ねると、彼は私に『エルサレムを測りに。その幅と長さがどれほどあるかを見るために』と答えた。」1-2「エルサレムは、その中に人と家畜があふれ、城壁のない町のようになる。わたしが-主のことば-それを取り巻く火の城壁となる。わたしがそのただ中で栄光となる。」4-5 一人の測量士がエルサレムを測りに行きます。エルサレムは多くの人と家畜であふれ城壁の外まで広がります。主がエルサレムのただ中に住んで栄光を現し、異邦人も神の民に加わります。

④ 大祭司の衣服 3:1-10

「ヨシュアは汚れた服を着て、主の使いの前に立っていた。御使いは、自分の前に立っている者たちにこう答えた。『彼の汚れた服を脱がせよ。』そしてヨシュアに言った。「見よ、わたしはあなたの咎を除いた。あなたに礼服を着せよう。」3-4「見よ、わたしはわたしのしもべ、若枝を来させる。見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石を。一つの石の上には、七つの目がある。見よ、わたしはそれに文字を彫る。-万軍の主のことば- 一日のうちに、わたしはその地の咎を取り除く。」8-9 サタンが主に、汚れた服を着ている大祭司ヨシュアを訴えようとしてしました。汚れた服は民の罪であり、ヨシュアは民の罪に対してなすすべがありません。

それに対して神は御使いに命じてヨシュアの汚れた服を脱がせ、罪を取り除き、礼服を着せ、神の義の象徴であるターバンをかぶらせました。そして、イスラエルを祭司の国として聖別しました。この罪のきよめはやがて来られる主のしもべ、若枝である救い主イエスによってもたらされます。一つの石は救い主であり、七つの目は聖霊です。イエスは十字架でのただ一度の罪の贖いによって、完全な罪のきよめを成し遂げられました。イエスを信じる者はみな罪を赦され、義と認められ、祭司とされて、神に仕える者となるのです。

139. ゼカリヤ書 2

⑤燭台と2本のオリーブの木 4:1-14

「彼は私に言った。『あなたは何を見ているのか。』私は答えた。『私が見ると、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があります。この上部にあるともしび皿には、それぞれ七本の管が付いています。また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はその鉢の右に、もう一本は左にあります。』」2-3 ゼカリヤは燭台と2本のオリーブの木の意味を御使いに尋ねました。すると御使いは「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は言われる」6と答えました。主はゼルバベルを励まし、彼によって神殿再建を完成させること、またその事業は神の霊である聖霊によって可能となることを伝えました。

「そして再び尋ねた。『二本の金の管によって金の油を注ぎ出す、このオリーブの二本の枝は何ですか。』」…彼は言った。『これらは、全地の主のそばに立つ、二人の油注がれた者だ。』」12, 14 2本のオリーブの木は聖霊の油を注がれたユダの総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアです。彼らが燭台である民に聖霊の油を注いで神殿を完成させることができるのです。この二人はやがて王であり祭司である救い主イエスを指し示しています。イエスは私たちに聖霊を注ぎ、聖霊の力によって私たちがイエスの証し人とし、主の神殿である教会を建てるために用いられます。

⑥空飛ぶ巻物 5:1-4

「私が再び目を上げて見ると、なんと、一つの巻物が飛んでいた。御使いは私に言った。『あなたは何を見ているのか。』私は答えた。『飛んでいる巻物を見えています。その長さは二十キュビト、幅は十キュビトです。』」すると彼は私に言った。『これは全地の面に出て行くのろいだ。』」1-3 空飛ぶ巻物は長さ 8.9m 幅 4.45m という大きなもので、誰でも読めるように開かれています。それは律法を破り、罪を犯す者に対するのろいです。神は罪を犯す者をさばくと警告されました。

⑦エパ枿と女 5:5-11

「私が『これは何ですか』と尋ねると、彼は言った。『これは、出て行くエパ升だ。』」さらに言った。『これは、全地にある彼らの目だ。』見よ。鉛のふたが持ち上げられると、エパ升の中に一人の女が座っていた。彼は、『これは邪惡そのものだ』と言って、その女をエパ升の中に閉じ込め、エパ升の口の上に鉛の重しを置いた。」6-8 エパ枿は民の罪で、枿の中に座る一人の女は民の邪惡です。御使いはエパ枿に女を閉じ込めました。そして二人の女(御使い)はエパ枿をシンアル(バビロン)に運び、偶像の神殿に葬ります。神は民の罪を恵みによって取り除いてくださいます。

⑧4台の戦車 6:1-8

「私が再び目を上げて見ると、なんと、四台の戦車が二つの山の間から出て来た。山は青銅の山であった。第一の戦車には赤い馬が、第二の戦車には黒い馬が、第三の戦車には白い馬が、第四の戦車には斑毛の強い馬が、数頭ずつつながれていた。私は、私と話していた御使いに尋ねた。『主よ、これらは何ですか。』御使いは答えた。『これらは天の四方の風だ。全地の主の前に立った後に、出て行くことになる。』」1-5 8番目の幻は1番目の4人の騎手の幻に対応しています。4台の戦車は地を駆け巡り、イスラエルを圧迫する国々をさばかれます。

2. 大祭司ヨシュアの戴冠 6:9-15

「銀と金を取って冠を作って、エホツァダクの子、大祭司ヨシュアの頭にかぶらせ、彼にこう言え。『万軍の主はこう言われる。見よ、一人の人を。その名は若枝。彼は自分のいるところから芽を出し、主の神殿を建てる。彼が主の神殿を建て、彼が威光を帯び、王座に就いて支配する。その王座の傍らに一人の祭司がいて、二人の間には、平和の計画がある。』」11-13 ゼカリヤは主に命じられた通り、王冠を作り大祭司ヨシュアにかぶらせました。ヨシュアには王権と祭司職の両方が与えられます。大祭司ヨシュアは救い主を現す若枝であり、来るべき救い主イエスを象徴しています。ヘブル語のヨシュアはギリシャ語ではイエスであり、ヨシュアはイエスを指し示しています。救い主イエスが建てる主の神殿とは教会であり、異邦人も教会に加わります。イエスは王の王として王座について世界を統べ治めます。「王座の傍らに一人の祭司がいて、二人の間には、平和の計画がある」13とは、イエスは王であり祭司であることを意味しています。

140. ゼカリヤ書 3

1. 断食の質問 7 章

「ダレイオス王の第四年、第九の月、すなわち、キスレウの月の四日に、ゼカリヤに主のことばがあった。そのとき、ベテルは主の御顔を求めるために、サル・エツェルとレゲム・メレクおよびその従者たちを遣わして、万軍の主の宮に仕える祭司たちと、預言者たちに尋ねた。『私が長年やってきたように、第五の月にも、断食をして泣かなければならないでしょうか。』」1-3 ダレイオス王の第4年は前518年でエルサレム陥落の前586年から70年が経とうとしていました。エレミヤの預言どおりバビロン捕囚から70年が経つ今、もはや嘆きの断食は無意味になったのではないかとこの質問がなされました。第5の月はエルサレムが陥落し、神殿が破壊された月です。

それに対する主の答えがゼカリヤにありました。「この国のすべての民と祭司たちにこう言え。この七十年の間、あなたがたが、第五の月と第七の月に断食して嘆いたとき、本当にこのわたしのために断食したのか。あなたがたが食べたり飲んだりするとき、食べるのも飲むのも、自分たちのためではなかったか。」5-6 第7の月は、総督ゲダルヤが殺されて事態が悪化した月です。彼らは断食をしてはいましたが、主に逆らった過去の罪を悲しむのではなく、形式的に断食していました。さらに自分たちのために飲み食いする、すなわち自分中心の日常生活をした結果、断食も自分たちの不幸をただ悲しむためのものとなり、断食の意味が失われていました。

主はゼカリヤを通して、大切なのは断食をする、しないではなく、神のみこころを行い、み旨に従うことであると伝えられます。「万軍の主はこう言われる。『真実のさばきを行い、誠意とあわれみを互いに示せ。やもめ、みなしご、寄留者、貧しい者を虐げるな。互いに対して、心の中で悪を企むな。』」9-10 ところが彼らの先祖たちは心を金剛石のようにかたくなにし、主に従わなかったため、神のさばきが下り、国は滅んでバビロン捕囚となったのでした。

2. イスラエルへの祝福の約束 8 章

8章はイスラエルへの祝福の約束と7章の断食についての質問の答えが告げられます。「万軍の主はこう言われる。わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、激しい憤りをもってこれをねたむ。一主はこう言われる一わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住む。エルサレムは、真実の都と呼ばれ、万軍の主の山は、聖なる山と呼ばれる。」2-3「万軍の主はこう言われる」が8章で十回繰り返され、主の祝福の約束が確かであることが語られます。それは断食の結果ではなく、神のイスラエルに対する激しい愛が理由でした。この時神殿再建工事が進んでおり、あと2年で完成します。主は完成した神殿に帰り、ただ中に住み、エルサレムは真実の都と呼ばれます。

「万軍の主はこう言われる。勇気を出せ。万軍の主の家である神殿を建てるために基が据えられた日以来、あなたがたはこれらのことばを、預言者たちの口から聞いてきたではないか。その日以前は、人の働きに報酬がなく、家畜の働きにも報酬がなかった。出て行く者にも、帰って来る者にも、敵がいるために平安がなかった。わたしがすべての人を互いに争わせたからだ。しかし今、わたしはこの民の残りの者に対して、かつての日々のようではない。一万軍の主のことば—それは、平安の種が蒔かれ、ぶどうの木が実を結び、地が産物を出し、天が露を滴らすからだ。わたしはこの民の残りの者に、これらすべてを受け継がせる。」9-12 神殿再建工事が中断していた間、神の祝福が民に注がれませんでした。しかし神殿再建工事を再開して以来、神は民を祝福してくださいました。その祝福を彼らの子孫、残りの者が受け継ぎます。

「万軍の主はこう言われる。第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとって、楽しみとなり、喜びとなり、うれしい例祭となる。だから、真実と平和を愛しなさい。」19 第4の月はエルサレムの城壁が破られた月です。第10の月はバビロン軍によるエルサレム包囲開始の月です。バビロン捕囚後、民は年4回、国が滅び捕囚となった悲しみを覚えて断食していました。主は7章の断食についての質問への答えを与えられました。断食の日は悲しみ、嘆きではなく、主の祝福を覚える楽しみと喜びとなり、うれしい例祭となるのです。だからこそ神は、真実と平和を愛するようにと民に命じました。イスラエルの祝福は周りの国々に及び、多くの国々の民がエルサレムで主を求めるようになります。これはやがてペンテコステにおいて成就します。

141. ゼカリヤ書 4

1. 神のさばきと救い 9 章

「宣告。主のことはハデラクの地にあり、ダマスコは、それがとどまる場所。主に向けられるのは、人々の、そしてイスラエルの全部族の目。これに境を接するハマテや、非常に知恵のあるツロやシドンの目も。」1-2 宣告とは、諸国に対する神のさばきと共にイスラエルの救いについての主のことはです。ハデラクはレバノンの町、ダマスコはアラムの首都、ハマテはダマスコの南の町、ツロ、シドンはフェニキアの二大都市です。さらに 3 節以降ペリシテの町々が挙げられています。イスラエルの民は、助けを求めて主に目を向けます。神はイスラエルに敵対した町々を滅ぼされます。歴史的にはアレクサンドロス大王の征服の時に預言が成就したと考えられます。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」9 イスラエルの救いは、究極的には救い主が来られることによって成就します。9 節はイエスのエルサレム入城の預言です。この預言どおりイエスは受難週の日曜日にろばの子に乗ってエルサレムに入城し、預言が成就しました。当時、地上の王は戦いの力のしるしである馬に乗りました。しかし、イエスは柔和な者として平和のしるしであるろばに乗りました。イエスが成し遂げられる平和は、へりくだりと十字架の苦難を通してもたらされました。

「その日、彼らの神、主は、彼らをご自分の民の群れとして救われる。まことに、王冠の宝石がその地できらめく。なんという主のいつくしみ。なんという主の麗しさ。穀物は若い男たちを、新しいぶどう酒は若い女たちを栄えさせる。」16-17 良い牧者である主は、イスラエルの民をご自分の群れとして救われます。穀物と新しいぶどう酒は繁栄のしるしです。主イエスが来られた時、良い牧者であるイエスはご自分のいのちを捨て、神の民を救ってくださいました。なんという主のいつくしみ、なんという主の麗しさでしょうか。主の御名を心からたたえます。

2. 主の救い 10 章

「主に雨を求めよ、後の雨の時に。主は稲光を造り、大雨を人々に、野の草をすべての人に下さる。テラフィムは不法を語り、占い師は偽りを見る。夢見る者は意味のないことを語り、空しい慰めを与える。それゆえ、人々は羊のようにさまよい、羊飼いがいないので苦しむ。」1-2 主と偶像が比較され、主を求めるように語られます。偶像は収穫をもたらす雨を降らせることはできません。さらに偶像を求める者は空しい慰めを得るだけで、羊飼いのない羊のようにさまよいます。主こそ真の羊飼いであり、収穫の雨を与え、私たちを正しい道に導いて下さるお方です。

「わたしはユダの家を力づけ、ヨセフの家を救う。わたしは彼らを連れ戻す。わたしが彼らをあわれむからだ。彼らは、わたしに捨てられなかった者のようになる。わたしが彼らの神、主であり、彼らに答えるからだ。」6 捕囚の前、ユダの家(南ユダ)もヨセフの家(北イスラエル)も主に逆らった結果、カナン(ユダ)の地から捕囚の民となってアッシリアとバビロンに連れて行かれました。しかし、主は彼らを赦し、再びカナン(ユダ)の地に連れ戻してください。ゼカリヤの時代、いまだイスラエルに帰還していない民が大勢いました。神は外国の地にいるご自分の民を力づけ、あわれんで連れ戻してください。

「彼らは苦難の海を渡る。海では波を打ち破り、ナイル川のすべての淵を涸らす。アッシリアの誇りは低くされ、エジプトの杖は離れ去る。わたしは主にあって彼らを力づける。彼らは主の名によって歩き続ける。一主のことは。」11-12 バビロン捕囚からの帰還が出エジプトと重ね合わせて語られています。昔イスラエルの民が紅海を渡ったように、捕囚の民はアッシリアとバビロンの地から帰ってきます。またイスラエルの民の帰還は、カナンの土地に戻ることにとどまらず、主との関係の回復でなければなりません。「彼らは主の名によって歩き続ける」とは、主に信頼し、自分たちを脅かす者を恐れず、主の名をたたえながら歩み続けることです。主はご自分に信頼する者を力づけ、信仰の歩みを確かなものとしてくださいます。私たちも良い牧者である主イエスに信頼し、主の名をたたえながら歩み続けましょう。

142. ゼカリヤ書 5

1. 良い牧者と偽りの牧者 11 章

「私の神、主はこう言われた。屠られる羊の群れを飼え。これを買った者は、これを屠っても責めを覚えることはなく、これを売る者も、「主がほめたたえられるように。私は豊かになった」と言う。その牧者たちは羊をあわれまない。それは、わたしがもはや、この地の住民にあわれみをかけないからだ。」

4-6a 11 章は過去のイスラエルの罪と滅びを回顧します。ゼカリヤは主から良い牧者としてイスラエルの群れを飼うようにと言われます。イスラエルは真の牧者である主を捨てて、偽りの牧者に従ったため、屠られる(滅びる)羊となることが予告されます。「これを買った者」と「これを売る者」はアッシリアとバビロンであり、彼らによってイスラエルは滅ぼされ、捕われの身となってしまいました。

「私は羊の商人たちのために、屠られる羊の群れを飼った。私は二本の杖を取り、一本を「慈愛」と名づけ、もう一本を「結合」と名づけた。こうして私は群れを飼った。」7 ゼカリヤは2本の杖を取ってイスラエルを飼いました。慈愛の杖は神のイスラエルに対する愛を現します。結合の杖は南ユダと北イスラエルを結び付ける神の導きです。しかしイスラエルは、偽りの牧者(8 節の 3 人の牧者)に従ったため、ゼカリヤは慈愛の杖を折り、イスラエルと神との契約は破棄され、イスラエルは滅びました。また結合の杖も折られ、南北王国は決裂してそれぞれ滅びました。

「私は彼らに言った。あなたがたの目にかなうなら、私に賃金を払え。もしそうでないなら、やめよ。すると彼らは、私の賃金として銀三十シケルを量った。主は私に言われた。それを陶器師に投げ与えよ。わたしが彼らに値積もりされた、尊い価を。そこで私は銀三十を取り、それを主の宮の陶器師に投げ与えた。」12-13 ゼカリヤは羊の商人たちに、良い牧者としての自分の評価を知るために賃金を払うように求めました。すると商人たちは奴隷の代価である銀 30 シケルを渡しました。これが良い牧者がいのちを削って労苦した報酬(尊い価は皮肉)でした。ゼカリヤは主に命じられたとおりに、それを受け取らずに主の宮の陶器師に投げ与えました。

この出来事はイスカリオテ・ユダのイエスへの裏切りによって成就しました。ユダはイエスを引き渡す約束を祭司長たちとし、銀貨 30 枚をもらいました。しかしイエスが死刑になったことを後悔し、銀貨 30 枚を祭司長たちに返そうとしますが拒否され、ユダは銀貨を神殿に投げ込み、出て行って首をつりました。祭司長たちはその金で陶器師の畑を買って異国人のための墓地にしました。マタイ 27:9-10 では、これはエレミヤの預言の成就であると言われます。この出来事はエレミヤ 32:6-9 とゼカリヤ 11:12-13 の成就であり、マタイはエレミヤを預言の代表としてあげています。

2. イスラエルの回復 12 章

「主は最初にユダの天幕を救う。ダビデの家の栄えと、エルサレムの住民の栄えが、ユダ以上に大きくなるようにするためである。…その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。」7,9 12 章から 14 章は終末における主の日の預言です。「その日」という言葉が 18 回、「主の日」が 1 回使われています。主はイスラエルを攻める敵を滅ぼし、イスラエルを救われます。主の救いはエルサレムだけでなく、ユダ全体に及びます。

「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」10 この預言はイエスの十字架の死によって成就しました。(ヨハネ 19:37)ペンテコステの日にはペテロが「神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」と語ると、それを聞いた人々が心を刺され、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいのでしょうか」と聞きました。そしてその日 3 千人が罪を悔い改め、イエスを主と信じてバプテスマを受けました。悔い改めた人々にも聖霊が臨まれたのです。

「この地は、あの氏族もこの氏族もひとり嘆く。ダビデの家の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。ナタン家の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。」12 「ひとり嘆く」は悔い改めの純粹さを示しています。確かにペンテコステの日には 3 千人が悔い改めましたが、それは集団的回心ではなく、一人ひとりに聖霊が臨み、個人的に自分の罪を悔い改め、主イエスを信じてバプテスマを受けたのです。ひとり主の前で自分の罪を嘆き、個人的に主を信じる者を、主は救ってくださいます。

143. ゼカリヤ書 6

1. 打たれる牧者 13 章

「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。その日一万軍の主のことは一わたしはもろもろの偶像の名を、この地から絶ち滅ぼす。それらの名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと汚れの霊をこの国から除く。」1-2 罪と汚れをきよめる一つの泉は、私たちの罪を贖うためにキリストが十字架で流された血です。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」Ⅰヨハネ 1:7 またキリストの血は私たちの罪をきよめるだけでなく、私たちを聖化し、偶像礼拝の罪から私たちを解放してくださいます。

「剣よ、目覚めよ。わたしの羊飼いに向かい、わたしの仲間に向かえ一万軍の主のことは一。羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き、わたしは、この手を小さい者たちに向ける。」7 「わたしの羊飼」「わたしの仲間」「羊飼」とは、良い牧者であるイエスのことです。イエスは私たちの罪のために、十字架に付けられて死なれました。イエスは最後の晩餐を終え、オリーブ山に行かれた時、このみことばを引用し、イエスの死後、弟子たちが散らされると言われ、この預言が成就しました。さらにこの預言は、70 年のローマ軍によるエルサレム陥落後、イスラエルの民が散らされたことによっても成就しました。

「全地はこうなる一主のことは一。その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。わたしはその三分の一を火の中に入れ、銀を鍊るように彼らを鍊り、金を試すように彼らを試す。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『主は私の神』と言う。」8-9 70 年のエルサレム陥落の時、多くのユダヤ人がローマ軍によって殺されました。一方でユダヤ人クリスチャンは散らされた場所で福音を伝え、「これはわたしの民」と言われる教会が各地に形成されました。さらにこの預言は、14 章にある終末時代の試練を意味しています。

2. 主の救い 14 章

「見よ、主の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのただ中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。」1-2a 14 章は終末時代、キリストの再臨、千年王国、新天新地の預言です。終末時代にエルサレムは、神に敵対する国々によって攻撃されます。これは黙示録 16:16 のハルマゲドンの戦いのことと考えられます。「こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。」黙示録 19:19 にもこうあります。「また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。」

「主が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。…私の神、主が来られる。すべての聖なる者たちも、主とともに来る。」3-4, 5b この最後の戦いの時に、主イエスは再臨されます。そしてご自分に敵対する者を滅ぼされます。イエスがオリーブ山に再臨される時、復活したご自分の聖徒と共に来られます。主の再臨に続く預言は、新天新地が来る前の地上の千年王国のことではないかと考えられます。「彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める。」黙示録 20:6

「その日、馬の鈴の上には「主への聖なるもの」と刻まれ、主の宮の中の鍋は祭壇の前の鉢のようになる。エルサレムとユダのすべての鍋は、万軍の主への聖なるものとなる。いけにえを献げる者はみなやって来て、その一つを取ってそれで煮るようになる。その日、万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる。」20-21 キリストによる救いが完成する時、私たちのすべてが栄化され、すべてのものがきよめられます。大祭司は「主への聖なるもの」と刻まれた純金の板を額に着けて神の前に出ました。また祭壇の前の鉢は、犠牲のいけにえの血を注ぐために用いられる聖なる器でした。主の救いの完成においては、馬の鈴や鍋という日常生活のものすべてが聖別され、神殿には私腹を肥やす商人はいなくなり、すべてがきよめられるのです。私たちは完全にきよめられて新天新地に入ります。

小預言書の12番目、旧約聖書最後の書物はマラキ書です。マラキは、エズラとネヘミヤの宗教改革(前458～432年)の少し前に活躍したと考えられます。それはエズラ6章と7章の間の時代で、すでに神殿は完成していましたが、エルサレムの城壁は未完成でした。イスラエルに帰還した民は神殿が完成したにもかかわらず、期待するような目に見える祝福が来なかったため、再び不信仰に陥りました。マラキは問題は神の側にあるのではなく、民の側にあることを告げ、神に立ち返るようにと伝えました。マラキ書は神と民との対話形式で語られます。実際は神に対する不信仰と疑いのことば「どのように」「なぜ」「なんと」に対する神のことばをマラキが取り次いでいます。

1. 神の愛と民の不信仰 1章

「わたしはあなたがたを愛している。—主は言われる—しかし、あなたがたは言う。『どのように、あなたは私たちを愛してくださったのですか』と。エサウはヤコブの兄ではなかったか。—主のことば—しかし、わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み、」2-3 神はイスラエルに対するご自身の愛を伝えられました。しかし、民は「どのように」と言って神への不信仰を表します。それに対して神は「わたしはヤコブを愛した」と言って、一方的な神の選びによって現された愛を伝えます。また「わたしはエサウを憎み」と言って、神の祝福に無関心なエサウに対するさばきを語られました。エサウの子孫のエドムは自分たちの領地を失い、建て直すことができませんでしたが、イスラエルは約束の地に帰り、神殿を再建することができたのです。これはイスラエルに対する神の愛の現れでした。

「わたしの名を蔑む祭司たち。しかし、あなたがたは言う。『どのようにして、あなたの名を蔑みましたか』と。あなたがたは、わたしの祭壇に汚れたパンを献げていながら、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか』と言う。『主の食卓は蔑まれてもよい』とあなたがたは思っている。あなたがたは盲目の動物を献げるが、それは悪いことではないのか。足の萎えたものや病気のものを献げるのは、悪いことではないのか。」6-8 次に礼拝における献げ物についての罪が指摘されます。祭司に対して語られていますが、祭司だけでなく汚れた物を献げる民全体の罪が語られます。彼らは汚れたパン、盲目の動物、足のなえた動物、病気の動物など律法で禁止されているものを神にささげていました。神はこれらの献げ物を喜ばず、受け入れません。

2. 祭司と民の堕落 2章

「わたしの、彼との契約は、いのちと平安であった。わたしはそれらを彼に与えた。それは恐れであったので、彼はわたしを恐れ、わたしの名の前に、おののいた。…しかし、あなたがたは道から外れ、多くの者を教えによってつまづかせ、レビとの契約を損なった。一万軍の主は言われる—わたしもまた、あなたがたを、すべての民に蔑まれ、軽んじられる者とする。あなたがたがわたしの道を守らず、えこひいきをしながら教えたからだ。」5, 8-9 レビとの契約とは神が祭司と結ばれた契約です。それはいのちと平安の契約でした。しかし、祭司は神との契約を破って堕落し、さらに民を正しく導かず、民も堕落してしまいました。神はそのような祭司をさばき、民も彼らをさげすむと言われました。

「『それはなぜなのか』とあなたがたは言う。それは主が、あなたとあなたの若いときの妻との証人であり、あなたがその妻を裏切ったからだ。彼女はあなたの伴侶であり、あなたの契約の妻であるのに。神は人を一体に造られたのではないか。そこには、霊の残りがあつた。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、自分の霊に注意せよ。あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。」14-16 帰還した民の中には、周りの異邦人との商売を盛んにして富むために、イスラエル人の妻と離婚して、異邦人の妻をめとる者たちがいました。それに対してマラキは、神が制定された夫婦の一体性を説き、神が離婚を憎まれることを伝え、妻を裏切ってはならないと告げました。「あなたの契約の妻」とは神の前で誓約して結婚した妻のことです。妻を裏切ることは、神との契約を破ることにもなるのです。また「自分の霊に注意せよ」とは、不信仰になり神が憎まれることを行わないように注意せよということです。祭司だけでなく民も霊的に鈍くなり、神との契約を破りました。

145. マラキ書 2

1. 主の来臨とさばき 3-4 章

『見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。一万軍の主は言われる。』だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。』1-2 2章の終わりで民は悪を行う者に対する神のさばきがないと不平を言いました。それに対して神は、主の日には主ご自身が来られてさばきを行われることを告げました。主の前に遣わされる「わたしの使い」とは、バプテスマのヨハネの預言であり、彼は主イエスの道備えをします。主イエスは突然神殿に来られます。イエスの来臨の預言は初臨と再臨の両方の預言です。主の再臨の時には神のさばきが行われるのです。

「わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る。一万軍の主は言われる—しかし、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちは帰ろうか』と。人は、神のものを盗むことができるだろうか。だが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。あなたがたは、甚だしくのろわれている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民のすべてが盗んでいる。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。一万軍の主は言われる—わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。」神は民をご自分のもとに招くとともに、「わたしのものを盗んでいる」と言って、それは十分の一の献げ物をささげていないことによると指摘されました。そして十分の一を献げて神が民を祝福するか試すようにと語られました。マタイ 23:23 ではイエスも十分の一の献げ物の大切さに言及されました。

「そのとき、主を恐れる者たちが互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で記憶の書が記された。『彼らは、わたしのものとなる。一万軍の主は言われる—わたしが事を行う日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。』」16-17 記憶の書とは黙示録 20:12 にあるいのちの書のことです。いのちの書に名が記されている人は、神のさばきの日に救われます。こうして正しい者と悪しき者の違いを見るようになるのです。

「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は薨となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。一万軍の主は言われる—しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。」1-2 主の日が来ると、神のさばきが行われます。その時悪しき者は滅ぼされますが、主を恐れる者には義の太陽であるイエスが来られ、彼らを癒され、救われます。バプテスマのヨハネの父ザカリヤはルカ 1:78-79 で「曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、暗黒と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く」と言って、息子ヨハネの後に救い主が来られると告げました。

「見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」5-6 旧約聖書の最後は、主の日が来る前に神が預言者エリヤを遣わすという預言です。エリヤが遣わされる目的は、父である神と子であるイスラエルの関係を回復させることであり、神のさばきによって民が滅ぼされないためです。イエスは、バプテスマのヨハネを指して「この人こそ来るべきエリヤなのです」(マタイ 11:14)と言い、バプテスマのヨハネによって主の道備えをするエリヤの預言が成就したと言われました。旧約の預言はこれで終わり、預言の成就として現れるバプテスマのヨハネと救い主イエスの出現まで 450 年の中間時代を迎えることになります。そしてイエスが現れ、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」と言って宣教を開始されました。

146. 中間時代 1 <参考資料：これだけは知っておきたい聖書の歴史 CS 成長センター>

中間時代とは旧約聖書と新約聖書の間にある約 450 年間の時代です。中間時代についてはダニエル書に部分的に触れられているだけで、預言者の声は全く聞かれませんでした。一方、中間時代の出来事を知ることによって、新約聖書の背景を知ることができます。江戸時代が約 300 年であったことを考えても、中間時代の 400 年間にユダヤでは様々なことが起こったことが想像できます。新約聖書に出て来るパリサイ派、サドカイ派、熱心党は中間時代に始まりました。中間時代のユダヤには、ペルシア時代、ギリシア時代、ハスモン王朝の独立時代、ローマ時代がありました。

1. ペルシア時代 (前 536－332)

ペルシアのキュロス王によって、ユダヤ人は捕囚から帰還し、神殿再建と城壁再建が行われた時代まで旧約聖書は終わっています。エズラ 4 章を見ると、ユダヤ近辺に住む民が帰還したユダヤ人に神殿再建の協力を申し出ました。その中にサマリア人もいました。しかしユダヤ人は彼らの申し出を拒否しました。サマリア人とは、北イスラエルがアッシリアに占領された時、捕囚に行かずこの地に残った民とこの地に連れて来られた異邦人との混血民族です。その結果、サマリア人の信仰はユダヤ教と異教とが入り混じるようになりました。さらにユダヤ人から神殿再建の協力を拒否されたことから、やがてゲリジム山に神殿を建て、モーセ五書だけを正典と定めるサマリア教団が生まれました。イエスはサマリアの女に「この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます」と言われましたが、「この山」とはサマリア人の神殿があったゲリジム山のことです。

2. ギリシア時代

ギリシア時代は大きく 3 つに分けることができます。①アレクサンドロスの支配(前 332－315)②プトレマイオス朝エジプトの支配(前 315－198)③セレウコス朝シリアの支配(前 198－165) 中間時代の初め頃、ペルシアの勢力は衰えを見せ始めました。そしてマケドニアの王アレクサンドロスが前 334 年に東方遠征を始めて、ペルシアを滅ぼしました。その後彼はツロ、ガザを占領し、エジプトを制圧しました。次にパレスチナを北上しメソポタミアで勝利し、インド国境のインダス川までの広大な王国を築きました。このアレクサンドロスがダニエル 8:5 で預言された「際立った一本の角」です。

アレクサンドロスは各地にギリシア風の町を造り、ギリシア語を普及させ、ギリシア化政策を行いました。こうしてギリシア文化とオリエント文化が結合したヘレニズム文化が誕生しました。しかし、アレクサンドロスは熱病にかかり 32 歳でなくなります。彼の死後、王国は 4 人の王によって 4 つに分割され、プロレマイオス(エジプト)、セレウコス(シリア)、カッサンドロス(ギリシア)、リシュマコス(マケドニアと小アジア)となります。ユダヤは初めの 100 年はプロレマイオス朝エジプトの支配下に置かれ、次の 50 年はセレウコス朝シリアの支配下に置かれました。

プトレマイオス 1 世は初めユダヤ人に厳しく接しましたが、後に友好的になりました。プトレマイオス 2 世になるとさらに友好的になり、彼の下で旧約聖書のギリシア語訳の「七十人訳聖書」が完成しました。72 人の学者が 72 日間でモーセ五書を翻訳したとの言い伝えから「七十人訳」と呼ばれます。また彼の時代にアレクサンドリア図書館が完成し、ユダヤでは独立した政治が認められ、神殿礼拝が行われました。一方で、北のセレウコス朝シリアが勢力を増すと、エジプトはシリアと同盟を結んだり、それが破棄されると戦いが続きました。この時代の預言がダニエル 11 章にあります。

プトレマイオス 4 世の死後、シリアのアンティオコス 3 世が南下し、パレスチナを支配下に置きました。アンティオコス 3 世は初め寛大な政策を実行しユダヤ人に歓迎されました。しかし、次のセレウコス 4 世の時代に対立が起こり、その次のアンティオコス 4 世エピファネスが王となるとユダヤ人は苦難の時代を迎えました。彼は自らを神の現れと言い、神の現れ、顕現を意味するエピファネスと呼ばれました。ダニエル 8:23 の「横柄で策にたけた一人の王が立つ」や 11:21 の「一人の卑劣な者が起こる」の預言は、彼のことです。エピファネスはユダヤ人を徹底的に迫害しました。また彼は終末に現れる反キリストの型となる人です。

147. 中間時代 2

3. 独立戦争(前 166 年～142 年)

セレウコス朝シリアのアンティオコス 4 世エピファネスは、ダニエル 8:23 の「横柄で策にたけた一人の王が立つ。…彼は、驚くべき破壊を行って成功し、有力者たちと聖なる民を滅ぼす」の預言どおり、ユダヤ人を迫害しました。エルサレムを攻撃し、エルサレム神殿の祭壇に豚をささげて祭壇を汚し、ゼウスの神殿に変え、ギリシアの神への礼拝を強制しました。また割礼を禁止し、ユダヤ人のギリシア化政策を進め、逆らう者を殺害しました。このような激しい迫害の中で老祭司マッタティアスを中心とする独立戦争が始まりました。この間の出来事は旧約外典マカベア書に記されています。

マッタティアスの住む町モディンにエピファネスの使者が来て、背教を迫った時から独立戦争が始まりました。マッタティアスと彼の息子のヨハネ、シモン、ユダ、エレアザル、ヨナタンがエピファネスの使者を殺し、シリアとの戦いを呼びかけました。その結果、ギリシア化政策に従わない信仰深い人たちが彼らのもとに集まりました。しかし戦いの当初、ユダヤ人は安息日に戦わなかったので千人が殺されました。そこでマッタティアスは安息日にも戦う方針を取り、町々に築かれた偶像の祭壇を壊し、ギリシア化政策に従う同胞を打ち、シリア軍と戦いました。マッタティアスは息子のシモンを参謀に、シモンの兄のユダを指揮官に任命して死にました。

ユダはマカベア(マッカパイオス、マカパイ^{つち}: 槌の意味、鉄槌^{てつち}で打っては退くゲリラ戦を行った)と呼ばれ、各地にゲリラ戦を展開してシリア軍と戦い、大軍を破りました。そしてエルサレムを取り返し、神殿を修復し、前 164 年に宮きよめを行いました。この宮きよめを記念してユダヤでは毎年宮きよめの祭(ハヌカ)が行われるようになりました。ハヌカはクリスマスと同じ時期に 8 日間に渡って行われます。ヨハネ 10:22 以降にはイエスは宮きよめの祭りの時にエルサレムにいたことが記されています。「その頃、エルサレムで宮きよめの祭があった。時は冬であった。イエスは宮の中で、ソロモンの回廊を歩いておられた。」そしてその時「わたしと父とは一つです」と言って、ご自分が神であると言われました。

ヘンデルのオラトリオ「ユダス・マカベウス」はマカベア書 I 2～8 章のユダヤの独立戦争を題材にしています。ユダヤ人マッタティアスの死を悲しみますが、その後ユダがシリア軍と戦い勝利するという落胆から歓喜に変わる気持ちをヘンデルは表現しました。ユダの勝利を祝う歌「見よ、勇者は帰る」の曲はその後、讃美歌 130 番「喜べやたたえよ シオンの娘主の民よ」、聖歌 168 番「いざ人よほめまつれ よみがえりし勝利の主」の主イエスを賛美する歌として教会で使われています。

宮きよめの後、シリア軍はエルサレムを包囲して攻撃しましたが、ユダヤ人は屈服しませんでした。そのうちにエピファネスが死んだため、シリア軍はエルサレムから引き上げました。しかし、その後も戦いは続き、シリア軍の攻撃によって前 160 年にユダは死にました。ユダの死後、弟のヨナタンが後継者になりました。彼の下でユダヤ人は戦い、シリアの王と講和を結び、大祭司としての地位をシリアに認めさせました。しかし、正統派のユダヤ人は大祭司の家系でないハスモン家のヨナタンが大祭司となったことに衝撃を受けました。ハスモンはマッタティアスの父の名前で、ユダヤの独立時代はハスモン王朝と呼ばれます。その後、再びシリア軍の攻撃を受けて、ヨナタンは死にました。

ヨナタンの死後、シモンが後を継ぎました。彼も大祭司の地位を継ぎました。シモンはエルサレムに駐屯するシリア軍と戦い、シリア軍をエルサレムから追い出すことに成功しました。そしてシリアからユダヤの独立を認めさせ、ユダヤにおけるセレウコス朝シリアの支配が終わりました。ハスモン家の人物が大祭司の地位に就くことに疑問を持つ人も多くいましたが、ハスモン家の功績を認め、ハスモン家が大祭司の地位に就くことが認められました。

4. ハスモン王朝時代 (前 142 年～63 年)

ハスモン王朝の約 80 年間、ユダヤは独立時代を迎えました。この時代は王が大祭司を兼職し、政教一致と王朝内の権力抗争により、ユダヤは混乱と墮落に陥りました。セレウコス朝シリアからの独立を勝ち取ったシモンは前 135 年に娘婿によって殺され、彼の三男ヨハネ・ヒルカノスが王となりました。彼はユダヤの領土を拡大し、サマリアとイドマヤを支配しました。この時、ゲリジム山の神殿を破壊しましたが、サマリア人をユダヤ教に改宗させることはできませんでした。一方、イドマヤ人をユダヤ教に改宗させました。イドマヤ人はエサウの子孫エドム人のことで、後に王となるヘロデ大王はイドマヤ人です。

この時代にサドカイ派とパリサイ派の活動が始まりました。サドカイ派はギリシア化政策に迎合したグループの傾向を継ぎ、ハスモン王朝を支持しました。サドカイ派は貴族や祭司階級で宗教的政治的指導者でした。サドカイ派の教えはモーセ五書の律法を中心に置き、復活、死後のいのち、御使いや霊の存在を否定しました。パリサイ派はマッタティアスのもとに集まってユダヤ教を守ろうとした人々の傾向を継ぎ、一般民衆で律法を研究する人たちがなりました。サドカイ派は神殿中心に活動しましたが、パリサイ派は各地の会堂で律法を教えました。新約時代の律法学者はパリサイ派に属していました。パリサイ派の特徴は律法主義で、律法だけでなく旧約聖書全体とさらには先祖たちの言い伝えから律法を厳格に教えました。復活、死後のいのち、御使いや霊の存在を信じ、政治よりもユダヤ教の発展に関心がありました。「サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているからである。」使徒 23:8

主イエスの時代は、パリサイ派は一般民衆から離れた指導者階級となり、サドカイ派とともにユダヤの最高法院(サンヘドリン・70 人議会)の議員に選ばれました。新約聖書ではサドカイ派の人をサドカイ人、パリサイ派の人をパリサイ人と呼んでいます。両者ともイエスに敵対しました。「パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。」マタイ 16:1「イエスは彼らに言われた。パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい。」マタイ 16:6 ニコデモやパウロはパリサイ派に属していました。また異邦人クリスチャンにも割礼を受けさせるべきだと主張した人たちはパリサイ派から信者になった人たちでした。

さて、ヒルカノスの死後、彼の長子アリストブロスが後を継ぎました。彼は疑い深く、母を殺し、弟たちを監禁し、その一人を殺しました。彼は在位 1 年で病死しました。その後、彼の妻サロメが監禁されていた弟たちを釈放し、そのうちのヨナタンと結婚して、ヨナタンを王としました。ヨナタンは自分に反対する者を殺す恐怖政治を行ったため、ハスモン王朝に対するユダヤ人の反感がさらに強まりました。彼の死後、サロメが王になり、長男ヒルカノス 2 世を大祭司としました。ヒルカノス 2 世は大祭司でありつつ王としてふるまい、パリサイ派を優遇したため、サドカイ派の反発を招きました。そして彼の弟アリストブロス 2 世が武力によってヒルカノス 2 世を追い出し、王となりました。

いったんは王位を追われ、大祭司職も奪われたヒルカノス 2 世は、イドマヤ人のアンティパル(ヘロデ大王の父)の支援を受けて、アリストブロス 2 世との決戦に備えました。ところがローマの将軍ポンペイウスが率いるローマ軍がセレウコス朝シリアを倒し、さらにユダヤにやって来ました。アンティパルはヒルカノス 2 世のためにポンペイウスの支持を取り付け、ポンペイウスはヒルカノス 2 世を王と大祭司職に復帰させました。一方、アリストブロス 2 世はローマ軍に戦いを挑み、その結果、ローマ軍のエルサレム包囲という事態を招きました。そしてエルサレムはローマ軍に占領され、アリストブロス 2 世はローマに連行され、ヒルカノス 2 世は王位と大祭司職をはく奪されました。ポンペイウスのエルサレム占領によってユダヤの独立は終了し、前 63 年にユダヤはローマの属州となりました。

5. ローマ時代 前63～70年

ポンペイウスのエルサレム占領によってユダヤの独立は終了し、前63年にユダヤはローマの属州となりました。ユリウス・カエサルが前48年にポンペイウスに勝利し実権を握ると、カエサルはヒルカノス2世の王と大祭司の地位を認める一方、イドマヤ人アンティパルに政治の実権を与えました。アンティパルは息子のヘロデをガリラヤの知事に任命しました。ヘロデはユダヤ人との抗争に破れ、ローマに逃れ、元老院に取り入って、ユダヤの王の称号を受けました。そしてローマ軍を率いてエルサレムを支配し、前37年にエルサレムで王となり、ヘロデ大王と呼ばれました。そしてハスモン家の子孫であるマリアンネと結婚し、王の権利を強めました。

ヘロデはやがて自分の地位をうかがう恐れのある妻マリアンネと彼女の母、自分の弟や息子たち、ハスモン家の王族を次々と殺しました。こうしてハスモン王朝を滅ぼし、ユダヤ人を支配するイドマヤ人ヘロデ王家を創設しました。その一方で政治家としての偉大な事業も行いました。ユダヤ人を喜ばすための神殿の大改築、巨大な建造物建築や土木事業、飢饉の際の福祉政策などです。ヘロデ大王ほど極端な二重人格性を持った政治家は歴史の中でも少ないと言われています。東方の博士たちがヘロデのもとに来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました」と言ったとき、「これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった」とあります。マタイ2:2-3 ヘロデがイエスを殺そうとしたこともヘロデの人物像を知るとよくわかります。神はイエスをヘロデの手から守られました。

さて、ヘロデの時代に熱心党が結成されます。イエスの弟子のシモンは熱心党員でした。ルカ6:15 熱心党はユダヤ教の中でも国粋主義で、ローマからの政治的独立のためには武器を取って戦うことを信条としていました。実際6年にシリアの総督クレニオによる人口調査をきっかけに、熱心党の呼びかけでユダヤ人はローマ軍と戦いましたが、失敗しました。熱心党は人口調査がローマへの納税を目的としていたため、カエサルに納税することは神を冒瀆することになると考えて、ローマと戦ったのです。またイエスの弟子には取税人マタイもいます。取税人はローマ帝国の税金をユダヤ人から取り立てる人であり、ローマ側につく人でした。ユダヤ人は、取税人はローマの手先であり、異邦人と接触する罪人だとして嫌いました。イエスの弟子にはこのように政治的に正反対の人たちが集められました。

聖書には出て来ませんが、この時期にユダヤ教の中にエッセネ派と呼ばれる人たちもいました。当時はパリサイ派、サドカイ派、エッセネ派、そして熱心党の4つのグループが活発に活動していました。エッセネ派は主流派のパリサイ派とサドカイ派から離れ、人里離れたクムランなどの荒野に住み、修道院的な共同生活をしていました。律法の研究や厳しい戒律を守る平和的なグループでした。クムランで発見された死海写本はエッセネ派に属するクムラン教団と呼ばれる人たちが書いた写本です。死海写本は1947年以降、クムランの多くの洞窟で発見された数々の写本です。写本の中には旧約聖書の写本を初めユダヤ教に関する様々な写本がありました。これらの写本は前250年から68年頃のものと考えられます。それまでの最古の旧約聖書ヘブル語の写本(マソラ本文)よりも、1000年以上古い死海写本の発見によって、旧約聖書の信頼性が証明されることになりました。1000年以上、聖書の写本は忠実に書き写されていたのです。

イエス・キリストはヘロデ大王の時に誕生しました。ヘロデ大王の死は前4年ですので、ヘロデがベツレヘム近辺の2歳以下の男子を殺したことを考えると、イエスは前5年～前4年に誕生したと考えられています。エジプトに逃げたヨセフ、マリア、イエスはヘロデが死んだことを御使いによって知らされると、ユダヤに戻り、ナザレに行って住みました。そのためイエスはナザレ人と呼ばれるようになりました。

150. 中間時代 5

6. ローマ時代 前 63～70 年

イエス・キリストは、ローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスの時代に誕生しました。「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。」ルカ 2:1 ユダヤの人々は住民登録のために自分の町に帰ることになり、ヨセフとマリアもナザレからベツレヘムに行きました。そしてベツレヘムに到着後、マリアは月が満ちてイエスを産み、救い主はベツレヘムで生まれるという預言が成就しました。神はアウグストゥスの住民登録を用いて、救い主の預言を成就させました。当時の世界を支配したアウグストゥスも神の支配下にあったのです。アウグストゥスに至るまでのローマの歴史を見てみましょう。

ローマの将軍ポンペイウスのエルサレム占領により、ユダヤの独立は終了し、前 63 年にユダヤはローマの属州となりました。当時のローマは共和政で元老院が国を治めていました。しかし 3 人の実力者のカエサル、クラッスス、ポンペイウスが現れると、前 60 年に 3 人は協力して元老院に対抗し、ローマを統治しました。これを第一次三頭政治と呼びます。しかしクラッススは戦死し、カエサルと戦ったポンペイウスはエジプトに逃げ、そこで殺害されました。カエサルはエジプトのクレオパトラと組んでエジプトを安定させ、さらにローマで権力をふるいました。元老院はカエサルを恐れ、カエサルを暗殺しました。暗殺者の中にカエサルがかわいがったブルータスもいたので、「ブルータスよ、おまえもか」と言ったカエサルの言葉は有名です。

カエサルの遺言状によって、カエサルの甥の子のオクタヴィアヌスがカエサルの後継者となりました。そして、前 43 年に当時の実力者アントニウス、レピドゥス、オクタヴィアヌスの 3 人の共同統治が始まりました。これを第二次三頭政治と呼びます。三頭政治が始まると、カエサルの暗殺者への復讐が始まり、3 人は首謀者のブルータスとカシウスを倒しました。その後 3 人はローマの属州を分担して治めることにし、アントニウスはユダヤやエジプトを含むローマ帝国の東側を治めました。やがてアントニウスはクレオパトラと同盟を結び、オクタヴィアヌスと戦いました。前 31 年のアクティウムの戦いでオクタヴィアヌス軍に敗れたアントニウスとクレオパトラはエジプトに逃げますが、アントニウスはオクタヴィアヌス軍によって負傷した後自殺し、クレオパトラも後を追って自殺しました。そしてカエサルとクレオパトラの間に生まれたプトレマイオス 15 世(カエサリオン)はオクタヴィアヌスによって処刑され、前 30 年にプトレマイオス朝は滅び、エジプトはローマの属州となりました。

またオクタヴィアヌスはレピドゥスを引退に追い込み、三頭政治の無効を宣言しました。独裁者となったカエサルが暗殺されたことを知るオクタヴィアヌスは、元老院を尊重し、元老院から委託された形を取りながら、ローマを支配しました。そして前 27 年に元老院はオクタヴィアヌスに「崇高なる者」という意味の「アウグストゥス」という称号を与え、それ以降オクタヴィアヌスはアウグストゥスと呼ばれるようになりました。こうしてアウグストゥスはローマ帝国初代皇帝となり、ローマ帝国を支配しました。

アウグストゥスの時代、ローマ帝国の領土は、西はイベリア半島、東はユーフラテス川、北はドナウ川、南はエジプトまで拡大していました。戦いが終わり、平和が訪れたこの時代を「ローマの平和」「パックス・ロマーナ」と呼びます。しかし、この平和はローマ帝国の圧倒的な軍事力を使った「力による支配」であり、ローマは属州と周辺諸国の反乱に目を光らせるために、莫大な軍事費と人員を必要としました。これがやがてローマ衰退の原因の一つとなりました。カイサリアはユダヤ属州の州都で 1 軍団 6000 人の歩兵(600 人の歩兵 10 隊)と 700 人の騎兵が駐屯し、エルサレムには軍団の一部が駐屯していました。イエスを捕らえたローマ軍の中には千人隊長がいました。ヨハネ 18:12 またイエスが十字架に付けられた時、百人隊長は「この方は本当に神の子であった」と証言しました。マタイ 27:54

151. ユダヤ滅亡までの歴史

ヘロデ大王の死後、領土は 3 人の息子たちに三分割され、アルケラオはユダヤ・サマリア・イドマヤ、ヘロデ（ヘロデ・アンティパス）はガリラヤ、ピリポは北東部とヨルダン川東岸を領主として治めました。アルケラオは父に似て残忍で、有力者 3 千人を殺しました。しかし、彼は失政を重ね、6 年に追放され、その後ユダヤはローマの属州となり、ローマ総督が治めました。ヘロデ・アンティパスはバプテスマのヨハネを殺し、イエスの裁判の際にイエスを侮辱しました。マタイ 14:10、ルカ 23:11 イエスを十字架刑にしたポンテオ・ピラトはユダヤ属州を治めるローマ総督（在任は 26 年～36 年）でした。

その後ヘロデ大王の孫のヘロデ（ヘロデ・アグリッパⅠ）は 41 年にローマからユダヤ全土を治めることを認められました。彼は「神の声だ。人間の声ではない」と会衆が叫び続けた時、虫に食われて 44 年に死にました。使徒 12:20-23 彼が死ぬとユダヤは再びローマ総督によって治められました。パウロがカイサリアで捕らえられていた時の総督はフェストゥスで、パウロはカエサルに上訴しました。数日後、フェストゥスのもとにアグリッパ王（ヘロデ・アグリッパⅡ、アグリッパⅠの息子）が訪ねて来て、パウロの話の聞きますが、「おまえはわずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」と言い、信仰について関心を持ちませんでした。使徒 26:28

その後、66 年から 73 年までユダヤ戦争が勃発しました。66 年はⅡペテロが書かれた頃で、ペテロはこの手紙をローマで書き、その後皇帝ネロの迫害によって殉教しました。ローマに支配されていたユダヤ人は次第に不満を募らせていました。そのような中で、当時のユダヤ属州総督フロルスがエルサレムの整備のための資金として神殿の宝物を持ち出し、これをきっかけにエルサレムで暴動が起きました。ローマ側は暴動の首謀者を逮捕し処刑しようとしませんが、逆に暴動はユダヤ各地に広がり、ローマ軍は各地で敗北しました。そこで皇帝ネロは將軍ウェスパシアヌスにローマ軍 3 個軍団を与えてユダヤの鎮圧に向かわせました。その結果、ローマ軍は各地のユダヤ人の反乱を鎮圧して、エルサレムに迫りました。

一方、ローマでは 68 年に皇帝ネロへの反乱がおこり、ネロは自殺して 31 歳の生涯を終えました。69 年には 4 人のローマ人が次々に皇帝に即位し、さらに反乱が起こり、ローマは大混乱となりました。この時、ユダヤ人の反乱を鎮圧するローマ軍司令官ウェスパシアヌスもローマに戻り、ユダヤ戦争は一旦膠着状態になりました。そしてウェスパシアヌスがローマの混乱を治めて 69 年に皇帝に即位しました。皇帝に即位したウェスパシアヌスは懸案のエルサレム陥落を目指して、ティトゥスを攻略に向かわせました。70 年、ローマ軍の前にユダヤ人たちは敗北し、エルサレム神殿は火を放たれて炎上し、エルサレムは陥落した。ティトゥスはエルサレム神殿の宝物を戦勝品として携えてローマに凱旋しました。ティトゥスの凱旋門には神殿の宝物を運ぶローマ兵の姿が刻まれています。

エルサレムが陥落すると、熱心党员を中心とする 1000 人が死海の西側にそびえる高さ 400m の要塞マサダに籠城してローマ軍に抵抗しました。マサダはヘロデ大王が建てた要塞離宮で、麓からは一本の細い道を通らなければ頂上に到達できません。15,000 人のローマ軍は抵抗するユダヤ人に対して苦戦を強いられました。そこでローマ軍はユダヤの捕虜と奴隷を大量動員して土を運び、山の西側の崖を埋めて 2 年がかりで山頂に届く道を建築しました。73 年のローマ軍突入の前日、もはやこれまでと悟ったユダヤ人は降参して奴隷になることを望まず集団自決をしました。ローマ軍は勝利し、マサダ陥落をもってユダヤ戦争は終了しました。現在マサダは世界遺産になり、イスラエル軍の入隊式はマサダで行われます。

132 年から 136 年まで再びユダヤ人の反乱が起きました。これを第 2 次ユダヤ戦争と呼びます。当時ユダヤ人は各地に離散するとともにユダヤに残る人たちもいました。130 年に皇帝ハドリアヌスがエルサレムを訪問し、廃墟となったエルサレム神殿を再建し、同じ場所にギリシア神殿も建てると告げました。また割礼を禁止しようとしたことから、各地のユダヤ人たちが蜂起しました。一時はユダヤ人有利に戦況が進みましたが、ローマ軍がユダヤ人反乱軍に勝利しました。ハドリアヌスはユダヤ人の反乱の根底にユダヤ教があることを覚え、ユダヤ教指導者を殺し、律法の書物を廃棄し、ユダヤ暦を禁止しました。またユダヤの名前を廃止し、シリア・パレスチナと変更しました。パレスチナはペリシテ人から取った名前です。初代教会の歴史の背後にあるユダヤ人たちの苦難を知ることができます。

152. 正典の形成

1. 旧約聖書正典の形成

「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」Ⅱテモテ 3:16
「旧、新約聖書 66 巻は、すべて神の靈感によって記された誤りのない神のことばであって、神の救いのご計画の全体を啓示し、救い主イエス・キリストを顕し、救いの道を教える信仰と生活の唯一絶対の規範である。」同盟教団信仰告白第 1 条 1. 私たちは旧約聖書 39 巻、新約聖書 29 巻、合計 66 巻をキリスト教会の正典として持っています。ではどのようにして 66 巻の書物が正典となったのでしょうか。まず旧約聖書 39 巻の正典の形成を見てみましょう。

結論から言うと、旧約聖書 39 巻は神の靈感によって記された書物なので、39 巻には初めから正典性が備わっていました。ですから、正典となるべき書物だけが正典として結集したということです。別の言い方をすると、旧約聖書を 39 巻と定めたのは、ユダヤ教の会議によって決めたのではなく、神のことばとして書かれた書物だけを、聖霊に導かれた人たちが結集し、39 巻となったということです。

旧約聖書は前 1500 年から前 400 年頃までの 1100 年の間の様々な時代に、様々な著者によって書かれました。ですからユダヤ人はそれぞれの時代に神の靈感によって書かれた書物を神のことばとして受け入れていきました。そのような長い年月の過程を通して 39 巻が結集したのです。最初に神のことばとして受け入れられた書物は律法と呼ばれる最初の 5 巻です。これはモーセが書いたのでモーセ五書と呼ばれます。「モーセがこのみおしえのことばを、その最後まで書物に書き終えた時、モーセは主の契約の箱を運ぶレビ人に命じた。『このみおしえの書を取り、あなたがたの神、主の契約の箱のそばに置きなさい。その場所で、あなたがたに対する証しとしなさい。』」申命 31:24-26

その後も旧約聖書各書が書き記されていきます。「サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書にして主の前に納めた。」Ⅰサムエル 10:25 ダビデは言いました。「主の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。」Ⅱサムエル 23:2 ユダの王ヨシヤの時代、神殿から律法の書が見つかりました。「祭司ヒルキヤは、モーセを通して閉められた主の律法の書を見つけた。」Ⅱ歴代 34:14 エレミヤの書いた巻物をユダの王エホヤキムが焼いた時、再び巻物に主のことばを書き記しました。「バルクはエレミヤの口述に従って、彼に語られた主のことばを、ことごとく巻物に書き記した。」「エレミヤは、もう一つの巻物を取り、それをネリヤの子、書記バルクに与えた。彼はエレミヤの口述により、ユダの王エホヤキムが火で焼いたあの巻物のことばを残らず書き記した。さらに同じような多くのことばもそれに書き加えた。」エレミヤ 36:4, 32

預言者は神のことばを語りました。「神である主はこう言われる。」イザヤ 7:7 バビロン捕囚から帰還した民は、エズラのもとに集まったレビ人たちから神のことばを聞きました。「彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。」このように旧約聖書の各書は神の靈感によって記された書物であったので、たとえ人々からの反対を受けても神に守られ、信仰者によって神のことばとして受け入れられていきました。

旧約聖書 39 巻が神のことばとして人々から受け入れられたしるしに、その書物が預言者の権威を帯びていることにありました。預言とは神のことばを預かるという意味で、預言は神のことばであるしるしです。「預言は、決して人間の意思によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」Ⅱペテロ 1:21

ヘブル語旧約聖書は私たちが持っている聖書とは内容は同じでも順番が違い、24 巻で 3 つに分けています。まずトーラー(律法)はモーセ 5 書です。モーセは主が顔と顔を合わせて語られた偉大な預言者でした。次にネビーム(預言者)で預言者の書物です。最後にケトゥビーム(諸書)で詩篇、箴言、ダニエルなどが入っています。ダビデ、ソロモン、ダニエルは預言者ではありませんでしたが、預言の賜物を持っていました。ルカ 24:44 では旧約聖書を「モーセの律法と預言者たちと詩篇」と呼んでいます。詩篇は諸書の最初の書物なので諸書を指していました。前 5 世紀に預言者的靈感が終了した後、比較的早い時期に旧約聖書正典が結集されたと考えられています。

153. 正典の形成

2. 新約聖書正典の形成

新約聖書 27 巻は旧約聖書よりも短期間で書かれますが、様々な著者が別々の場所や年代に書きました。新約聖書も旧約聖書と同じように、神の靈感によって記された書物なので、27 巻には初めから正典性が備わっていました。ですから、正典となるべき書物だけが正典として結集したということです。別の言い方をすると、新約聖書を 27 巻と定めたのは、教会会議が決めたのではなく、神のことばとして書かれた書物だけを教会が受け入れたので 27 巻となったということです。

ヘブル 1:1 で「神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で語られましたが」とあります。これは旧約聖書を指しています。次の 1:2 の「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました」は新約聖書の土台となるイエスの教えを指しています。その御子は 1:3 にあるように「神の栄光の輝き、神の本質の完全な現われ」です。イエスは「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです」と言われ、イエスご自身が神のことばを語っていると言われました。ヨハネ 7:16 またイエスは「天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません」と言われました。マタイ 24:35 それは「草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことばは永遠に立つ」とあるように、イエスのことばは神のことばであるということです。イザヤ 40:8

イエスは「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます」と言われました。ヨハネ 16:13 このイエスの約束はペンテコステの日に成就し、弟子たちは聖霊に満たされました。それによって彼らはイエスの教えと行いを思い起こし、聖霊によってその意味を悟りました。それが書き記されて新約聖書になったのです。パウロは I テサロニケ 2:13 で「あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れたからです」と言いました。使徒たちは旧約の預言者たちと同様、神のことばを伝えているという自覚を持っていました。そのような神のことばが聖霊の導きによって新約聖書として結集したのです。

新約聖書の各書には、先に書かれた書物を神のことばとして引用している箇所があります。「その手紙でパウロは、ほかのすべての手紙でもしているように、このことについて語っています。その中には理解しにくいところがあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所と同様、それらを曲解して、自分自身に滅びを招きます。」II ペテロ 3:16 ここでペテロはパウロの手紙に言及し、さらに「聖書の他の箇所と同様」と言って、パウロの手紙を旧約聖書と同等に扱っています。また I テモテ 5:18 でパウロは「聖書に『脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない』また『働く者が報酬を受けるのは当然である』と言われているからです」と言っています。前者の引用は申命 25:4 ですが、後者はマタイ 10:10 とルカ 10:7 です。ということはパウロは、福音書を聖書として認めているのです。

旧約聖書のしるしは預言者の権威でしたが、新約聖書のしるしは使徒の権威でした。使徒が直接書いた書物以外の書物も使徒の権威を認めることができます。マルコはペテロから「私の子」と呼ばれ、ペテロから聞いたことを福音書にまとめたと考えられます。ルカはパウロと行動を共にし、パウロの使徒としての権威の下で福音書を書いたと考えられます。ヤコブやユダはイエスの兄弟であり使徒たちと交わり、使徒の権威の下で手紙を書いたと理解できます。ヘブル書は著者が不明ですが、内容から使徒の権威を認めることができます。

新約聖書 27 巻を正典として全教会が受け入れるまでにはある程度時間がかかりました。それはすべての地域の教会が 27 巻を持つまでに時間がかかったことにあります。ある地域の教会は他の地域の教会が持っている書物を持っていなかったもので、持っていなかった書物を正典として認めるのに時間がかかったのです。397 年のカルタゴ会議で新約聖書として 27 巻を挙げましたが、この会議で 27 巻を正典と決めたのではなく、以前からすでに定まっていた 27 巻を正典として記録したのです。

154. 外典

外典とは旧新約聖書 66 巻以外の正典から除外された書物のことで、旧約外典と新約外典があります。新約外典はどの教派も正典として認めていません。一方、旧約外典はカトリック、聖公会、正教会が正典として認め、プロテスタントは認めていません。「普通に経外典と呼ばれる書は、神の靈感によるものでないから、聖書の正経典の一部ではない。したがって神の教会内では何の権威もなく、他の人間的な文書と違ったどのような仕方でも是認されたり使用されてはならない。」(ウエストミンスター信仰告白第 1 章 3) 聖公会(英国国教会)は外典を正典として認めながら、外典から教義を作ってはならないと定めています。「他の本(旧約外典)は、教会での生活の模範と行動の教えに読み取ることができるが、教義を作るのに適用してはならない。」(39 信条第 6) 正教会はカトリックと聖公会が認めていない外典 3 巻も正典として認めています。

日本聖書協会が 1987 年に発行した新共同訳は外典を旧約聖書続編と呼び、旧約聖書と新約聖書の間に旧約聖書続編を入れた聖書と続編を入れない聖書の両方を発行しました。2018 年発行の聖書協会共同訳も同様の方法を取っています。これらの聖書は教会一致運動(エキュメニズム)の流れを受けたプロテスタントとカトリックの共同翻訳のため、外典を正典と認めるカトリック・聖公会・正教会と外典を正典と認めないプロテスタントの両者が使えるようにしました。その結果、それまでプロテスタント信者は外典に触れる機会がなく、外典についての理解不足のため、若干の混乱が見られます。またカトリックでも続編という扱いに多少の戸惑いがあり、カトリックフランシスコ訳では、旧約聖書の中に外典各書を組み入れています。

プロテスタントが旧約聖書に外典を入れなかった理由は、宗教改革における聖書翻訳に見出すことができます。それまで教会で用いられていた聖書はカトリックのウルガダ訳ラテン語聖書でした。この聖書は 70 人訳ギリシア語聖書に基づき、外典が含まれていました。一方、聖書のみを信条とするルターは、聖書をだれもが読めるように自国語に翻訳する必要を覚え、ドイツ語への翻訳を始めました。その中で分かったことは初代教会が用いた旧約聖書には外典が含まれていないことでした。ルターを初め宗教改革者は、ヘブル語聖書に含まれている書物のみを旧約聖書とし、それ以外の書物を外典としました。それに対して、カトリック教会はトリエント公会議(1545～1563)を開き、改めて外典を正典と認めました。

外典の問題点はいくつかありますが、一番の問題点は聖書にはない教えが外典にあることです。宗教改革で問題となった免罪符(贖宥状)も外典から派生したカトリックの教えです。なお免罪符は問題が多いため、トリエント公会議で免罪符の売買は禁止されました。カトリックには煉獄の教えがあります。煉獄とは天国と地獄の間にあり、天国に入る前に、罪の汚れを完全にきよめ、残された償いを果たす場所のことです。その根拠として外典のマカベヤ書 II 12:45 が挙げられます。マカバイ II 12:44-46「もし彼が戦死者の復活することを希望しなかったなら、死者のために祈るのは余計なことであり、愚かしいことであつたろう。だが、彼は敬虔な心をもって眠りについた人々のために備えられた、素晴らしい報いについて思い巡らしていた。その思いは清く、敬虔であつた。彼が、死者のためにこの贖罪の献げものをささげたのは、彼らが罪から解かれるためであつた。」

この箇所には煉獄の言及は直接的にはありませんが、復活を待ち望む死者のための祈りや死者のための贖罪の献げ物が記されています。カトリックはこの箇所から、天国に行くまでの中間的な場所があると理解し、煉獄の教理を作りました。聖人や殉教者は死後直接天国に行けますが、多くの信者は天国の約束を与えられているものの、罪のきよめと償いが終わっていないために、まず煉獄に行き、苦しみを伴う罪のきよめと償いの期間を持たなければなりません。そこで、煉獄にいる死者の苦しみを短くし、早く天国に行けるように、この世の信者が祈りなどによって助けるのです。

「この世における信者は、ミサ聖祭、祈り、善行、免償などをもって煉獄の靈魂を助けることができます。すなわち、これらによって煉獄の靈魂の果たすべき償いがゆるされて、天国の栄光に入ることができるように神に願うのです。」(カトリック要理 50 の 3) 免償とは罪の償いが免除されることで、祈り、善行、告白、聖体拝領などにより、キリスト並びにマリアと諸聖人の徳によって与えられます。信者が受けた免償は死者に譲ることができます。免罪符も免償の一環として行われました。カトリックの死者のための祈りは、キリスト並びにマリア、諸聖人、御使いの取り次ぎによって祈ります。このように外典の箇所から次々にカトリック独自の教理が生まれました。プロテスタントは聖書 66 巻と 66 巻が教える教理のみを信じるため、外典も外典から導き出された教えも信じません。